

昭和44年度

地力保全基本調査成績

〔網走湖畔地域・網走市〕

北海道立中央農業試験場

残部加算
付録してある。

土壤改良科



序

現状における土地生産力は諸種の土壌的阻害要因によつて十分にその地力を発揚できない場合が少くないのみならず、一方では剝脱要因もあつてその地力は消耗低下しつつある。したがつてこれら阻害要因を排除して合理的かつ適切な地力保全の対策を推進し、もつて当面の農業構造改善の基盤整備に資するため、昭和34年より農林省農政局の助成を得て基本的土壌調査分類を実施している。

本調査成績書は昭和44年度に行つた12地域、16市町村のうち網走湖畔地域（網走市）をとりまとめたもので、ここにこれを公表し営農安定の資に供する次第である。

現地調査の遂行に際して御協力を得た関係市町村、農業協同組合ならびに農業改良普及所の関係各位に対して、深く感謝の意を表す。

昭和45年3月

北海道立中央農業試験場長

和田忠雄

調査並びに取まとめ方法

本調査は凡そ100ha以上の集団になつている農耕地および付帯地を調査対象とし、調査および取まとめに当つては、夫々下記の資料に基づいた。

1. 土壌断面調査および現地での営農状況は地力保全対策資料第6号(昭和36年9月、農林省振興局農産課)によつた。
2. 土壌統および区の設定並びに土壌生産力可能性等級基準は、地力保全対策資料第12号(昭和40年3月、農林省農政局農産課)および水田土壌統設定第1次案(昭和38年12月 農技研化学部土壌第3科)による。

土壌統および土壌区の設定に当つては、北海道農業試験場農芸化学部土壌第1研究室の土性図を参照し、共同調査によつて取まとめた。

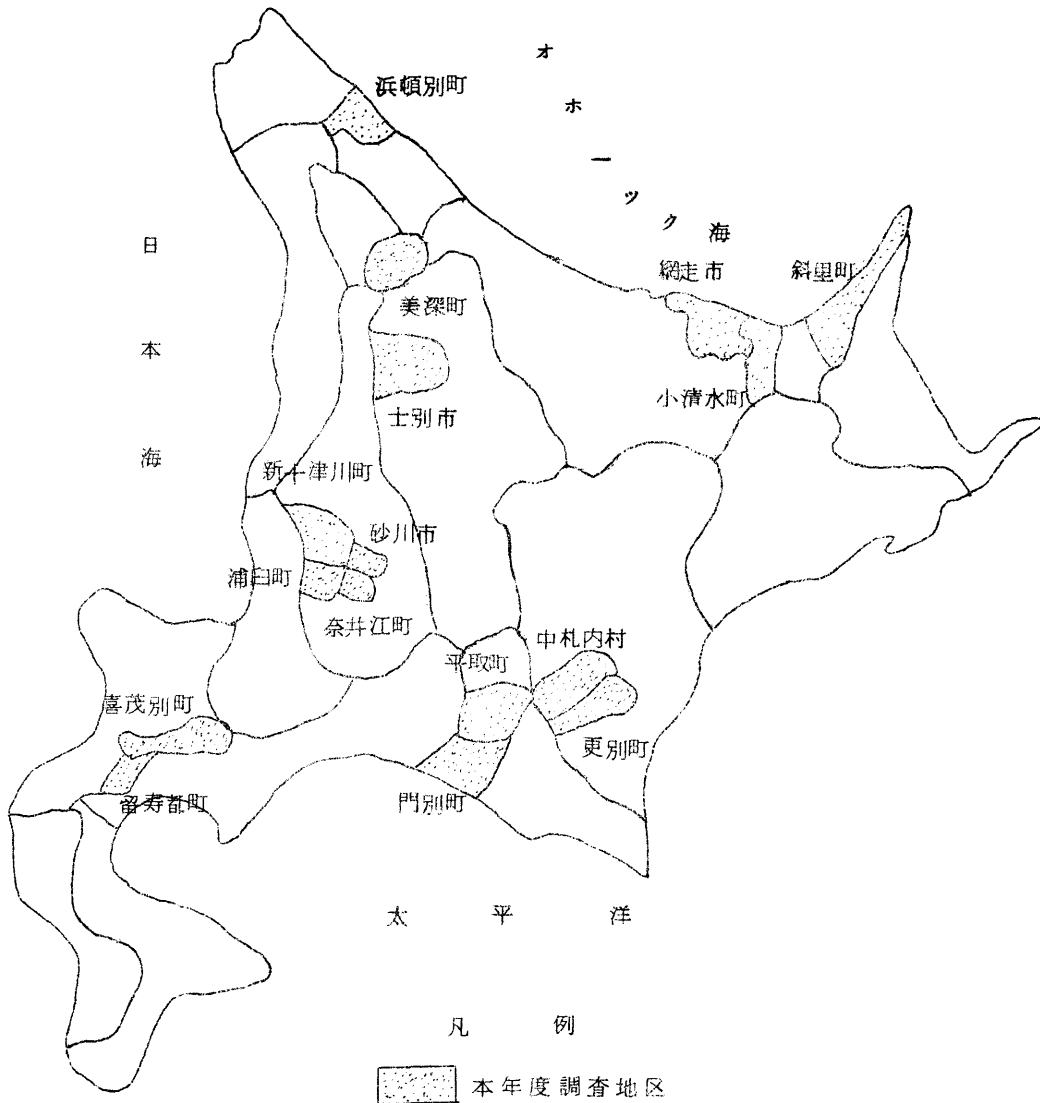
本調査に従事した担当者は下記の通りである。

中央農試化学部	部長	森	哲郎
土壌改良科	長	後藤	計二
"	第1係長	小林	荘司
"	研究職員	水元	秀彰
"	"	伊東	輝行
"	"	木村	清
"	"	松原	一実
"	第2係長	山口	正栄
"	研究職員	小林	茂
"	"	宮脇	忠
"	"	山本	晴雄
"	"	高橋	市十郎
"	"	上坂	晶司
十勝農試土壌肥料科	"	菊地	晃二

十勝農試	土壤肥料科	研究職員	関	谷	長	昭
"	"	"	横	井	義	雄
上川農試	"	"	野	崎	輝	義
"	"	"	土	居	晃	郎
北見農試	"	"	秋	山	喜	三郎
天北農試	"	"	関	口	久	雄

調 査 地 域 一 覧

調査地域名	該 当 郡市町村名	農 地 面 積 (調 査 対 象 面 積)		既 調 査 面 積		本 年 度 調 査 面 積	
		水 田	畑	水 田	畑	水 田	畑
樺 戸	新十津川町	4,949	1,256	—	—	4,949	1,256
石狩川下流	浦 白 町	2,002	1,141	—	—	2,002	1,141
空 知 中 部	奈 井 江 町	2,216	492	—	—	2,216	492
"	砂 川 市	1,344	1,036	—	—	1,344	1,036
羊 蹄 山 麓	留 寿 都 町	60	2,675	—	—	—	2,675
"	喜 茂 別 町	232	2,003	—	—	232	2,003
日高北部内陸	平 取 町	1,244	2,364	—	—	1,244	2,364
日 高 沿 海	門 別 町	1,162	3,183	—	—	1,162	3,183
斜 里	斜 里 町	2	9,900	—	—	—	9,900
"	小 清 水 町	—	8,852	—	665	—	8,187
網 走 湖 畔	網 走 市	87	13,794	—	3,000	—	10,794
士 別	士 別 市	7,212	7,009	3,000	3,800	4,212	3,209
上 川 北 部	美 深 町	1,016	4,535	—	409	1,016	4,126
日高山脈東山麓	更 別 町	—	9,180	—	—	—	9,180
"	中 札 内 村	—	6,428	—	—	—	6,428
頓 別	浜 頓 別 町	—	1,292	—	—	—	1,292



網走湖畔地域

1. 地区の概況

1) 位置及び調査面積

(1) 位置 網走市

(2) 調査面積 (ha)

郡市町村名	農地総面積				調査対象面積				
	水田	普通畑	樹園地	計	水田	普通畑	樹園地	計	
網走市	87	13,638	156	13,881	0	13,638	156	13,794	
郡市町村名	過年度調査面積				本年度調査面積				備考
	水田	普通畑	樹園地	計	水田	普通畑	樹園地	計	
網走市	0	3,000	0	3,000	0	10,638	156	10,794	

2) 気象

オホーツク海面の影響をうけるため農期間を通じて冷涼で、特に夏期に気温が低く経過する年が多い。降水量は農期間では全般に少なく、日照時間が多い。網走気象台における気象状況は次の通りである。

項目		月								
		4	5	6	7	8	9	10	11	
気温 (℃)	平均	3.4	8.6	12.9	17.5	20.1	15.8	9.9	2.9	
	最高平均	8.0	13.2	16.8	21.0	23.4	19.9	14.6	7.1	
	最低平均	-0.5	4.1	8.7	13.5	15.9	12.0	5.8	-0.7	
降水量 (mm)	平均	52.6	71.3	65.1	95.8	86.9	131.4	94.4	81.0	
	一日最多量	55.1	77.6	62.7	87.7	106.6	103.8	70.4	58.5	
日照時数		190.8	188.0	199.7	199.4	209.0	174.8	175.8	127.7	
湿度(%)		75.0	77.1	87.4	86.5	85.9	83.3	76.8	73.6	
風速(m/S)		3.4	3.1	2.2	1.9	2.1	2.6	3.2	3.6	
最多風向		S	S	S	S	S	S	SW	SW	
霜			V・24					X・12		

3) 土地条件

(1) 地形

市の東部はオホーツク海に面し、ゆるやかな傾斜をなす標高20～80mで、平均1:50～80の広大なかつ平坦な台地をなしている。そして台地を小河川が開折して狭長な低地を形成している。海岸には砂丘が発達し、砂丘と台地間には蘆葦沼、藻琴沼が存在し、小河川はこれら両沼に注いでおり、何れも低標高でまだ原始河川の状態である。ついで市の中央部は東部の台地より一段標高が高く50～180mの台地および丘陵地形をなし、西側に網走湖、能取湖が存し、丁度分水嶺をなして能取岬に及んでいる。西部は網走湖、能取湖にはさまれた台地および能取湖の西側に台地が存し、標高は20～50mの平坦な地形を呈し、さらに標高200m内外の丘陵地形に漸移している。これら台地は東部同様小河川によつて開折された低地があつて低湿地となつている。これら台地は本市の主要な農耕地となつており、低地は過湿な状態のところが多く利用率は低い。

(2) 地質

まず東部の台地は基盤が海成段丘であるが、南部にはカルデラである屈斜路湖が存し、この屈斜路の火山砕屑層によつて厚く被覆された広大な地域である。これら火山砕屑物は層位的追跡によつて10枚に及ぶ柱長質火山砂屑流堆積物の累計からなり、さらに多数の降下軽石、火山灰層を伴つている。これらは洪積世中期から末期にいたるものとされている。

(5万分の1地質図中説明書—藻琴山—)。これら砕屑物の上部には層厚10～15cmの雌阿寒岳火山灰b層、層厚5～20cmのカムイヌプリ岳火山灰5a層、最上部には雌阿寒岳Ia層、IIa層が堆積し、耕地ではこれら火山灰層が混合されて作土層となつている。これら台地を開折して藻琴川、丸万川、オンネナイ川、浦士別川その他小河川が存在し、流域土壌はこれら砕屑物を主材としていて一般に土性は粗い。また中、下流域は低湿地であるため、ヨシ、ハンノキからなる低位泥炭からなり、地表には上記雌阿寒岳、カムイヌプリ岳の火山灰層が泥炭中に狭在している。

中央部は基盤が火成岩(主として安山岩、集塊岩)或は三紀層の水成岩からなり、中央部のうち南部の屈斜路に近い地域はやはり屈斜路の火山砕屑物によつてほぼ全面覆われているが、堆積は東部台地と異なり堅密な盤層を呈するところが多く、かつ一般に地表の腐植含量は10%前後が多い。斜面は侵蝕によつて火山砕屑物と下層の安山岩質土壌が混合し、5～15cm大の安山岩礫を僅かに介在し、粘性もやゝ強い。中央部の北部は三紀層の水成岩が主体で火山砕屑物には覆われていない。しかし、その東側には同一の火山砕屑物が海岸に沿つて細長く能取岬にまで及んでいる。中央部の南部には雌阿寒岳、カムイヌプリ岳の市東部と同一の火山灰層が地表を被覆するが、特にカムイヌプリ岳火山灰5a層は2～5cmと薄層に

なり、中央部の北部は雌阿寒岳火山灰b層、I a層、II a層のみの堆積である。

市の西部地域のうち網走湖と能取湖にはさまれた台地は、標高が東部地域と同様で、中央部に比して低く、ほぼ全域が火山砕屑物に覆われ、中央部と同様下層は堅密な堆積で腐植含量が多い。さらに能取湖の西側には湖面に細長く同様の台地土壌が分布している。その背後には海成段丘が存在し、さらに三紀層の水成岩からなる残積土に漸移している。これら海成段丘、火山砕屑物を開析して小河川が存在するが、流域土壌は水成岩を主材としていて一般に土性細かく粘性が強いのが特徴である。

(3) 侵蝕状況

本市は春季に季節風が強く一般に風蝕をうける。特に本市の東部地域は土壌が軽しようであり表土はかなり薄くなつていところが多い。なお防風林は小清水町、斜里町ほど完備しておらず、風蝕に対する対策が必要である。

4) 土地利用および営農状況

本市の農業については1965年農業センサスから次のとおりである。

(1) 土地利用および経営耕地規模別農家数

土地利用、專業兼業別農家数

経営耕地面積 (ha)	田総面積 (ha)	畑総面積 (ha)	草地 総面積 (ha)	永年牧草地		採草 放牧地	山林の うちの 採草 放牧地	農家 総数	專業 兼業 農家数	第1種 兼業 農家	第2種 兼業 農家
				肥培管理し ているもの	肥培管理し ていない						
11,263	65	11,120	1,653	153	141	652	705	1,500	1,209	177	114

経営規模別農家数

	総数	例外 規定	0.3ha 未満	0.3~ 0.5	0.5~ 1.0	1.0~ 1.5	1.5~ 2.0	2.0~ 2.5	2.5~ 3.0	3.0~ 5.0	5.0~ 7.5	7.5~ 10.0	10.0~ 15.0
40年	1,500	3	27	15	26	22	22	37	27	229	385	338	292
35年	1,806	4	50	23	44	38	34	29	36	340	563	346	252

15.0~20.0	20.0以上
60	19
42	5

(2) 農作物作付面積および10a当り収量

水 稻		小 麦		2条大麦		えん 麦		ばれいしよ		えんどう		だ
作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積
160	346	417	296	726	270	567	279	2,520	2,780	238	157	28

いづ		あずき		いんげんまめ		きゆうり		きやべつ		てんさい		はつか	
10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積
181	236	198	2,400	160	15	1,520	43	3,230	2230	3,450	58	610	
りんご		青刈とうもろこし		飼料用かぶ		家畜用ビート		まめ科牧草		いね科牧草		牧草	
作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積	10a 当収量	作付 面積	作付 面積
156	1,300	400	5,510	25	3,350	45	4,530	938	4,410	361	4,220	1,070	
混播		牧草合計											
10a 当収量	作付 面積	10a 当収量											
3,910	2,370	4,150											

(3) 家畜飼育農家数および頭数

牛		馬		豚		羊		鶏		ミンク	
戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数
290	2,584	1,176	1,580	168	5,052	258	1,450	450	37,960	5社	49,705

2. 土壌統別説明

網走市における基本調査は昭和35年および36年にわたり3,000haを調査し、今回残部につき調査を実施した。

1) 土壌統および土壌区一覧

(1) 土壌統一覧

(畑)

(畑)

土壌統名	色層序	腐植層序	礫・砂を混在する名	酸化状態	土性		堆積様式	母材	試坑地点No
					表土	底土			
越能八	YR/YR	表層腐植層	あり	あり	粘質	強粘質	三紀	半固結水成岩(砂岩)	33
八坂	"	表層多腐植層	なし	なし	強粘質	"	洪積	非固結火成岩(凝灰岩)	2
卯原内南	"	表層腐植層なし	あり	あり	粘質	壤粘質	"	"	69
能取中央	"	"	"	"	"	"	"	(凝灰岩・軽石)	31
明治	"	表層腐植層	"	"	"	"	"	("・泥岩)	11
大成	"	"	"	"	"	"	"	(" 安山岩)	57
能取北	"	表層多腐植層	なし	なし	"	"	"	(" ")	61
卯原内西	YR/Y	表層腐植層なし	"	あり	"	"	"	(")	3
岐原内	YR/YR	表層腐植層	"	あり	"	"	"	水成岩(泥岩)	44
岐阜	"	"	"	なし	"	"	"	"	6
明生	"	"	"	なし	壤質	壤粘質	風積(火山性)/洪積世	火成岩(凝灰岩)	129
浦士別	YR/Y	"	あり	あり	"	粘質	"	(火山性)凝灰岩・軽石)	109
稲富北	YR/YR	"	"	あり	"	壤粘質	"	(")	104
野山	YR/YR	表層腐植層なし	"	なし	"	粘質	"	(")	105
嘉多山	"	全層多腐植層	なし	なし	"	"	"	(")	32
卯原内	"	表層多腐植層	"	なし	"	"	"	(")	39
九万	"	全層多腐植層	"	あり	"	"	"	(")	114
チノサ	YR/Y	表層腐植層	あり	なし	粘質	粘質	風積(火山性)	(")	130
浜小	YR/YR	表層腐植層	"	なし	砂質	粘質	水積(河成)	(")	137
浜卯原内	"	"	"	なし	"	"	風積	水成岩(海砂)	25
浜能取	Y/Y	"	"	あり	粘質	粘質	"	(")	29
浜能取東	YR/YR	"	"	なし	礫質	礫質	"	(")	47
呼人北	"	表層腐植層なし	"	なし	壤質	壤質	水積(河成)	火成岩(凝灰岩・軽石)	89

土壤統名	色層序	腐植層序	礫・砂礫層 礫を混在する砂	酸化沈積物	土性		堆積様式	母材	試坑 地点/広
					表土	次層			
卯原内北	YR/YR	表層腐植層なし	なし	あり	粘質	粘質	水積 (河成)	非固結火成岩 (凝灰岩)	28
稻富西	"	表層腐植層	"	"	"	"	"	" (")	103
能取西	YR/Y	表層腐植層なし	"	"	"	"	"	" (")	20
嘉多山東	"	表層多腐植層	あり	"	壤質	"	"	" (凝灰岩・泥岩)	38
浜能取西	YR/YR	全層多腐植層	"	"	粘質	"	水積(河成)/集積/風積	" (" ヨシ)	27
北斗	"	全層腐植層	なし	"	壤質	黒泥	水積(河成)/集積	" (")	106
卯原内中央	Y/YR	"	"	"	粘質	粘質	"	" (")	30
呼人	YR/YR	表層多腐植層	"	なし	壤質	壤質	崩積	" (凝灰岩)	87
美岬	YR/Y	"	"	あり	粘質	粘質	"	" (")	53
壽沸東	"	全層多腐植層	"	"	壤質	黒泥	風積(火山性)/集積	" / ヨシ	113
二見ヶ岡	Y/YR	"	"	"	泥炭	泥炭	集積	ヨシ	8

(2) 土壤区一覽

(畑)

土 壤 区 分	簡 略 分 級 式	畑面積 (ha)	備 考 (試坑地点/ha)
越 歳一越 歳	Ⅲts Ⅱdpfnie	38	農牧適地面積 312.5 ha (33)
能 取一能 取 1	Ⅲt Ⅱpwnse	7	" 28.4 (2)
能 取一能 取 2	Ⅲtfs Ⅱdpwnie	20	" 227.3 (17)
八 坂一八 坂 1	Ⅲt Ⅱfnns	580	" 1,221.6 (69)
八 坂一八 坂 2	Ⅲtf Ⅱse	761	" 1,448.9 (18)
卯原内南一卯原内南	Ⅲdni Ⅱtpwfs	171	" 568.2 (31)
能取中央一能取中央	Ⅲtdnis Ⅱpwfe	97	" 511.4 (11)
明 治一明 治	Ⅲtdpi Ⅱwfnse	480	" 1,022.7 (57)
大 成一大 成	Ⅲdwfi Ⅱne	2,130	" 3,096.6 (61)
能 取 北一能 取 北	Ⅲf Ⅱwnse	119	" 340.9 (3)
卯原内西一卯原内西	Ⅲtdfni Ⅱpw	72	" 198.9 (44)
岐 阜一岐 阜	Ⅲdpw Ⅱtfnis	98	" 227.3 (6)
明 生一明 生 2	Ⅲn Ⅱt(w)fse	120	" 596.6 (129)
浦士別東一浦士別東	Ⅲne(w) Ⅱtf	320	" 852.3 (109)
福 富 北一福 富 北	Ⅲtn Ⅱ(w)fse	8	" 227.3 (104)
萱 野一萱 野 1	Ⅲe Ⅱt(w)fn	2,260	" 4,829.5 (105)
萱 野一萱 野 2	Ⅱfne	28	" 56.8 (135)
嘉 多 山一嘉 多 山 1	Ⅲne Ⅱf	1,640	" 2,244.3 (32)
嘉 多 山一嘉 多 山 2	Ⅱfn	25	" 56.8 (102)
嘉 多 山一嘉 多 山 3	Ⅲf Ⅱne	420	" 738.6 (75)
卯 原 内一卯 原 内 1	Ⅲw Ⅱfe	250	" 568.2 (39)
卯 原 内一卯 原 内 2	Ⅲw Ⅱe	40	" 596.6 (65)
卯 原 内一卯 原 内 3	Ⅲw Ⅱn	8	" 56.8 (58)
丸 万一丸 万	Ⅲw Ⅱf	20	" 28.4 (114)
チブサ藻琴一チブサ藻琴	Ⅲwn Ⅱta	100	" 255.7 (130)
浜 小 清一浜 小 清	N(w)Ⅲfn Ⅱt	10	" 312.5 (—)
浜卯原内一浜卯原内	Ⅲ(w)Ⅱtn	50	" 227.3 (25)
浜 能 取一浜 能 取	Nw Ⅲti Ⅱfa	0	" 312.5 (29)

土 壤 区 分	簡 略 分 級 式	畑面積 (ha)	備 考 (試坑地点%)
浜能取東—浜能取東	Vd IIIg(w) iII f	7	農牧適地面積 28.4ha (47)
呼人北—呼人北	III d(w) i II t g f	6	“ 85.2 (89)
卯原内北—卯原内北	III w II p	180	“ 227.3 (28)
稲富西—稲富西	III w II t f n	150	“ 255.7 (103)
能取西—能取西1	III p w II t n	120	“ 539.8 (20)
能取西—能取西2	II p w f	10	“ 28.4 (16)
嘉多山東—嘉多山東	III w II f n	5	“ 28.4 (38)
浜能取西—浜能取西	III w f n II t	20	“ 85.2 (27)
北斗—北斗	III w f n II t a	20	“ 340.9 (106)
卯原内—卯原内 中 央—中 央	III w f II t n a	120	“ 255.7 (30)
呼人—呼人	II t p f n s e	200	“ 710.2 (87)
美岬—美岬	II w	40	“ 85.2 (53)
壽沸東—壽沸東	IV w III f n a II t	60	“ 889.2 (113)
二見ヶ岡—二見ヶ岡	III w n i II t f	380	“ 823.9 (8)
計			25548.4

2) 土壤統別説明

畑

越 歳 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15cm内外で腐植含量5~10%、土性はCL~LiCである。色は10YRで彩度2~3、明度2~4が主である。細塊状、塊状構造を呈し発達程度は中度が主で一般に構造が堅硬である。ち密度は10~20で疎~中。脆弱な半腐朽礫(三紀層砂岩)を僅かに混在、pH(H₂O) 5.6前後。下層との境界平坦明瞭である。

第2層は厚さ30~60cmで腐植含量は2%以下、土性はLiC~HCである。色は10YR~7.5YRで彩度4~6、明度5~6である。塊状あるいは柱状構造を呈し、発達程度は中~強度で第一層より構造がさらに堅硬の場合が多い。ち密度は27~28で密。酸化沈積物が僅かに斑紋状に認められる。半腐朽、未風化礫(三紀層砂岩)を僅かに混在。pH(H₂O) 5.0~5.1前後。下層との境界は判然~漸変である。

第3層は厚さ50cm以上で腐植含量は1%以下、なお腐植が被膜状に僅かに認められる。未風化な母岩礫(三紀層砂岩)で小~大角礫層。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 網走市嘉多山 試坑No. 33 普通畑 (小麦)

第1層	0~13cm	腐植に富む黒褐(10YR 3.5/2)のCL、発達中度の細塊状、塊状構造。ち密度18で中。粘着性中。pH(H ₂ O) 5.6。脆弱な小半角礫あり。調査時の湿り乾。境界平坦明瞭。
第2層	13~22cm	腐植を欠く灰黄褐(10YR 5/3)のLiC。発達中~強度の塊状構造。細孔あり、割目多い。ち密度28で密。粘着性中。pH(H ₂ O) 5.1。酸化沈積物を僅かに認む。調査時の湿り乾~半乾。境界判然。
第3層	22~42cm	腐植を欠く灰褐(7.5YR 5/4)のLiC。発達強度の塊状構造。細孔あり、割目多い。ち密度28で密。粘着性強。pH(H ₂ O) 5.0。酸化沈積物あり、調査時の湿り乾~半乾。境界判然。
第4層	42~57cm	腐植を欠く黄褐灰(10YR 6/2)と明橙褐(7.5YR 6/6)のLiC。発達中度の塊状構造の集合からなる柱状構造。細孔なし、割目少。ち密度27で密。粘着性中。pH(H ₂ O) 4.6。調査時の湿り乾~半乾。境界判然~漸変。
第5層	57~ cm	未風化小、中、大角礫(三紀層砂岩の母岩)層。なお礫の表面に僅かに腐植を被膜状に集積。母岩は脆弱。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 (%)	粒径組成 (%)				土性	現地容積重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~13	2.3	10.1	48.4	25.5	16.0	CL	97.0	2.6	3.83	0.18
2	13~22	3.6	2.5	43.6	23.9	30.0	LiC	107.0	2.7	0.53	0.09
3	22~42	5.9	0.4	32.3	15.1	52.2	HC	107.0	2.7	—	—
4	42~57	6.2	1.4	37.5	16.2	44.9	LiC	109.5	2.8	—	—

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		y_1	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効態磷 (mg/100g)
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	21	6.60	5.6	4.7	0.8	16.2	9.53	0.73	0.33	5.9	23.0	31.3
2	6	0.92	5.1	4.0	5.1	21.0	12.45	2.93	0.23	5.9	43.6	2.1
3	—	—	5.0	3.8	2.9	33.1	15.36	3.31	0.32	4.6	73.7	5.2
4	—	—	4.6	3.7	3.9	30.4	10.63	3.48	0.28	3.5	70.9	3.6

A-2 他の土壌統との関連

本土壌に類似する統として能取統、八坂統、明治統などがある。能取統は凝灰岩、凝灰質砂岩で母岩を異にし、かつ母岩の出現が深い。八坂統、明治統は地形は類似するが堆積様式が洪積層であり、非固結火成岩が混入することにより区別される。

A-3 母材 半固結水成岩 (砂岩)

A-4 堆積様式 三紀層

B 地形 丘陵地で6~15度の傾斜地

C 気候 オホーツク海の気圧配置によりしばしば夏期冷涼に経過することがある。年平均気温 5.9℃、年平均降水量 850mm内外。

D 植生および利用状況

半ば耕地化され、麦類、菜豆、馬鈴薯、飼料作物、牧草などが栽培されている。また一部は果樹 (リンゴ) に利用されている。

E 農業上の留意事項

急傾斜地であり侵蝕に留意を要する。風化土壌は一般に粘質で固化しやすく、侵蝕をうけたところほど粘質である。また酸性が強い。有機物の施用、深耕、石灰の施用につとめるべきである。

F 分布 北海道網走市越歳、刑務所

年 月 日 昭和44年3日

(2) 土壌統の細分

(1) 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡 略 分 級 式
越 歳 - 越 歳	Ⅲts Ⅱdpfnie

(2) 土壌区別説明

越 歳 - 越 歳

示性分級式(畑)

土 壤 生 産 力 可 能 性 等 級	有 効 土 層 厚 さ	表 土 粒 径 含 有 率	耕 起 難 易	(表 土 粘 着 性)	(表 土 乾 硬 度)	土 地 乾 湿 性	(透 水 性)	(保 水 性)	自 然 肥 沃 度	(固 定 力)	(土 層 塩 基 状 態)	養 分 置 換 性	(石 灰 含 量)	(苦 土)	(加 里)	(有 効 態 磷 酸 含 量)	障 害 的 障 害 性	物 理 的 障 害	傾 斜 的 傾 斜	(自 然 的 傾 斜)	(人 為 的 傾 斜)	侵 蝕 度	(耐 水 性)	(耐 風 性)							
	t	d	g	p		W			f		n					i		s				e									
Ⅲ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅱ	2	2	2	Ⅰ	2	2	1	Ⅱ	2	1	2	Ⅱ	1	2	2	1	Ⅱ	1	2	Ⅲ	3	E	-	Ⅱ	2	2	1
簡 略 分 級 式		Ⅲts Ⅱdpfnie																													

A 土壌区の特徴

この土壌区は越歳統に属する。表土の厚さは10~15cmで一般に薄く有効土層は50cm前後で中庸である。表土は細粒質で粘着性は中庸、耕起、碎土がやゝ困難である。透水性、保水性中庸で過干、過湿のおそれは少ない。保肥力中庸、固定力小さいが下層酸性を呈し自然肥沃度は中庸である。作土の苦土、加里にやゝ乏しい。有効土層浅く物理的障害がある。地形は6~15°の傾斜地で侵蝕が認められる。

B 植生および利用状況

傾斜のゆるやかなところが耕地に利用され、麦類、馬鈴薯、飼料作物、牧草などが栽培され、また一部は果樹(リンゴ)にも利用されている。

C 地力保全上の問題点

傾斜地で侵蝕に留意を要する。風化土壌は一般に固化しやすく、下層堅密なため作土が浅い。深耕が必要である。深耕の場合酸性が強いため炭カル、有機物の施用が必要である。

D 分布 網走市越歳・刑務所

記載責任者 後藤計二（北海道立中央農業試験場）

日 付 昭和45年3月31日

能 取 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層の厚さ10～15cmで腐植含量8～12%、土性はSC～LiCが主である。色は10YRで彩度1～3、明度1～3である。礫なく発達弱度の塊状、粒状構造でち密度1.0～1.8で疎～中。湿り半乾。pH(H₂O) 5.0～5.8。下層との境界は平坦明瞭。

第2層は厚さ15～25cmで腐植含量2～5%、土性はSL～LiCである。色は10YRで彩度2～4、明度3～4である。発達中度の塊状構造である。ち密度2.0～2.6で中。湿り半乾。pH(H₂O) 5.0～5.5。下層との境界漸変。

第3層は厚さ50～70cmで腐植含量1%以下、土性はCL～Lである。色は10YRで彩度4～6、明度4～6である。発達弱度の塊状構造でち密度2.5～2.8で密。湿り半乾。pH(H₂O) 5.0～5.5。

代表的断面形態

(所在地) 網走市能取 試坑No.2 普通畑(ビート)

第1層	0～12cm	腐植に頗る富む黒(10YR 2/1)のLiC、発達弱度の細塊状および粒状構造。ち密度1.8で中。粘着性中。pH(H ₂ O) 5.8。調査時の湿り半乾。境界平坦明瞭。
第2層	12～30cm	腐植を含む黒褐(10YR 3/2.5)のLiC、発達中度の細塊状構造で細孔あり、割目少。ち密度2.5で密。粘着性强。pH(H ₂ O) 5.5。調査時の湿り半乾。境界漸変。
第3層	30cm～	腐植を欠く褐(10YR 4/6)のCL、発達弱度の細塊状構造で細孔あり～含む。割目少。ち密度2.8で密。粘着性中。pH(H ₂ O) 5.5。調査時の湿り半乾。

代表的断面の分析成績

層位	採取位 (cm)	水分 (%)	粒径組成 (%)				土性	現地容積重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~12	6.2	9.2	30.4	34.7	25.7	LiC	79.0	25	6.27	0.51
2	12~30	3.9	11.5	24.4	36.2	27.9	LiC	87.5	2.7	2.61	0.19
3	30~	4.9	18.1	26.1	33.2	22.6	CL	94.5	2.8	—	—

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効態磷酸 (mg/100g)
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	13	10.78	5.8	4.7	0.6	48.22	26.74	3.66	0.52	55	1.046	8.3
2	14	4.49	5.5	3.4	5.0	31.06	8.24	3.02	0.68	27	9.98	1.7
3	—	—	5.5	4.3	3.5	19.74	5.86	3.31	0.87	30	6.39	2.0

A-2 他の土壌統との関係

本統に類似する統としては越歳統がある。越歳統は母岩が砂岩であり、かつ母岩礫が浅く出現するので区分される。

A-3 母材 非固結火成岩(凝灰岩)

A-4 堆積様式 三紀層

B 地形 丘陵地で4~7度の傾斜地

C 気候 年平均気温 5.9℃ 年降水量 850mm内外。オホーツク海の気圧配置によりしばしば夏期冷涼に経過することがある。

D 植生および利用状況 緩傾斜地が耕地に利用されており、甜菜、ばれいしよ、菜豆、麦類が栽培されている。未耕地はシラカバ、ナラ、シナ、アカダモ、ヤナギ、下草はササが自生している。

E 農業上の留意事項

海岸に近く分布し、常に風が強く作物の生育に支障が認められる。防風林の完備を要する。一般に作土が薄くかつ塩基含量が少なく特に下層は酸性が強い。緑肥、堆肥の施用、炭カル、熔磷の施用により深耕し、耕土層の肥沃化を要する。

F 分布 北海道網走市能取

調査および記載責任者 後藤計二 上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

年 月 日 昭和45年3月

(2) 土壤統の細分

(1) 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
能取一能取1	III t II p W f n s e
能取一能取2	III t f s II d p W n i e

(2) 土壤区別説明

能取一能取1

示性分級式(畑)

土壤	表土	表土	耕起	(表土の風乾土の硬さ)	(土層の塩基状態)	(養分)	(置換性)	(有効態燐酸含量)	(酸化)	(化学的障害)	(物理的障害)	(傾斜)	(人為的)	(耐蝕性)	(耐風蝕性)																	
生産力	の厚さ	の層の深さ	のの深さ	の粘着性)	の乾性)	の肥沃度)	の石灰含量)	の加里)	の燐酸含量)	の障害)	の障害)	の傾斜)	の傾斜)	の耐蝕性)	の耐風蝕性)																	
可能性等級	t	d	g	p	W	f	n	i	s	e																						
	III	III	I	II	3	2	2	II	2	2	2	II	1	2	2	II	1	1	2	2	2	I	1	1	II	2	s	-	II	2	2	1
簡略分級式	III t II p W f n s e																															

A 土壤区の特徴

この土壤区は能取統に属する。表土の厚さは10～15で浅いが有効土層は1m以上で深い。表土は微粒質、粘着性は中庸で耕起、砕土はやゝ困難である。保水性、透水性は中庸で時期的に過干、過湿のおそれがある。保肥力は大きく、固定力中庸、塩基含量中庸で自然肥沃度は中位である。表土の加里、燐酸は中庸、酸性が強い。特殊の障害性はない。地形は4～7°の傾斜地で侵蝕は弱い。

B 植生および利用状況

緩傾斜地が耕地に利用され、甜菜、馬鈴薯、菜豆、麦類が栽培されている。未耕地はシラカバ、ナラ、シナ、アカダモ、ヤナギなどの自生する林地である。

C 地力保全上の問題点

海岸に近く分布し、防風林の完備を要する。作土は浅く下層は堅密で深耕、心土破碎が望ましい。深耕の場合酸性を呈するので炭カル及び燐の増施、有機物の施用を要する。侵蝕に留意する。

D 分布 網走市能取

記載責任者 後藤計二(北海道立中央農業試験場)

日 付 昭和45年3月31日

能取 — 能取 2

示性分級式(畑)

土	表	有	表	耕	((土	((((養	(((障	(((侵	((
壤	効	効	土	土	表	表	地	透	保	湿	然	固	土	置	有	酸	障	傾	傾	人	侵	耐	耐								
生	土	土	の	の	土	土	水	水	潤	肥	肥	定	層	換	効	障	障	自	傾	為	侵	耐	耐								
産	の	の	の	の	土	土	性	性	性	度	力	力	の	性	態	害	的	然	傾	傾	蝕	水	風								
力	厚	深	含	難	性	性	性	性	度	力	力	塩	石	加	害	的	障	障	斜	斜	蝕	蝕	蝕								
可	さ	さ	量	易	((湿))))	基	灰	里	性	害	害	斜	斜	蝕	度	性	性								
能												態	含	量	度	性	性	性	性	性	性	性	性								
性													否																		
等																															
級	t	d	g	p			w			f		n				i		s		e											
	III	II	I	II	2	2	II	3	2	2	III	1	1	3	II	1	3	2	2	2	II	1	2	III	3	E	-	II	2	1	1
	簡略分級式		III t f s II d p w n i e																												

A 土壤区の特徴

この土壤区は能取統に属する。能取1は凝灰岩であり、本区は凝灰質砂岩であることにより区分される。表土の厚さは10~15cmで浅く、下層50~60cm以下は硬度2.9以上で有効土層はやゝ浅い。表土は微粒質で粘着性はやゝ強く耕起、碎土はやゝ困難である。透水性は小さく過干、過湿のおそれがある。保肥力大きく、固定力小さいか塩基にやゝ乏しく自然肥沃度は低い。表土は苦土に乏しく、燐酸、加里もやゝ少ない。有効土層浅く物理的障害がある。傾斜地で5~10°であり、透水性が小さいため侵蝕が認められる。

B 植生および利用状況

耕地は甜菜、馬鈴薯、菜豆、麦類、飼料作物、牧草などが栽培されている。

C 地力保全上の問題点

表土が薄くかつ粘質で固化しやすく、透水性が小さく、過干、過湿のおそれがある。有機物の施用につとめ、さらに深耕、心土耕、心土破碎の施行により透水性の増大と根圏域の拡大を図ること、深耕に際しては酸性矯正、燐による燐液と苦土の増加を要する。草地に対しては特に加里の施用にも注意のこと。

D 分布 網走市能取

記載責任者 後藤計二(北海道立中央農業試験場)

日 付 昭和45年3月31日

八 坂 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ9～15cm、腐植含量4～7%、土性はSL～Lである。色は10YRで彩度2～3、明度2～3。発達中～弱度の粒状構造でち密度10～15で疎～中。pH(H₂O)5.5～7.0。下層との境界平坦明瞭。

第2層は厚さ9～15cm、腐植含量2～5%、土性はSL～Lである。色は10YRで彩度2～3、明度3～4。発達弱度の細塊状構造である。ち密度20～27で中～密。pH(H₂O)5.0～6.3。下層との境界漸変。

第3層は厚さ20～40cm、腐植含量1%以下、土性はSL～CLでSLの場合が多い。色は10YRで彩度4～6、明度4～5。発達弱度の塊状構造である。ち密度28前後で密。pH(H₂O)5.5～6.0。下層との境界判然。

第4層は厚さ50cm以上。腐植含量1%以下。土性はS～SLである。色は10YRで彩度4～6、明度5～7。均質連結状でち密度密。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 北海道網走市八坂 試坑№69 普通畑(ばれいしょ)

第1層	0～10cm	腐植を含む黒褐(10YR 2.5/3)のL。発達弱度の細粒状、粒状構造。粘着性は弱。pH(H ₂ O)7.2。調査時の湿り半乾～乾。境界平坦明瞭。
第2層	10～21cm	腐植を含む暗褐(10YR 3.5/3)のL。発達弱度の細塊状構造で細孔を含む。割目不鮮明。ち密度27で密。pH(H ₂ O)6.3。調査時の湿り半乾～乾。境界漸変。
第3層	21～47cm	腐植を欠く褐(10YR 4/4)のCL。発達弱度の細塊状構造で細孔を含む。割目不鮮明。ち密度28で密。pH(H ₂ O)6.0。調査時の湿り半乾。境界漸変。
第4層	47cm～	腐植を欠く黄褐(10YR 5/6)のC ₀ S(触感)。均質連結状で細孔を含む。ち密度密。未風化小円礫(3～5mm)あり。調査時の湿り半乾。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 %	粒径組成 (%)				土性	現地容積重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~10	20	36.5	24.0	25.7	13.8	L	97.0	2.6	2.60	0.19
2	10~21	2.1	37.9	24.0	24.7	13.4	L	96.5	2.7	1.87	0.13
3	21~47	2.2	40.0	20.5	22.2	17.3	CL	108.5	2.8	-	0.06

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効態磷 (mg/100g)
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	14	4.47	7.2	6.7	0	15.80	13.75	0.25	0.42	87	450	6.5
2	14	3.22	6.3	5.2	0.1	11.66	5.25	0.50	0.26	45	436	3.1
3	-	-	6.0	4.9	0.4	11.14	4.37	0.37	0.22	39	562	2.1

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として卯原内南統、能取中央統、明治統などがある。卯原内南統、能取中央統、明治統は下層盤層を呈し、かつ能取中央統、明治統は下層の土性が細粒質あるいは微粒質であることにより区別される。

A-3 母材 非固結火成岩（凝灰岩質）

A-4 堆積様式 洪積世堆積

B 地形 標高80~120mの段丘で5~8°の起伏あり。

C 気候 年平均気温5.9℃、年降水量850mm前後。オホーツク海の気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過することがある。春先強風あり。

D 植生および利用状況

ばれいしよ、甜菜、麦類、菜豆、その他牧草、飼料作物が栽培されている。未耕地も多く存在し、ナラ、シラカバ、イタヤ等が自生している。

E 農業上の留意事項

下層の堆積は堅密であるが湿性を呈することはない。堅密であるため作土層が薄い、有機物の施用により深耕が必要である。また保肥力が小さい土壌で管理が悪いとやせ易いから留意を要する。風当りの強い高台であり、特に春先乾燥時に季節風が強いので防風林の育成を要する。下位の台地に接する斜面は基盤の凝灰岩、安山岩が浅く現われる礫質の土壌が分布するが侵蝕防止として草地利用が得策である。

F 分布 北海道網走市八坂

年 月 日 昭和35年3月

(2) 土壌統の細分

(1) 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡略分級式
八 坂 一 八 坂 1	III t II f ns
八 坂 一 八 坂 2	III t f II se

(2) 土壌区別説明

八 坂 一 八 坂 1

示性分級式

土 壤 生 産 力 の 可 能 性 等 級	表 効 土 層 の 厚 さ	有 効 土 層 の 深 さ	表 土 転 倒 の 容 易 性	耕 土 の 粘 着 性	(表 土 の 風 乾 土 の 硬 さ)	(土 透 水 性)	(保 水 性)	自 然 沃 度	(保 肥 力)	(固 定 力)	(土 層 の 塩 基 状 態)	養 分 の 豊 否	(置 換 性)	(石 灰 土 含 量)	(有 機 質 含 量)	(酸 性 度)	障 害 性	(化 学 的 障 害)	傾 斜 的 障 害	(自 然 的 傾 斜)	(人 為 的 傾 斜)	侵 蝕 度	(耐 水 性)	(耐 風 性)								
t	d	g	p		w		f		n			i		s							e											
III	II	I	I	I	I	1	1	I	2	1	1	II	2	1	2	II	1	3	2	2	1	I	1	1	II	2	NE	-	I	1	1	1
簡略分級式		III t II f ns																														

A 土壌区の特徴

この土壌区は八坂統に属する。表土の厚さは15 cm前後で一般に浅く、有効土層は1 m以上で深い。表土は頁岩で粘着性は弱く耕起、碎土は容易である。透水性は中庸、保水性は大きく過干、過湿のおそれは少ない。保肥力中庸、固定力小さく、下層は塩基未飽和土壌で自然肥沃度は中位である。作土の苦土は乏しく、燐、加里もやゝ少ない。障害性はない。地形は5~8°の傾斜を呈する段丘地で侵蝕がやゝ認められる。

B 植生および利用状況

未耕地が多く、ナラ、シラカバ、イタヤなどの樹林地で、耕地は馬鈴薯、甜菜、麦類、菜豆、牧草、テントコーンなどが栽培されている。

C 地力保全上の問題点

作土層が薄く、保肥力が小さい土壌で管理が悪いと瘠薄になり易い。有機物の施用につとめ深耕

を図る必要がある。その場合燐の施用によつて燐酸、苦土の増加を図り、牧草地ではさらに加里の施用に留意を要する。標高が高いので防風林の完備を要する。急傾斜地は草地による侵蝕防止が得策である。

D 分布 網走市八坂

記載責任者 後藤計二(北海道立中央農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

八 坂 — 八 坂 2

示性分級式(畑)

土壌生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の礫含量	耕起の難易	(表土の粘性)	(表土の乾土の硬さ)	(透水性)	(保水性)	(自然肥力)	(固定力)	(土層の塩基状態)	(養分塩基量)	(置換性)	(苦土含量)	(加里含量)	(有効燐酸含量)	(酸害性)	(化学的障害)	(物理的障害)	(傾斜)	(自然傾斜)	(人為傾斜)	(侵入)	(侵蝕)	(耐水性)	(耐風蝕)			
t	d	g	p		w		f		n		i	s	e																
III	III	I	I	I	I	I	1	2	III	2	1	3	I	1	2	1	1	1	I	1	1	II	2	E	-	II	2	1	1
簡略分級式 III t f II s e																													

A 土壌区の特徴

この土壌区は八坂統に属する。下層は堅密で作土は一般に15cm以下で浅いが有効土層は深い。土性は頁質～細粒質で粘着性は中庸、耕起、砕土はやゝ容易である。下層は砂質で透水性は大きく、保水性は中庸で過干、過湿のおそれは少ない。保肥力やゝ小さく、固定力は小さいが塩基未飽和で自然肥沃度は低い。作土の養分は苦土がやゝ乏しい。特殊の障害性はない。傾斜5～8°で侵蝕が一部認められる。

B 植生および利用状況

開拓地で耕地は馬鈴薯、菜豆、麦類、牧草、デントコーン、甜菜などが栽培されているが生産は一般に低い。沢が深く未利用地も多く、シラカバ、ナラ、シコロ、イタヤの林地となつている。

C 地力保全上の問題

地形が悪く、傾斜地で作土が薄い。また腐植含量も少ない。有機物の施用を図り深耕を必要とする。深耕に際しては燐による燐酸、苦土の補給、加里の増施を要する。

D 分布 網走市能取

記載責任者 後藤計二(北海道中央農業試験場)

日 付 昭和45年3月31日

卵原内南統

(1) 土壌統の概要

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15~25cm、腐植含量3~5%、土性はCL~SCである。色は2.5Y~10Y Rで彩度2~4、明度3~4。発達弱度の細塊状構造。ち密度23~26で中~密。pH(H₂O) 5.5~6.0。下層との境界平坦明瞭。

第2層は厚さ20~30cm、腐植含量1%以下、土性はCLである。色は10YRで彩度3~4、明度5~6。発達弱度の細塊状、塊状構造。ち密度29~32で頗る密。pH(H₂O) 5.5~6.0。下層との境界判然。

第3層は厚さ50cm以上、腐植含量1%以下、土性はSL(触感)である。色は10YRで彩度2~3、明度6~8。均質連結状。ち密度31で頗る密。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市 試坑/版31 耕地内草地(牧草)

第1層	0~23cm	腐植を含む黄褐灰(2.5Y4/2)のCL、発達弱度の細塊状構造で下部均質連結状。ち密度23~26で中~密。粘着性中。pH(H ₂ O) 6.6。調査時の湿り半乾~乾。下層境界平坦明瞭。
第2層	23~50cm	腐植を欠く灰黄橙(10YR6/4)のCL、発達弱度の細塊状、塊状構造で細孔あり。ち密度32で頗る密。粘着性弱。炭化沈積物あり。pH(H ₂ O) 6.0。調査時の湿り乾~半乾。境界判然。
第3層	50cm~	腐植を欠く灰黄橙(10YR7/3)のSL(触感)、均質連結状で細孔あり。ち密度31で頗る密。粘着性弱。炭化沈積物あり。調査時の湿り半乾。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 %	粒徑組成 (%)				土性	現地容積重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~23	3.3	18.9	31.2	28.4	21.5	CL	88.0	2.6	23.3	0.24
2	23~50	3.4	9.6	32.8	37.6	20.0	CL	85.5	2.7	—	—

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		y_1	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	燐酸吸収係数	有効態燐酸 (mg/100g)
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	10	4.0	6.0	4.8	0.3	18.43	9.16	1.11	0.23	5.0	43.6	7.8
2	—	—	6.0	4.5	0.5	13.90	7.69	1.11	0.32	5.5	43.6	6.4

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として八坂統、能取中央統、明治統などがある。八坂統は有効土層深くかつ下層が砂質であり、能取中央統、明治統は母材が水成岩あるいは安山岩などが混合し異なることにより区別される。

A-3 母材 非固結火成岩(凝灰岩質)

A-4 堆積様式 洪積世

B 地形 標高80~50mの段丘地。3~5°の波状を呈す。

C 気候 年平均気温5.9℃、年降水量850mm内外。オホーツク海の気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過する。

D 植生および利用状況 耕地は甜菜、馬鈴薯、麦類、菜豆、デントコーン、牧草などが栽培されている。

E 農業上の留意事項 下層は頗る密で非有効土層となつており作物の生育は不良である。心土破碎、心土耕により下層の膨軟化を図り透水性を増して時期的に過湿にならぬ様配慮が必要である。また作土は一般に薄いので有機物の施用、燐酸肥料の増施により深耕の改良を要する。

F 分布 北海道網走市卯原内

調査および記載責任者 後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

年月日 昭和45年3月

(1) 土壌統の細分

(i) 土壌区一覧

土壌区名	簡略分級式
卯原内南~卯原内南	III d ni II t p w f s

(2) 土壤区別説明

卯原内南—卯原内南

示性分級式(畑)

土壤生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の磔含量	耕起土の難易	(表土の粘着性)	(表土の土性)	(表土の風乾土の硬さ)	(表土の乾燥性)	(表土の透水性)	(表土の保水性)	(表土の保肥力)	(表土の自然肥度)	(表土の固定力)	(表土の塩基状態)	(表土の養分)	(表土の置換性)	(表土の石灰含量)	(表土の苦土)	(表土の加里)	(表土の有効態燐酸度)	(表土の酸性)	(表土の物理的障害)	(表土の化学的障害)	(表土の傾斜)	(表土の自然傾斜)	(表土の傾斜方向)	(表土の人為傾斜)	(表土の侵入)	(表土の耐水蝕性)	(表土の耐風蝕性)		
	t	d	g	p			w					f			n						i		s									
	III	II	III	I	II	2	2	2	2	2	2	2	II	2	1	1	III	1	2	3	2	1	III	1	3	II	2	N	-	I	1	1
簡略分級式		III d n i II t p w f s																														

A 土壤区の特徴

この土壤区は卯原内南統に属する。表土は15~20で中庸、有効土層は下層が甚だ堅密な盤層で30cm内外と極めて浅い。表土は細粒質で粘着性は中庸、耕起砕土はやゝ困難である。透水性は小さく、保水性は中庸で過干、過湿のおそれがある。保肥力はやゝ小さく、固定力は小さく塩基状態はやゝ良好で自然肥沃度は中位である。作土の養分は加里に乏しく苦土、燐酸もやゝ少ない。有効土層浅く物理的障害がある。地形はほぼ平坦な段丘地で侵蝕はない。

B 植生および利用状況

大部分耕地に利用され、甜菜、馬鈴薯、麦類、菜豆、デントコーン、牧草などが栽培されている。

C 地力保全上の問題点

下層が甚だ堅密で、乾燥期は硬度計で29以上を示し有効土層が浅く過干と過湿の両方の障害がある。心土破砕を実施し、さらに心土耕により有効土層の拡大を図ることが必要である。また塩基特に苦土、加里の補給、燐酸の増施を要する。

D 分布 網走市卯原内

記載責任者 後藤計二(北海道立中央農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

能 取 中 央 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ10～20cm、腐植含量2～5%。土性はL～CLである。色は10YRで彩度2～3、明度3～4。発達中度の粒状構造で、ち密度1.5～2.4で中。pH(H₂O)5.5～6.4。下層との境界平坦明瞭。

第2層は厚さ7～15cm、腐植含量2%前後。土性はL～CLである。色は10YRで彩度3～4、明度2～3。発達弱度の細塊状構造。ち密度2.6で密。粘着性中。pH(H₂O)5.5～6.7。下層との境界判然。

第3層は厚さ50cm以上。腐植含量1%以下、土性はCL～LICである。色は10YRで彩度4～6、明度4～6。発達弱度の細塊状～塊状構造。ち密度3.1で頗る密。酸化沈積物あり。pH(H₂O)5.0～5.5。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市能取 試坑No.11 普通畑(ばれいしょ)

第1層	0～10cm	腐植を含む黒褐(10YR 3.5/2)のCL。発達中度の粒状構造。ち密度1.5で中。粘着性中。pH(H ₂ O)6.4。調査時の湿り半乾。下層境界平坦明瞭。
第2層	10～20cm	腐植あり暗褐(10YR 3.5/3)のCL。発達弱度の細塊状構造。細孔あり。ち密度2.6で密。粘着性中。pH(H ₂ O)6.6。調査時の湿り湿。境界判然。
第3層	20～30cm	腐植を欠く灰黄褐(10YR 4.5/4)のCL。発達弱度の細塊状、塊状構造で細孔あり。ち密度3.1で頗る密。粘着性中。pH(H ₂ O)5.4。調査時の湿り湿。境界判然。
第4層	50cm～	腐植を欠く灰黄褐(10YR 5/4)のLIC。発達弱度の塊状構造で細孔あり。ち密度3.1で頗る密。粘着性中。酸化沈積物あり。pH(H ₂ O)5.3。調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 %	粒径組成 (%)				土性	現地容積重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~10	2.5	19.2	24.1	38.2	18.5	CL	94.0	2.6	2.33	0.14
2	10~20	2.9	17.7	25.1	35.7	21.5	CL	95.0	2.7	—	—
3	20~30	3.3	19.2	20.0	37.1	23.7	CL	110.5	2.8	—	—
4	30~	4.0	15.7	14.8	36.9	37.6	LiC	111.0	2.8	—	—

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効態磷 (mg/100g)
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	17	40.1	6.4	5.2	0.6	16.50	10.27	0.37	0.42	47	436	9.3
2	—	—	6.6	5.6	0.3	16.18	10.80	0.37	0.43	67	639	12.5
3	—	—	5.4	4.5	1.3	13.27	6.78	1.28	0.17	51	666	3.8
4	—	—	5.3	4.5	1.8	14.88	8.06	1.83	0.22	54	378	3.1

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として入坂統、卯原内南統、明治統などがある。入坂統は下層が砂質であり、卯原内南統は母材が凝灰岩質であり、他母材の混入は殆んどなく、明治統は安山岩の小礫が混入していて水成岩の混入がないことにより区別される。

A-3 母材 非固結火成岩(凝灰岩、砂岩、安山岩)

A-4 堆積様式 洪積世

B 地形 標高20~100mの段丘地。5~10°のかなり起伏が多い。

C 気候 年平均気温 5.9℃、年降水量 850mm内外。オホーツクの気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過する。

D 植生および利用状況 耕地は甜菜、ばれいしよ、菜豆、デントコーン、牧草等が栽培されている。未耕地はシコロ、ナラ、シラカバ、ヤナギ等が自生している。

E 農業上の留意事項 下層が堅密で透水性は不良で過乾、過湿のおそれがある。心土破壊、心土耕により透水性を良好にし根圏域の拡大を要する。また一般に作土層が浅く地形も起伏が大きく侵蝕のおそれが多いので、その防止と深耕を図る必要がある。

F 分布 北海道網走市能取、常呂郡常呂町

調査および記載責任者 後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

年月日 昭和45年3月

(2) 土壤統の細分

(1) 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
能取中央 — 能取中央	Ⅲtdnis Ⅱpwfe

(2) 土壤区別説明

能取中央 — 能取中央

示性分級式(畑)

土壤生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の粘着性	耕起の難易	表土の乾土の砂さ	土の透水性	地水の乾湿	自然潤度	保肥力	固定力	土層の塩基状態	養分交換性	置換性	苦土	加里	有効態	酸害	化学的障害	物理的障害	傾斜	自然傾斜	人為傾斜	侵蝕	耐蝕性	耐風蝕性					
t	d	g	p			w		f			n					i		s			e									
Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	2	2	2	2	2	Ⅱ	2	1	2	Ⅲ	1	3	2	2	1	Ⅲ	1	3	Ⅲ	3	EN	—	Ⅱ	2	1	1
簡略分級式 Ⅲtdnis Ⅱpwfe																														

A 土壤区の特徴

この土壤区は能取中央統に属する。表土は10~15cmで薄く、有効土層は30cm内外で極めて浅い。表土は細粒質で粘着性は中庸であるが、耕起、砕土はやゝ困難である。保水性は中庸であるが透水性はやゝ小さく、過干、過湿のおそれがある。保肥力中庸、固定力は小さく、塩基状態も中庸で自然肥沃度は中位である。作土は苦土に乏しく、磷酸、加里もやゝ乏しい。有効土層浅く物理的障害性がある。地形は5~10°で沢が深く侵蝕程度は弱いと認められる。

B 植生および利用状況

耕地は甜菜、馬鈴薯、菜豆、麦類、テントコーン、牧草などが栽培されている。未耕地はナラ、シラカバ、ヤナギ、シコロ等の樹林地である。

C 地力保全上の問題点

下層が堅密で透水性はやゝ小さく過干、過湿のおそれがある。心土破碎、心土耕により透水性を良好にし、根圏域の拡大を要する。また漸次深耕を要する。その場合苦土、加里、さらに磷酸の増施を図るとともに有機物の施用にもつとめる必要がある。

D 分布 網走市能取

記載責任者 後藤計二(北海道立中央農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

明 治 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ10~20cm、腐植含量6~8%、土性はLiCが主である。色は10YRで彩度1~2、明度2~3。発達弱度の粒状および細塊状構造。ち密度15~21で中。粘着性中。pH(H₂O)5.6~6.0。下層との境界平坦明瞭。

第2層は厚さ10~20cm、腐植含量2%内外。土性はLiCが主である。色は10YRで彩度3~4、明度4~5。発達弱度の塊状構造あるいは均質連結状。ち密度25~32で密~頗る密。粘着性中。pH(H₂O)5.5~5.7。不鮮明な酸化沈積物あり、マンガ班あり。下層との境界判然。

第3層は厚さ50cm以上、腐植含量1%以下。土性はCLが主である。色は10YRで彩度2~3、明度6~7。均質連結状で一部塊状構造。ち密度25~34で密~頗る密。粘着性中。pH(H₂O)6.2。未風化小円礫(集塊岩)あり、酸化沈積物、マンガ班あり

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 北海道網走市明治 試坑No57 普通畑(甜菜)

第1層	0~15cm	腐植に富む黒褐(10YR2/2)のLiC、発達弱度の細塊状、粒状構造。ち密度21で中。粘着性中。pH(H ₂ O)5.4。調査時の湿り半乾。下層境界平坦明瞭。
第2層	15~27cm	腐植を欠く灰黄褐(10YR5/4)のLiC、発達弱度の細塊状構造で細孔あり。割目不鮮明。ち密度32で頗る密。粘着性中。未風化小円礫(集塊岩)あり。不鮮明な酸化沈積物。マンガ班あり。pH(H ₂ O)5.7。調査時の湿り半乾。下層境界判然。
第3層	27cm~	腐植を欠く灰黄橙(10YR6/3)のCL、均質連結状で細孔なし。ち密度34で頗る密。粘着性中。未風化小円礫(集塊岩)あり。酸化沈積物、マンガ班あり。pH(H ₂ O)6.2。調査時の湿り半乾。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 %	粒径組成 (%)				土性	現地容積重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~15	4.1	14.5	25.0	35.4	25.1	LiC	79.0	2.5	4.63	0.40
2	15~27	3.6	15.4	20.1	38.6	25.9	LiC	100.0	2.7	—	—
3	27~	3.8	21.0	2.44	34.9	19.7	CL	101.5	2.8	—	—

層位	炭素率	腐植 (%)	pH			塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効態磷酸 (mg/100g)
			H ₂ O	KCl	y ₁		CaO	MgO	K ₂ O			
1	12	7.96	5.4	4.6	4.6	2.668	11.00	1.50	0.38	41	764	2.6
2	—	—	5.7	4.4	0.3	1.692	5.67	0.33	0.23	34	697	1.5
3	—	—	6.2	4.6	4.4	1.521	8.11	0.33	0.15	53	562	2.1

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類する統として八坂統、卯原内南統、能取中央統などがある。八坂統は下層が砂質であり、卯原内南統は母材が凝灰岩質で他の母材の混入が少なく、能取中央統は母材に水成岩の混入が見られるので区分される。

A-3 母材 非固結火成岩（凝灰岩、集塊岩）

A-4 堆積様式 洪積世

B 地形 標高50~160mの傾斜性段丘地。

C 気候 年平均気温5.9℃、年降水量850mm内外。オホーツクの気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過する。

D 植生および利用状況 耕地は甜菜、ばれいしょ、菜豆、麦類、飼料用作物が栽培されている。

E 農業上の留意事項 下層が頗る堅密で非有効土層となつていて鉄斑、マンガン斑を生成している。心土破碎、心土耕により下層の膨軟化を図り根圏域の拡大を要する。また一般に作土が薄い。有機物の施用につとめ深耕を要する。その場合炭カルによる矯正をゆるがせにできない。

F 分布 北海道網走市明治、向陽、ニツ岩

調査ならびに記載責任者 後藤計二・上坂晶司（北海道中央農業試験場）

年 月 日 昭和45年3月

大 成 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ30～35cm、腐植含量7～12%、土性はL～CLである。色は10YRで彩度1～3、明度2～3、発達弱～中度の粒状構造、一部細塊状構造。ち密度10～22で疎～中。

pH(H₂O)5.0～5.5。下層との境界は平坦明瞭。

第2層は厚さ8～15cm、腐植含量2%以下、土性はCLが主である。色は10YRで彩度3～4、明度6～8。発達中度の柱状構造。ち密度28～32で頗る密。酸化沈積物を含む。グライ班あり。pH(H₂O)5.0～5.6。下層との境界判然。

第3層は厚さ50cm以上、腐植含量1%以下、土性はCLが主である。色は10YRで彩度4～6、明度4～6。発達弱度の柱状構造あるいは均質連結状。ち密度29～32で頗る密。酸化沈積物を含む。グライ班あり。pH(H₂O)5.0～5.6。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市天都山 試坑No.61 普通畑(菜豆)

第1層	0～33cm	腐植に富む黒褐(10YR 2/2)のCL。2層に分れ、0～8cmは作土層で発達中度の粒状、細粒状構造で細孔に富む。粘着性弱。ち密度10で疎。pH(H ₂ O)5.3。調査時の湿り半乾。境界判然。8～33cmは発達弱度の細塊状および粒状構造で細孔を含む。割目不鮮明。ち密度22で中。粘着性中。pH(H ₂ O)5.5。調査時の湿り半乾。境界平坦明瞭。
第2層	33～41cm	腐植を欠く灰黄橙(10YR 6/4および7/3)のCL。発達弱度の柱状構造で細孔あり、割目は不鮮明。ち密度32で頗る密。粘着性中。酸化沈積物に富む。グライ班あり。pH(H ₂ O)5.6。調査時の湿り半乾。境界判然。
第3層	41cm～	腐植を欠く褐(10YR 4.5/4)のCL(触感)。発達弱度の柱状構造で細孔あり、割目は不鮮明。密度32で頗る密。粘着性中～強。酸化沈積物を含む。グライ班あり。調査時の湿り半湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 %	粒径組成 (%)				土性	現地容積重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~8	4.4	14.3	23.0	39.3	23.4	CL	79.5	2.5	4.90	0.43
2	8~33	4.9	14.8	23.7	36.6	24.9	CL	80.0	2.6	4.67	0.37
3	33~41	4.0	15.7	25.4	36.0	22.9	CL	101.5	2.8	—	—

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効態磷酸 (mg/100g)
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	11	8.43	5.3	4.4	3.0	33.68	10.25	0.25	0.89	30	1093	7.8
2	13	8.03	5.5	4.4	6.0	30.31	7.75	0.50	0.78	26	1184	6.5
3	—	—	5.6	4.3	6.5	15.54	7.33	1.11	0.12	47	622	3.3

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として明治統、能取北統、卯原内西統、岐阜統などがある。明治統は安山岩礫が混入し、能取北統、岐阜統は酸化沈積物が認められないこと、卯原内西統は母材が泥岩質であることによりそれぞれ区別される。

A-3 母材 非固結火成岩(凝灰岩質)

A-4 堆積様式 洪積世

B 地形 標高60~160mの段丘地。3~5°の緩傾斜および平坦。

C 気候 年平均気温5.9℃、年降水量850mm。オホーツク海の気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過する春先の季節風強い。

D 植生および利用状況 大部分耕地に利用され、菜豆、麦類、馬鈴薯、甜菜、その他飼料作物が栽培されている。

E 農業上の留意事項 下層が頗る密な盤層状であり心土破碎による膨軟化を必要とする。保肥力は大きい塩基に乏しく石灰、苦土の補給が必要。

F 分布 北海道網走市天都山、昭和、中園

調査および記載責任者 後統計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

年月日 昭和45年3月

(2) 土壤統の細分

(1) 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
大成—大成	III d w f i II n e

(2) 土壤区別説明

大成—大成

示性分級式(畑)

土壤	有効	表土	耕起	(表土の風乾土の硬さ)	(表土の粘着性)	(表土の土性)	土	透水性	保水性	湿潤度	自然肥力	固定力	(土層の塩基状態)	養分	(置換性石灰含量)	(苦土)	(加里)	(有効態燐酸)	(酸度)	障	(物理的障害)	(化学的障害)	(自然傾斜)	(傾斜方向)	(傾斜)	(侵蝕)	(耐風蝕性)	(耐水蝕性)	(耐風蝕性)
土壌生産力可能性等級	厚さ	層の深さ	の礫含量	の難易	の土性	の土性	の乾燥性	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度	の湿度
t	d	g	p				w				f			n						i		s				e			
III	III	III	III	II	II	II	III	III	III	III	III	III	III	II	III	III	III	III	III	III	III	III	III	III	III	III	III	III	
簡略分級式		III d w f i		II n e																									

A 土壤区の特徴

この土壤区は大成統に属する。表土の厚さは2.5 cmで一般に深いが表土以下は極めて堅密で有効土層は浅い。表土は細粒質であるが粘着性は弱く耕起、碎土は容易である。透水性は小さく保水性は中庸、湿性を呈し過湿のおそれが多い。保肥力は大きく固定力中庸。塩基未飽和で自然肥沃度は低い。表土は苦土に乏しく燐酸含量一般に少ない。また酸性を呈する。下層堅密で物理的障害がある。地形はほぼ平坦で土壤侵蝕はない。

B 植生および利用状況

大部分耕地に利用され、菜豆、麦類、馬鈴薯、甜菜、その他デントコーン、牧草などが栽培されている。

C 地力保全上の問題点

先づ暗渠を施行し、さらに下層堅密であるため心土破碎により下層の膨軟化を図り滞水を除去する必要がある。保肥力は大きい塩基に乏しく、石灰、苦土の施用、燐酸の増肥を要する。

D 分布 網走市中園、鱒浦、豊郷

記載責任者 後藤計二(北海道立中央農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

能 取 北 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ18～30cm、腐植含量10～12%、土性はLiCが主である。色は10YRで彩度1～2、明度1～2。発達弱度の細粒状構造。ち密度15～18で中。pH(H₂O)5.5～6.0。下層との境界は判然。

第2層は厚さ15～25cm、腐植含量5～8%、土性はLiCが主である。色は10YRで彩度1～3、明度2～3。発達弱～中度の細塊状構造。ち密度20～25で中。pH(H₂O)5.6前後。下層との境界判然。

第3層は厚さ50cm以上。腐植含量2%以下。土性はLiCが主である。色は10YRで彩度4～6、明度4～6。発達弱度の柱状構造。ち密度25～29で密。pH(H₂O)5.8前後。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市能取 試坑No.3 普通畑(ばれいしょ)

第1層	0～20cm	腐植に頗る富む黒(10YR1.7/1)のLiC、発達弱度の細粒状構造。細孔に富む。ち密度15～18で中。粘着性弱。pH(H ₂ O)5.6。調査時の湿り半乾。下層境界判然。
第2層	20～35cm	腐植に富む黒褐(10YR2/1.5)のLiC、発達弱～中度の細塊状構造。細孔あり、割目不鮮明。ち密度25で密。粘着性中。pH(H ₂ O)5.6。調査時の湿り半乾。下層境界判然。
第3層	35cm～	腐植を欠く褐(10YR4/6)のLiC、発達弱度の柱状構造で細孔含む。割目不鮮明。ち密度28で密。粘着性强。pH(H ₂ O)5.8。調査時の湿り半乾。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 %	粒 径 組 成 (%)				土 性	現 地 容 積 重 (g)	真 比 重	全 炭 素 (%)	全 窒 素 (%)
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土					
1	0～20	6.8	5.6	30.1	36.0	28.3	LiC	69.0	2.4	68.6	0.71
2	20～35	6.6	3.5	28.5	38.5	29.5	LiC	71.5	2.3	42.9	0.48
3	35～	4.7	2.3	27.2	38.0	32.5	LiC	91.5	2.8	—	—

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸係数	有効態磷 (mg/100g)
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	10	11.81	5.6	4.7	1.1	5.954	25.09	4.21	0.48	42	1,046	10.2
2	9	7.38	5.6	4.3	2.3	4.919	9.52	3.31	0.32	19	1,433	3.1
3	—	—	5.8	4.5	1.8	2.375	8.06	3.66	0.51	34	792	2.6

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として大成統、卯原内西統、岐阜統、明治統などがある。大成統、卯原内西統は酸化沈積物が認められることにより、岐阜統、明治統は表土の腐植含量が少ないことによりそれぞれ区別される。

A-3 母材 非固結火成岩、水成岩（凝灰岩、砂岩質）

A-4 堆積様式 洪積世

B 地形 標高20～60mの段丘地。傾斜2～3度の波状性を呈す。

C 気候 年平均気温5.9℃、年降水量850mm、オホーツク海の気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過する。

D 植生および利用状況 大部分耕地に利用され、菜豆、馬鈴薯、甜菜、その他飼料作物が栽培されている。

E 農業上の留意事項

オホーツク海に面し潮風が多い。防風林の完備を要する。下層は塩基に乏しい。有機物の施用、酸性矯正、深耕により耕土層の深化とさらに肥沃度を高めるべきである。

F 分布 北海道網走市能取

調査および記載責任者 後藤計二・上坂晶司（北海道立中央農業試験場）

年月日 昭和45年3月

(2) 土壌統の細分

(1) 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡略分級式
能取北—能取北	III f IIwnse

(2) 土壌区別説明

能取北—能取北

示性分級式(畑)

土壤生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の礫含量	耕起の難易	(表土の粘性)	(表土の乾土の破さ)	土地の乾湿	(透水性)	(保水性)	(湿度)	自然肥沃度	(固定力)	(土層の塩基状態)	養分の豊富	(置換性石灰含量)	(苦土)	(加里)	(有効態燐酸)	(酸)	障害性	(化学的障害)	(物理的障害)	傾斜	(自然傾斜)	(傾斜の方向)	(人為傾斜)	侵蝕	(耐風蝕性)	(耐水蝕性)	(耐土蝕性)		
	t	d	g	p		w		f		n									i	s					e							
	Ⅲ	I	I	I	3	1	1	Ⅱ	2	1	1	Ⅲ	1	2	3	Ⅱ	1	1	2	1	2	I	1	1	Ⅱ	2	N	-	Ⅱ	1	1	2
簡易分級式		Ⅲf		Ⅱwnse																												

A 土壤区の特徴

この土壤区は能取北統に属する。表土は一般に腐植含量多くかつ深く、有効土層も1m以上で深い。表土は微粒質であるが粘着性弱く耕起、砕土は容易である。透水性はやゝ小さく保水力は大きく過湿のおそれは少ない。保肥力大きく固定力中庸であるが、塩基未飽和で自然肥沃度は低い。作土は石灰・苦土などはやゝ富んでいるが、やゝ酸性を呈している。物理的障害性はない。地形は3〜6°で一部侵蝕が認められる。

B 植生および利用状況

大部分耕地に利用され、菜豆、馬鈴薯、甜菜、その他デントコーン、牧草などが栽培されている。

C 地力保全上の問題点

海に面し潮風をうける。防風林を完備し潮風防止を図るべきである。下層の塩基は乏しい。深耕して有機物の施用、炭カル、熔燐の施用により耕土層の肥沃化を図るべきである。

D 分布 網走市能取

記載責任者 後藤計二(北海道立中央農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

卯原内西統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ8～15 cm、腐植含量2～4%、土性はCLが主である。色は10YRで彩度2～3、明度4～5。発達弱度の細塊状および細粒状構造。ち密度20～25で中。不鮮明な酸化沈積物あり。pH(H₂O)5.0～5.5。下層との境界平坦明瞭。

第2層は厚さ10～15 cm、腐植含量2%以下、土性はLiCが主である。色は10YRで彩度3～4、明度6～7。柱状構造で発達中度の塊状構造に割れる。ち密度25以上で密あるいは29以上で頗る密。やや鮮明な酸化沈積物に富む。pH(H₂O)5.1前後。調査時の湿り半乾。下層との境界判然～漸度。

第3層は厚さ50 cm以上、腐植含量1%以下、土性はLiCが主である。色は10YRおよび2.5Yで彩度2～4、明度4～6。柱状構造で発達中度の塊状構造に割れる。ち密度29以上で頗る密。割目に粘土被幕状、酸化沈積物を含む。グライ斑あり。pH(H₂O)5.3前後。調査時の湿り半乾。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市卯原内 試坑No.44 普通畑(牧草)

第1層	0～9 cm	腐植を含む灰黄褐(10YR 5.5/3)のCL、発達弱度の細塊状および一部細粒状構造で細孔含む。ち密度25で密。pH(H ₂ O)5.0。不鮮明な酸化沈積物あり、調査時の湿り乾。下層境界明瞭。
第2層	9～19 cm	腐植を欠く淡黄灰(2.5Y 7/2)のLiC、発達中度の柱状構造で塊状構造に割れる。細孔あり。ち密度34で頗る密。pH(H ₂ O)5.1。酸化沈積物に富む。調査時の湿り半乾。下層境界判然。
第3層	19 cm～	腐植を欠く褐(10YR 4.5/4)のLiC、発達中度の柱状構造で塊状構造に割れる。細孔なし。ち密度32で頗る密。pH(H ₂ O)5.3。割れ目に粘土の被覆あり、酸化沈積物を含む。グライ斑あり。調査時の湿り半乾。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 (%)	粒 径 組 成 (%)				土 性	現 地 容積重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土					
1	0~9	3.1	15.6	24.3	35.7	24.4	CL	91.5	2.6	1.72	0.15
2	9~19	3.0	13.6	23.1	38.1	25.2	LiC	101.0	2.7	—	—
3	19~	3.6	7.0	17.8	34.3	40.9	LiC	105.5	2.7	—	—

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		y ₁	塩基置 換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石 灰 飽和度 (%)	磷酸吸 収係数	有効態磷酸 (mg/100g)
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	11	2.96	5.0	4.1	6.1	13.73	3.31	0.37	0.18	24	216	5.7
2	—	—	5.1	4.2	5.5	14.38	4.39	0.37	0.05	31	409	14.3
3	—	—	5.3	3.9	7.0	17.65	7.69	0.73	0.08	44	469	3.6

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として八坂統、卯原内南統などがある。八坂統、卯原内南統は何れも酸化沈積物が認められないこと。さらに八坂統は下層が砂質であり、卯原内南統とは母材を異にするのでそれぞれ区分することができる。

A-3 母 材 非固結水成岩(泥岩質)

A-4 堆積様式 洪 積 世

B 地 形 標高40~60mの段丘地。3~5°の波状性を呈する。

C 気 候 年平均気温5.9℃、年降水量850mm。オホーツク海の気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過する。

D 植生および利用状況 大部分耕地に利用され、主にデントコーン、牧草、菜豆などが栽培されている。

E 農業上の留意事項

下層が堅密で有効土層が浅い。したがって降雨に滞水し班鉄が多い。暗渠排水、さらに心土破碎によつて透水性の増大を図ること。また一般に作土層が薄いので心土耕による根圏域の拡大を図ることなどの改良を要する。また有機物の富化、酸性矯正を要する。

F 分 布 北海道網走市卯原内

調査および記載責任者 後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

年 月 日 昭和45年3月

岐 阜 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20～25cmで腐植含量8.0%内外、土性はLiCが主である。色は10YRで彩度1、明度3のものが多い。細粒状構造で発達程度は弱度である。ち密度1.3前後で疎、pH(H₂O)5.5～5.9、下層との境界は直線明瞭である。

第2層は厚さ10cm内外で腐植含量2%以下、土性はLiCが主である。色は10YRで彩度1、明度7～8。塊状構造で発達程度は弱度の場合が多い。細孔を含む。斑状の酸化沈積物を含み、ち密度2.0前後で中、pH(H₂O)5.1前後。下層との境界は漸変である。

第3層は厚さ15～20cmで腐植を欠き、土性はLiCが主である。色は10YRで彩度1、明度7の場合が多い。大角柱状構造を呈し、細小孔を含む。斑状、膜状の酸化沈積物を含み、亀裂面に粘土、腐植が被膜状に沈積している。ち密度は1.8～2.0で中、pH(H₂O)5.0～5.5。下層との境界は漸変である。

第4層は地表下概ね45cm以下で腐植を欠き、土性はCLが主である。色10YRで彩度1、明度7の場合が多い。盤層状を呈し、ち密度3.0前後で甚だ密で不透水層になつている。

代表的断面形態

所在地 常呂郡常呂町字岐阜 試坑No 佐26

第1層	0～24cm	腐植に富む黒褐(10YR3/1)のLiC、発達弱度の細粒状構造、ち密度1.3で疎、pH(H ₂ O)5.9。調査時の湿り半乾、境界直線明瞭。
第2層	24～30cm	腐植を欠く淡黄褐灰(10YR6/1)のLiC、発達弱度の塊状構造、細小孔を含む。斑状の酸化沈積物を含む。ち密度2.0で中、pH(H ₂ O)5.1。調査時の湿り半乾。境界漸変。
第3層	30～45cm	腐植を欠く淡黄褐灰(10YR7/1)のLiC、大角柱状構造、斑状の酸化沈積物を含み、構造亀裂面に粘土、腐植の膜状流下が見られる。ち密度1.8で疎、pH(H ₂ O)5.3、調査時の湿り湿、境界漸変。
第4層	45～cm	腐植を欠く淡黄褐灰(10YR7/1)のCL、盤層状を呈し、ち密度3.0で甚だ密。

代表的断面の分布成績

層位	採取部位 (cm)	水分 (%)	粒 径 組 成 (%)				土 性	全炭素 (%)	全窒素 (%)	炭素率	腐 植 (%)
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土					
1	0~24	1.4	4.9	21.3	34.7	31.1	LiC	4.66	0.38	12	8.0
2	24~30	1.3	3.8	21.9	42.9	31.4	LiC	0.51	0.08	7	0.9
3	30~45	0.1	3.6	20.6	32.1	43.7	LiC	—	—	—	—

層位	pH		置換酸度 y_1	塩基置換容量 $me/100g$	置換性塩基 $me/100g$			石 灰 飽 和 度 (%)	磷 酸 吸 取 係 数	有 効 態 磷 酸 $mg/100g$
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	5.9	5.0	1.3	17.0	13.7	13.6	0.4	80.4	88.9	13.8
2	5.1	3.9	16.3	7.2	4.3	2.3	0.1	60.0	48.5	tr
3	5.3	3.9	15.0	13.3	6.8	5.1	0.2	51.4	80.0	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する現は類似する統としては能取北統、能取中央統、卯原内西統などがある。能取北統能取中央統は下層に酸化沈積物が認められないこと、卯原内西統は母材が泥岩であることにより、それぞれ区別される。

A-3 母 材 非固結水成岩 (凝灰質)

A-4 堆積様式 洪積世堆積

B 地 形

標高 40~50 m の緩波状を呈する台地。

C 気 候

一般に冷涼で、オホーツク海の気圧配置によりしばしば夏季低温に見舞われて冷害凶作を受けることがある。年平均気温 5.6℃、年間降水量 800 mm 内外。

D 植生及び利用状況

大部分耕地に利用され馬鈴薯、ビート、牧草その他飼料作物が栽培されている。

E 農業上の留意事項

下層堅密なため一時的に停滞水を生じて排水不良を呈するから暗渠排水未実施のところは完全な暗渠排水を実施するとともに心土破碎を併せて実施することが必要である。土壌はかなり有機物を含有するが固結し易い性質を有するから堆肥、緑肥等の有機物を施し漸次深耕し、石灰、苦土、加里等の塩基を補給することが望ましい。

F 分 布 常呂郡常呂町字富丘岐阜の大部分および網走市能取

調査及び記載責任者 高尾欽弥・後藤計二・上坂晶司
 (北海道立中央農業試験場)

日 付 昭和45年3月31日

(2) 土壌統の細分

(1) 土壌区一覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
岐 阜 — 岐 阜	III dpw II t f n i s

(2) 土壌区別説明

岐 阜 — 岐 阜

示性分級式 (畑)

土 壤 生 産 力 可 能 性 等 級	表 効 土 層 の 厚 さ	有 効 土 層 の 深 さ	表 土 の 磔 含 量	耕 起 土 の 難 易	(表土の粘着性)	(表土の土性)	(表土の風乾土の硬さ)	土 地 の 乾 湿	透 水 性	保 水 性	湿 潤 度	自 然 肥 力	固 定 力	養 分 の 塩 基 状 態	(置換性石灰含量)	(苦土)	(加里)	(有効態磷酸)	(微量要素)	(酸害)	(有害物質の有無)	(物理的障害性)	(災害)	(増冠水の危険度)	(地すべりの危険度)	傾 斜 の 傾 方 向	傾 斜 の 傾 方 向	侵 蝕 度	耐 風 蝕 性	
	t	d	g	p				w				f		n						i		a		s				e		
	III	II	III	I	III	3	3	2	III	3	2	2	II	2	2	2	II	1	1	2	1	2	2	II	1	2	I	1	1	1
	簡略分級式 III dpw II t f n i s																													

A 土壌区の特徴

この土壌区は岐阜統に属する。作土の厚さは20cm前後で中庸、有効土層は50cm以内で浅い。下層不透水層のため停滞水を生じて一時的排水不良を呈する。土性細粒質で粘着性強く固結し易いため耕起碎土が困難である。保肥力、磷酸固定力とも中庸で、土層の塩基状態は未耕地は不良であるが、土壌改良資材の投入されているところは塩基含量が高められているため略中庸の程度を示す。有効態磷酸は耕地では土改資材の投入や施肥により中程度存在することが多いが未耕地で欠乏している。緩傾斜を呈するが水蝕のおそれは少い。有効土層浅く物理的障害を受ける。

B 植生及び利用状況

大部分耕地に利用され馬鈴薯、ビート、牧草その他の飼料作物が栽培されている。

C 地力保全上の問題点

下層堅密のため透水不良となつて停滞水を生じ一時的過湿のおそれが多いから暗渠排水未実施の

ところは完全な暗渠排水と心土破碎の実施が特に必要であり、また堆肥、緑肥等の有機物の施用を行いながら漸次深耕して行くこと、更に石灰、苦土の塩基の施用も必要なことである。草地に対する施肥は当然必要事項となるし、草地造成の場合土地改良はもとより石灰、苦土等塩基の施用も欠かせない事項である。

D 分 布 北海道網走市能取、常呂郡常呂町字富丘、岐阜の大部分

記載責任者 高尾欽弥・後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

日 付 昭和45年3月31日

明 生 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ17~22cm、腐植含量は4~8%、土性はCLである。色は10YR~7.5YR。彩度2、明度3である。礫がなくち密度10~12で頗る疎~疎、湿り半乾。pH(H₂O)6.1~6.3 下層への境界は平坦明瞭。本層はAs・Me-a、Km-5a層の混合層。

第2層は厚さ23~25cm、腐植含量は3%内外、土性はL~SiCLである。色は10YR~7.5YR、彩度6、明度5である。礫なく発達程度甚だ弱の粒状構造を呈し、中、小孔に富む。ち密度15~18で疎、可塑性、粘着性弱く湿り半乾。pH(H₂O)6.3~6.5、下層への境界は波状階段である。

第3層は厚さ22~30cm内外、腐植を欠くCLが主体である。色は10YR~7.5YR、採度6、明度4~5である。発達弱度の細塊状~塊状構造を呈し、中、小孔は中。可塑性、粘着性は中。ち密度は22~24で中、湿り半乾、pH(H₂O)6.2~6.7、下層への境界は平坦明瞭である。本層直下には5cm内外の厚さに腐植を欠き、礫を含む灰褐色(5YR4/2)のSL層(触感)が存在する。

第4層は厚さ25cm内外、腐植を欠くL~SiCLである。色は10YR及び7.5YRで、彩度6、明度は6~7である。発達程度は甚弱い細塊状構造を呈し、小孔は中程度、ち密度は18~22で疎~中である。可塑性、粘着性は小である。湿り半乾、pH(H₂O)6.7内外。

代表的断面形態

(所在地) 網走郡東藻琴村明生、大進、 試坑No.12

第1層	0~18 cm	腐植に富む灰褐(7.5 Y R 3/2)のSL、ち密度9~12で頗る疎~疎、pH(H ₂ O)6.1。調査時の湿り半乾、境界平坦明瞭、本層はAs・Me-a、Km-5a層の混合層
第2層	18~43	腐植を含む黄褐(7.5 Y R 5/6)のSiCL、発達甚弱度の粒状構造、中小孔に富む、ち密度17~18で疎、pH(H ₂ O)6.5内外の調査時の湿り半乾、境界波状漸変。
第3層	43~65	腐植を欠く黄褐(10 Y R 5/6)のCL、発達弱度の塊状構造を呈し、中小孔は中、ち密度22~24で中、pH(H ₂ O)6.7内外、調査時の湿り半乾、境界平坦明瞭、本層直下には5 cm内外の厚さに腐植を欠き礫を含む灰色(5 Y 4/2)のSL(触感)層が存在する。礫は2~5 mm径の黑色岩片
第4層	70~95	腐植を欠く黄褐(10 Y R 6/6)及び黄褐(10 Y R 7/6)のSiCL、発達甚弱度の塊状構造で中、小孔中、ち密度18~20で疎~中、pH(H ₂ O)6.7内外、調査時の湿り半乾

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 (%)	粒 径 組 成 (%)				土 性	現 地 容 積 重 (g)	真 比 重	全 炭 素 %	全 窒 素 %	炭 素 率	腐 植 %
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土							
1	0~18	5.1	37.8	33.5	23.2	5.5	SL	109.9	2.6	3.57	0.28	12.8	6.1
2	18~43	11.7	6.5	26.3	45.1	22.1	SiCL	97.1	2.6	1.99	0.21	9.5	3.4
3	43~65	9.6	5.5	37.3	35.2	22.0	CL	106.8	2.7	0.72	0.08	9.0	1.2
4	70~95	9.1	3.4	30.3	50.5	15.8	SiCL	111.5	2.3	—	—	—	—

層位	pH		置換酸度 y ₁	塩 基 置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石 灰 飽 和 度 %	燐 酸 吸 収 係 数	有 効 態 磷 酸 mg/100g
	H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	6.1	5.3	0.3	17.4	12.5	0.2	0.6	72	1,285	3.5
2	6.5	5.4	0.3	17.4	8.0	0.3	0.5	45	2,003	0.6
3	6.7	5.6	0.3	13.9	5.9	0.4	0.4	42	1,747	0.2
4	6.7	5.4	0.1	17.3	9.2	1.1	1.6	53	1,309	0.5

A-2 他の土壌統との関係

本統に類似する統としては、浦士別東統、稲富北統、菅野統などがある。表層の雌阿寒岳火山灰 a 層、カムイヌプリ岳火山灰 5 a 層の被覆は同様であるが、カムイヌプリ岳火山灰 5 a 層は本統より薄層であり、土性がやゝ細かいことにより区別される。

A-3 母 材 非固結火成岩（凝灰岩、軽石）

A-4 堆積様式 風積／洪積世

B 地 形 標高 70～120 m の波状性高台地～波状性丘陵地

C 気 候

オホーツク海の気圧配置により夏季冷涼に経過することもあり、春先季節風が強い。年平均気温 5.9℃、年平均降水量 850 mm 内外。

D 植生及び利用状況

耕地にはてん菜、馬鈴薯、ハツカ、豆類、麦類、飼料作物等が栽培された未耕地にはカンワ、イタヤ、ナラ等の樹木が生育している。

E 農業上の留意事項

春先季節風により風蝕を受けるので風蝕防止対策が必要である。

F 分 布 北海道網走郡東藻琴村明生、大進、網走市清浦

調査及び記載責任者 高橋市十郎・後藤計二・上坂晶司

（北海道立中央農業試験場）

年 月 日 昭和 45 年 3 月 31 日

(2) 土壌統の細分

(1) 土壌区一覧

土 壌 区 分	簡 略 分 級 式
明生—明生—2	IIIe II t(w) n

(2) 土壤區別説明

明 生 — 明 生 — 2

示性分級式(畑)

土壤生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の礫含量	耕土の難易	(表土の粘着性)	(表土の乾土の硬さ)	土地の乾性	(土の透水性)	(水の乾性)	(湿度)	(自然潤性)	(保肥力)	(固定力)	(土層の塩基状態)	(養分)	(置換性石灰含量)	(苦土)	(加里)	(有効態)	(酸)	(化学的障害)	(物理的障害)	(自然傾斜)	(人為傾斜)	(侵蝕)	(耐風蝕性)	(耐水蝕性)			
t	d	g	p				w			f				n						i		s			e					
III	II	I	I	I	1	1	(D)	1	(2)	1	II	1	1	2	III	1	3	3	2	1	I	1	1	II	2	Ew	-II	2	2	2
簡略分級式 III n II t(w) f s e																														

A 土壤区の特徴

本土壤区は明生統に属する。表土は17~22cm内外で中庸で、有効土層は台地の部分は1m以上で深いが傾斜の部分は50cm以内より浮石礫が多く含まれて、有効土層は浅くなる。表土は粗粒質で粘着性は小さいが、心土層以下は中粒質となり、粘着性は中程度である。透水性は良好で過干のおそれがある。保肥力は中、固定力は作土は小、心土層は大土層の塩基状態は略中庸で、自然肥沃度は中庸。有効態磷酸含量は作土中庸、心土層以下は極めて少ない。置換性塩基含量は苦土が少ない。地形は波状を呈し、斜面は5~8°であるが水蝕は少ない。しかし風蝕は大きい。

B 植生及び利用状況

耕地化は半ば以下で、てん菜、馬鈴薯、ハッカ、豆類、麦類、飼料作物等が栽培されている。未耕地にはカシワ、イタヤ、ナラ等の樹木が生育している。

C 地力保全上の問題点

台地上は傾斜は比較的少ないが、膨軟、軽鬆な土壤で風蝕の起り易い土壤であり春先季節風が強いので風蝕防止対策が必要である。また傾斜地は水蝕も起るからこの対策も望まれる。

D 分 布 北海道網走郡東藻琴村明生、大進、網走市清浦

記載責任者 高橋市十郎・後藤計二・上坂晶司

(北海道立中央農業試験場)

年 月 日 昭和45年3月31日

浦 士 別 東 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ16~21cm、腐植含量は6.6%、土性はSLである。色は10YRで、彩度2~3、明度2である。礫なく、発達弱~中程度の細粒状構造、ち密度は6~8、pH(H₂O)は6.0前後、下層との境界は堆積様式の相違のため稍明瞭である。

第2層は厚さ19~37cm、腐植含量は4.9%、土性はLである。色は10YRで、彩度3~6、明度4である。礫なく、構造は発達弱度の細粒状構造が僅かに見られるが、大部分は連結状で、細孔は含む~富む。ち密度は15~17。pH(H₂O)は5.6前後。下層との境界はおおむね漸変する。

第3層は厚さ20~25cm、腐植含量は1.7%、土性はSLである。色は10YRで、彩度6~8、明度4~8である。礫なく、構造は殆んど連結状で、僅かに塊状構造を含む処がある。細孔あり、ち密度は12。pH(H₂O)は5.9前後。下層との境界は明瞭な処が多い。

第4層はおおむね55cm以下で、腐植含量は1.2%、土性はLである。色は10YRで、彩度4~8、明度5~8である。腐朽礫(砂岩)が含まれる。細小孔を含む。ち密度14。pH(H₂O)は6.3前後。

代表的断面形態

(所在地)網走市浦士別 試坑 №38

第1層	0~16cm	腐植に富む、黒褐(10YR2/2)のSL、発達中程度の細粒状構造、礫なく、ち密度6、pH(H ₂ O)6.0、調査時の湿り半乾、境界波状稍明瞭。
第2層	16~35cm	腐植を含む、灰黄褐(10YR4/3)のL、発達小の細粒状構造、礫なく、ち密度15、pH(H ₂ O)5.6、調査時の湿り半乾、境界波状漸変
第3層	35~55cm	腐植を欠く、褐(10YR4/6)のSL、連結状、細小孔あり、礫なくち密度12、pH(H ₂ O)5.9、調査時の湿り半乾、境界直線明瞭。
第4層	55~ cm	腐植を欠く、灰黄褐(10YR5/4)のL、発達弱度の角塊状構造、腐朽礫を含む。細小孔を含む。ち密度14、pH(H ₂ O)は6.3。調査時の湿り半乾

代表的断面の分析成績

層位	深さ %	水分 %	粒 径 組 成 %					現 地 容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率 %
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土	土 性					
1	0~16	3.4	18.6	46.8	30.4	4.4	SL	73	2.5	3.83	0.30	13
2	16~35	4.4	5.8	52.6	41.6	0	L	64	2.5	2.87	0.24	12
3	35~55	7.6	2.2	66.1	31.7	0	SL	54	2.7	1.00	0.13	8
4	55~	6.6	4.9	59.6	35.5	0	L		2.7	0.72	0.07	10

層位	腐植 %	pH		置換酸度 y ₁	置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g		石 灰 飽和度 %	磷酸吸収 係 数	有効態磷酸 (mg/100g)
		H ₂ O	KCl			CaO	MgO			
1	6.6	6.0	5.0	0.4	15.5	9.1	0.5	5.85	1,246	10.9
2	4.9	5.6	4.8	0.4	14.2	4.6	0.6	3.26	2,061	4.0
3	1.7	5.9	5.1	0.4	12.3	4.5	1.7	3.62	2,212	3.8
4	1.2	6.3	5.3	0.2	13.6	4.8	1.1	3.53	1,845	—

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として明生統、稲富北統、萱野統がある。明生統はカムイヌブ岳火山灰5a層が厚いことにより、稲富北統は地形が波状を呈し傾斜5~6°を呈することにより、萱野統は下層が細粒質であることによりそれぞれ区分することができる。

A-3 母 材 非固結火成岩(火山灰)/半固結火成岩(凝灰岩・軽石)

A-4 堆積様式 風積(火山性)/洪積世堆積

B 地 形

標高は30~50mで、平均傾斜3度の波状性段丘である。

C 気 候

オホーツク海の影響を受け、一般に冷涼で、農期間中の降雨量は少ない。尚春季の風蝕は著しい。年平均雨量は874mmで、年平均気温は5.9℃である。

D 植生及び利用状況

沢地を除き、殆んど耕地として利用され、菜豆、馬鈴薯、甜菜、麦類の他にテントコーン、牧草が栽培されている。

E 農業上の留意事項

地力の低い火山性土壌で、更に風蝕の激しい地帯であるので、堆肥の施用、緑肥作物の導入により、地力の増進を図る事が必要と考えられる。

風蝕を防ぐため、裸地にする事を成る可く避け、更に防風林の完備に努める事も必要である。

F 分布

北海道網走市浦士別、音根内、藻琴

調査及び記載責任者 野村 琥、後藤計二、上坂晶司(北海道立農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

(1) 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
浦士別東—浦士別東	III ne(W) II tf

(2) 土壤区別説明

浦士別東統—浦士別東区

示性分級式

土表有表耕	(表)	(表)	(表)	土	(透)	(保)	(湿)	自	(保)	(固)	養	(置)	()	()	(有)	(酸)	障	(化)	傾	(自)	(人)	侵	(耐)			
壤生	効	土	土	地	水	水	潤	然	肥	定	分	換	石	苦	加	磷	害	学	理	然	斜	為	水			
産力	の	の	の	の	水	水	潤	沃	力	力	の	の	灰	土	里	酸	障	的	的	傾	方	傾	蝕			
可能	厚	深	含	粘	性	性	度	度	度	度	状	量	量	量	度	度	害	害	斜	向	斜	蝕	蝕			
性	等	級	さ	さ	易	性	性	度	度	度	否)))))	性	性	斜	向	斜	度	性			
	t	d	g	p	w			f		n					i		s				e					
	III	II	I	I	I	1	1	III	1	3	(2)	II	2	2	1	III	2	1	3	1	1	I	1	1		
																						w	-III	2	3	2
	簡略分級式 III ne(W) w II tf																									

A 土壤区の特徴

この土壤区は浦士別東統に属する。表土の厚さは16cm内外。有効土層は1m以上。表土は礫なく、粗粒質で、粘性は弱い。下層には腐朽礫があり、中粒質である。

保肥力中、固定力小、酸性は弱い。

作土は苦土、石灰等が稍多いが、加里に欠乏している。酸性は弱い。

特殊の障害性は存在しないが、過干のおそれが多く、風蝕を受け、地力の低下し易い土壤である。

B 植生及び利用状況

殆んど耕地として利用され、馬鈴薯、えん麦、豆類、ビート等を作付し、最近は増収の傾向にあるが、未だ低水準である。

C 地力保全上の問題点

この土壤区は表土が地力の低い火山性土壤で、粗粒質で、粘性は弱く、風蝕を受け易い。従つて風蝕を防ぎ、地力を増進するために、裸地の面積を減らし、堆肥の施用、緑肥作物の導入に努め、更に防風林を完備する事が必要である。

D 分 布

北海道網走市浦士別、音根内、藻琴

記載責任者 野村 堯・後藤 計二・上坂 晶司

(北海道立農業試験場)

日 付 昭和37年3月31日

昭和45年3月31日

稲 富 北

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ8~15cm、腐植含量5~8%、土性はSL~Lが主である。色は10YRで彩度2~3、明度4~5。発達弱度の細粒状構造。ち密度10以下で疎。粘着性弱。pH(H₂O)6.0前後。下層との境界は平坦明瞭。

第2層は厚さ10~30cm、腐植含量2%以下、土性はSL-LでSLが主である。色は10YRで彩度6~8。明度5~7。発達弱度の細粒状構造。ち密度20~25で中。粘着性弱。pH(H₂O)6.0前後。下層との境界判然。

第3層は厚さ50cm以上、腐植含量1%以下、土性はSで軽石の半風化小角礫を含む~富む。単粒状でち密度10~26で中。粘着性弱。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市稲富 試坑16.104 普通畑(牧草)

第1層	0~9cm	腐植に富む黄褐灰(10YR4/2.5)のL、発達弱度の細粒状構造。ち密度6で疎。粘着性弱。pH(H ₂ O)6.0。調査時の湿り乾。下層境界平坦明瞭。
第2層	9~33cm	腐植を欠く黄褐(10YR5/7)のL、発達弱度の細粒状および一部細塊状構造。細孔に富む。半風化小半角礫(軽石)あり。ち密度25で密、粘着性弱。pH(H ₂ O)6.0。調査時の湿り乾。境界漸変。
第3層	33cm~	腐植を欠く灰黄橙(10YR6/3)のS(触感)で半風化小半角礫(軽石)を含む。単粒状で細孔に富む。ち密度26で密。粘着性なし。調査時の湿り半

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 (%)	粒径組成 (%)				土性	現地容積重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土						
1	0~9	5.3	34.0	24.7	27.7	13.6	L	79.5	2.6	4.18	0.34	12
2	9~33	7.7	20.3	28.6	36.5	14.6	L	66.5	28	—	—	—

層位	腐植 (%)	pH		y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効態磷酸 (mg/100g)
		H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	7.19	6.0	5.2	0.8	22.24	7.65	0.25	0.14	3.4	1.158	4.0
2	—	6.0	5.4	0.5	17.84	53.6	0.25	0.17	3.0	1.462	7.8

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として明生統、浦士別東統、萱野統などがある。明生統はカムイヌブリ岳火山灰 5 a 層が厚いことにより、浦士別東統、萱野統は下層が壤質、細粒質であることによりそれぞれ区分することができる。

A-3 母材 非固結火成岩 (凝灰岩・軽石)

A-4 堆積様式 風積 (火山性) / 洪積世 (火山性)

B 地形 小丘状を呈し、2~5° の傾斜を呈する台地。

C 気候 年平均気温 5.9℃、年降水量 850mm、オホーツクの気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過する。春先季節風が強く風侵多い。

D 植生および利用状況 耕地として利用され、菜豆、馬鈴薯、甜菜、牧草、玉蜀黍、などが栽培されている。なお侵蝕をうけ荒廃しているところも僅かに認められる。

E 農業上の留意点

季節風が強いところであり防風林の完備を要する。作土が薄く、湿度が低い。有機物の補給に ついて漸次深耕を要する。

E 分布 北海道網走市稲富、山里、実豊

調査および記載責任者 後藤計二・上坂晶司 (北海道立中央農業試験場)

年月日 昭和45年3月

萱 野 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20～25cmで腐植含量は8%内外、土性はSLが主である。色は10YRで彩度2、明度3のものが多い。発達弱度の細粒状構造。ち密度1.0～1.7で疎～中。pH(H₂O)6.2前後。下層との境界は平坦明瞭、雌阿寒岳火山灰1a層、2a層、カムイヌプリ岳火山灰5a層および下層土の一部混合する作土。

第2層は厚さ20～50cmで腐植含量1～3%、土性はL～CLである。色は10YRで彩度6明度4が多い。発達弱度の粒状構造。細孔に富む。ち密度1.6～2.0で中。pH(H₂O)6.4前後。下層との境界は波状判然～漸変。

第3層は厚さ30～50cmで腐植含量1%以下、土性はSiCLが主である。色は10YRで彩度6、明度5が多い。発達中度の塊状構造。ち密度2.6で密。pH(H₂O)6.4前後。下層との境界は平坦明瞭。本層は1～3cm大の円球状の特徴ある構造を呈する火山灰ローム層(通称ボール状層と云われている。)なお本層は構造が甚だ不鮮明な場合もあり、場所によつては欠くところもあつて、かゝるところは第2層が厚い。

代表的断面形態

(所在地) 北海道斜里郡小清水町東野三 試坑No.23 普通畑

第1層	0～23cm	腐植に富む黒褐(10YR3/2)のSL、発達弱度の細粒状構造、ち密度1.7で中。pH(H ₂ O)6.2。調査時の湿り乾。境界平坦明瞭。雌阿寒岳火山灰1a層、2a層、カムイヌプリ岳火山灰5a層および下層土の一部混合する作土。
第2層	23～48cm	腐植を含む褐(10YR4/6)のCL、発達弱度の細粒状構造で細孔に富む。ち密度2.0で中。pH(H ₂ O)6.4。調査時の湿り半乾。境界波状漸変。
第3層	48～71cm	腐植を欠く黄褐(10YR5/6)のSiCL、発達中度の塊状構造で細孔を含む。ち密度2.6で密。pH(H ₂ O)6.4。調査時の湿り半乾。境界明瞭。(ボール状層)
第4層	71～76cm	腐植を欠く褐灰(10YR5/1)のL。発達中度の細粒状構造で細孔に富む。ち密度2.8で甚密。pH(H ₂ O)6.7。調査時の湿り半乾。境界明瞭。
第5層	76～100cm	腐植を欠く(10YR4/4)のSiCL。発達弱度の細塊状構造で細小孔を含む。

む。ち密度 2.0 で中。pH(H₂O) 6.6。調査時の湿り半乾。境界波状漸変。
 洪積世の豊住火山灰層？

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 (%)	粒 径 組 成 (%)				土 性	現 地 容 積 重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)	炭素率
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土						
1	0~23	3.1	41.6	26.3	25.2	6.9	SL	10.38	2.6	45.8	0.29	16
2	23~48	8.0	14.6	27.4	38.0	20.0	CL	10.18	2.7	—	—	—
3	48~71	9.9	12.6	22.7	45.2	19.5	SiCL	12.98	2.8	—	—	—
4	71~76	6.4	19.7	28.6	37.1	14.6	L	—	—	—	—	—
5	76~100	6.1	10.3	10.6	55.8	23.3	SiCL	—	—	—	—	—

層位	腐 植 (%)	pH		y ₁	塩基置換容量 (me/100g)	置換性塩基 (me/100g)			石 灰 飽 和 度 (%)	磷酸吸収係 数	有効態磷酸 (mg/100g)
		H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	12.0	6.2	5.1	0.3	16.5	8.9	0.4	0.4	54	1.023	2.3
2	—	6.4	5.5	0.3	17.2	5.9	0.3	0.5	34	2.077	0.8
3	—	6.4	5.6	0.3	17.2	4.8	1.2	0.3	28	2.065	0.3
4	—	6.7	5.5	0.1	13.3	2.9	1.5	0.4	22	1.078	0.3
5	—	6.6	5.3	0.5	17.5	8.2	2.6	1.5	47	1.205	0.1

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統としては浦士別東統、稲富北統、明生統などがある。明生統はカムイヌプリ岳火山灰 5a 層が厚いため作土層の土性が粗く、下層にボール状層の存在が判然としないこと、稲富北統は下層が明生統と同一であること、浦士別東統はボール状層の存在が判然とせず、その上層が厚く堆積することにより区別される。

A-3 母 材 非固結火成岩（火山灰）

A-4 堆積様式 風積（火山柱）／洪積世堆積（火山性）

B 地 形 略平坦な台地

C 気 候

オホーツクの気圧配置によりしばしば夏期冷涼に経過することが多い。また春先は季節風が強い。年平均気温 5.9℃、降水量は 965mm で少ない。

D 植生および利用状況

大部分耕地に利用され、麦類、馬鈴薯、甜菜、菜豆などが栽培され、その他牧草が多い。未耕地

は少ないが、カシワ、シラカバの樹林地である。

E 農業上の留意事項

季節風が強く風蝕被害が多いので防風林の完備を要する。作土の薄いところも見られ、苦土、燐酸の少ない傾向が見られるので燐酸の施用さらに有機物の増施につとめ地力維持を図るべきである。

F 分布 北海道網走市浦士別、音根内、実豊、山里、斜里郡小清水町

- 調査及び記載責任者 後藤計二・上坂晶司・山本晴雄(北海道立中央農業試験場)
- 年 月 日 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

(1) 土壤区一覧

土 壤 区 名	簡略分級式
萱野 — 萱野 1	IIIe II t(w)fn

(2) 土壤区別説明

萱 野 — 萱 野 1

示性分級式(畑)

土性生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の礫含量	耕転の難易	(表土の粘性)	(表土の乾土の硬さ)	(土の透水性)	(水の乾性)	(保水性)	(自然肥沃度)	(固定力)	(養分塩基状態)	(着接性石灰含量)	(苦土)	(加里)	(有効態燃素)	(微量要素)	(酸)	(障害性)	(有害物質の有無)	(物理的障害性)	(災害)	(増冠水の危険度)	(地すべりの危険度)	(傾斜)	(自然傾斜)	(人為傾斜)	(侵蝕)	(耐水蝕性)	(耐風蝕性)					
t	d	g	p			w		f		n								i		a		s													
II	II	I	I	I	1	1	(2)(II)	1	2	(2)	II	2	2	2	II	1	3	1	2	1	1	I	1	1	I	1	1	I	1	—	—	III	2	3	2
簡略分級式		IIIe II t(w)fn																																	

A 土壤区の特徴

この土壤区は萱野統に属する。作土の厚さは20~25cmで有効土層は1m以上で深い。土性は中粒質で粘着性弱く耕起、砕土は容易である。透水性は大きく保水性は中庸で春先の乾燥時は過干のおそれがある。保肥力はやゝ小さく、固定力は小、塩基は未飽和で自然肥沃度は中位である。表土は苦土、燐酸に乏しい。物理的な障害性はない。風蝕のおそれが多い。

B 植生および利用状況

大部分は耕地に利用され、麦類、馬鈴薯、甜菜、菜豆、牧草が主に栽培されている。

C 地力保全上の問題点

春季の季節風が強いので防風林の完備を要する。作土が薄いところも見られ、苦土、燐酸の少ない傾向が見られるので、有機物の増施と共に深耕し、燐の増施につとめる必要がある。

D 分布 網走市浦士別、音根内、実豊、山里

記載責任者 後藤計二(北海道立中央農業試験場)

日 付 昭和45年3月31日

萱野 — 萱野 2

示性分級式(畑)

土壌生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の粘着性	耕起の難易	(表土の風乾土の硬さ)	(表土の粘着性)	(表土の風乾土の硬さ)	土壌の乾燥性	透水性	保水性	自然肥度	固肥力	土層の塩基状態	養分	(苦土)	(加里)	(燐酸)	化学的障害	物理的障害	傾斜	人為的傾斜	侵入	耐風性	耐水浸蝕性	耐風性	耐水浸蝕性	
t	d	g	p		w		f		n		i	s	e														
II	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I
簡略分級式 II f n e																											

A 土壤区の特徴

この土壤区は萱野統に属する。萱野1とはボール状傾が極めて鮮明にあらわれ、土性もやゝ細かく堅密度もやゝ密であるため区分した。表土はやゝ深く25cm以上が多く、有効土層は1m以上で深い。表土は中粒質で粘着性弱く耕起、砕土は容易である。透水性は大きく、保水性も高く過干のおそれは萱野1より少ない。保肥力大きく固肥力中、塩基やゝ未飽和で自然肥沃度は中位である。作土は苦土、加里にやゝ乏しい傾向がある。地形平坦で風蝕のおそれが多い。

B 植生および利用状況

全域耕地に利用され、馬鈴薯、甜菜、菜豆、牧草、麦類が栽培されている。

C 地力保全上の問題点

春季の季節風が強いので防風林の完備を要する。作土が薄いところも見られるので有機物の増施と共に深耕が望ましい。この場合苦土、燐酸が少ない傾向が見られるので燐の増施により改善することが必要である。

D 分布 網走市浦士別、音根内、実豊、山里

記載責任者 後藤計二(北海道立中央農業試験場)

日 付 昭和45年3月31日

嘉 多 山 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ19～30cm、腐植含量は17.7%、土性はLである。色は7.5～10YRで、彩度1、明度1である。礫なく、発達弱～中程度の細粒状構造の混合である。ち密度7～16、pH(H₂O)は5.4前後、下層との境界は稍明瞭である。

第2層は厚さ12～25cm、腐植含量は13.5%、土性はLiCである。色は7.5～10YRで、彩度1～3、明度1～3である。礫なく、発達中 強度の細粒状～粒状構造の混合である。最小孔を含む。ち密度は15～23。pH(H₂O)は5.4前後。下層との境界はおおむね漸変する。

第3層は厚さ12～20cm、腐植含量6.2%、土性はLである。色は7.5～10YRで、彩度3～6、明度3～6である。礫なく、発達中程度の粒状構造と連結状の混合。細小孔を含む。ち密度は14～24。pH(H₂O)は5.5前後。下層との境界はおおむね漸変する。

第4層はおおむね66cm以下で、腐植を欠き、土性Lの処が多く、色は7.5～10YRで、彩度4～8、明度4～7である。礫なく、連結状構造の処が多い。ち密度13～26。

代表的断面形態

(所在地) 網走市嘉多山 試坑No17

第1層	0～21cm	腐植に頗る富む、黒(10YR1/1)のL、発達中程度の細粒状構造と粒状構造の混合、礫なく、ち密度8、pH(H ₂ O)5.4、調査時の湿り半乾、境界波状稍明瞭
第2層	21～46cm	腐植に頗る富む、黒～黒褐(10YR1/1～10YR2/2)のLiC、発達程度強の細粒状構造と粒状構造の混合、礫なく、ち密度18、pH(H ₂ O)5.4、調査時の湿り半乾、境界波状漸変
第3層	46～67cm	腐植に富む、暗褐(10YR3/4)のL、発達程度中の粒状構造と連結状(多孔質)の混合、礫なく、ち密度17、pH(H ₂ O)5.5、調査時の湿り半乾～湿、境界波状漸変
第4層	67～ cm	腐植を欠く、黄褐(10YR5/8)のL、連結状、礫なく、ち密度17、調査時の湿り半乾

代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	粒径組成 %					現地 容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗砂	細砂	シルト	粘土	土性					
1	0~21	5.9	11.9	54.3	26.6	7.1	L	61	2.33	10.26	0.82	13
2	21~46	6.9	2.6	33.1	37.9	26.3	LiC	68	2.47	7.84	0.61	13
3	46~67	7.1	6.9	45.8	36.0	11.3	L	74	28.8	3.59	0.28	13

層位	腐植 %	pH		置換酸度 y_1	置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g		石灰飽和度 %	磷酸吸 収係数
		H ₂ O	KCl			CaO	MgO		
1	17.7	5.4	4.5	1.0	48.9	23.2	1.8	47.4	1,484
2	13.5	5.4	4.4	1.2	39.5	16.3	3.4	41.3	1,937
3	6.2	5.5	4.4	1.8	21.7	6.2	2.0	28.7	1,629

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統は卯原内統、丸万統がある。卯原内統は湿性を呈し酸化沈積物が認められ、腐植層が浅いこと、丸万統は卯原内統と同様湿性を呈し酸化沈積物が認められ、かつカムイヌプリ岳火山灰 5 a 層が堆積し土性がやゝ粗いことによりそれぞれ区分される。

A-3 母材 半固結火成岩(凝灰岩)

A-4 堆積様式 洪積世堆積

B 地形

標高は 30 m 内外で、略平坦な段丘である。

C 気候

オホーツク海の影響を受け一般に冷涼である。農期間中の降雨量は少ない。年平均雨量は 874 mm で、年平均気温は 5.9℃ である。

D 植生及び利用状況

全域耕地として利用され、菜豆、馬鈴薯、甜菜、デントコーン、牧草などが栽培されている。

E 農業上の留意事項

全般に腐植層は厚いが、表土には火山灰を混じ、土壌の粘性は弱く、春季の強風により風蝕を受け易い。更に此の地域は古くから開墾され、豆類を連作した処では特殊の微量要素欠乏の様子も見られるので、地力の維持増進には細心の注意を必要とする処である。

F 分佈 北海道網走市、卯原内、嘉多山

調査及び記載責任者 野村 號・後藤 計二・上坂 晶司(北海道立農業試験場)

(2) 土壤統の細分

(1) 土壤区一覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
嘉 多 山 - 嘉 多 山 1	III ne II f
" - " 2	II fn
" - " 3	III f II ne

(2) 土壤区別説明

嘉 多 山 - 嘉 多 山 1

示性分級式

土 壤 生 産 力 の 可 能 性 等 級	表 土 の 厚 さ	有 効 土 層 の 深 さ	表 土 の 礫 含 量	耕 土 の 難 易	(表 土 の 粘 着 性)	(表 土 の 乾 硬 性)	土 地 の 乾 湿	透 水 性	保 湿 性	自 然 肥 沃 度	固 定 力	(土 層 の 塩 基 状 態)	養 分 の 豊 否	(層 換 性 石 灰 含 量)	" " " "	(有 効 態 加 里 酸 含 量)	(酸 腐 性)	障 害 性	(化 学 的 障 害 性)	(物 理 的 障 害 性)	傾 斜	(自 然 傾 斜)	(人 為 傾 斜)	(侵 蝕 度)	(耐 水 蝕 性)	(耐 風 蝕 性)					
	t	d	g	p			w			f			n				i			s			e								
	III	I	I	I	I	2	1	1	I	1	2	(2)	II	1	2	2	III	1	2	3	3	1	I	1	I	1	-	III	2	3	2
簡 略 分 級 式		III ne II f																													

A 土壤区の特徴

この土壤区は嘉多山統に属する。表土の厚さは21cm内外。有効土層は1m以上。表土は礫なく、腐植に頗る富み、中粒質で、火山灰を僅か混入し、粘性は弱い。下層迄腐植層は厚い。保肥力大固定力小で、酸性は弱い。

作土の石灰、苦土含量は多いが、加里、磷酸は欠乏している。

特殊の障害性は存在しないが、土壤統の項で記した如く、風蝕を受け易い事、特殊の微量要素欠乏症の見られる処であるので、注意を要する。

B 植生及び利用状況

耕地として利用され、馬鈴薯、えん麦、ビート、豆類、一部にアスパラガス、牧草も作付し、収量は可成り高い。

C 地力保全上の問題点

前記の如く、現状に於て可成りの収量をあげているが、土壤の粘性は弱く、春季に風蝕を受け易

いので、風蝕防止対策が必要である。

F 分布 北海道網走市嘉多山

記載責任者 野村琥・後藤計二・上坂晶司(北海道立農業試験場)

日付 昭和37年3月31日・昭和45年3月31日

嘉多山—嘉多山2

示性分級式(畑)

土壌生産力可能性等級	有効土層の厚さ	表土の礫含量	耕起の難易	(表土の粘着性)	(表土の乾土の硬さ)	(表土の透水性)	土壌の乾燥性	自保湿度	自然肥沃度	固肥力	養分固定力	(土層の塩基状態)	養分交換性	置換性	苦土含量	加里含量	有効態燐含量	障害	化学的障害	物理的障害	傾斜	自然傾斜	人為傾斜	侵入	耐蝕性	耐風蝕性			
	t	d	g	p		w			f			n					i		s				e						
	II	I	I	I	I	2	1	1	I	1	1	1	II	1	1	2	2	1	I	1	1	I	1	—	—	I	1	1	2
簡略分級式	IIfn																												

A 土壤区の特徴

この土壤区は嘉多山統に属する。本区はカムイヌブリ岳5a層の下部に雌阿寒岳火山灰b層の堆積が認められ多腐植層が70cmにおよぶため区分したものである。表土は70cmで厚く、有効土層も1m以上で深い。表土は中粒質で粘着性弱く耕起、砕土は容易である。透水性は大きく保水力も大きく過干、過湿のおそれがない。保肥力は大きく塩基に飽和されているが固定力強く自然肥沃度は中位である。作土は加里、燐酸がやゝ少ない。地形平坦で風蝕のおそれがある。

B 植生および利用状況

大部分は耕地に利用され、麦類、菜豆、馬鈴薯、甜菜、牧草などが栽培されている。

C 地力保全上の問題点

季節風が強く風蝕に対し防風林の完備を要する。保肥力は大きく石灰、苦土含量も多いが石灰、苦土比からはさらに苦土の補給、さらに加里の施用も必要で、この点から堆肥などの施用はゆるがせにできない。また固定力は大きく燐酸の増施を要する。

D 分布

網走市稲富

記載責任者 後藤計二(北海道立中央農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

嘉多山 - 嘉多山 3

示性分級式 (畑)

土壌生産力可能性等級	有効土層の厚さ	表土の礫含量	耕耘の難易	(表土の粘着性)	(表土の乾さ)	(表土の風乾の硬さ)	土の透水性	(水の乾湿)	(水の潤度)	自然肥沃度	(保肥力)	(固定力)	(土層の塩基状態)	(養分の有無)	(置換性)	(苦土)	(加里)	(有効態)	(酸)	(障害)	(物理的障害)	(化学的障害)	(傾斜)	(自然の傾斜)	(人為的傾斜)	(侵入)	(耐水性)	(耐風性)				
	t	d	g	p		w			f			n							i		s				e							
	III	I	I	I	I	2	1	1	I	1	1	1	III	1	3	3	II	1	3	1	2	1	I	1	I	1	—	—	II	2	1	2
簡略分級式 III f II ne																																

A 土壌区の特徴

この土壌区は嘉多山統に属する。本区は多腐植層の厚さが30～40cmで腐植層が20～30cmで本土壌統中最も薄いため区分した。表土は厚く有効土層も1m以上で深い。表土は中粒質で粘着性弱く耕耘、砕土は容易である。透水性は大きく、保水性も強く過干、過湿のおそれは少ない。保肥力は大きい、固定力強く塩基も未飽和で自然肥沃度は低い。表土は苦土に乏しく、また磷は少ない。物理的障害性はない。地形はほぼ平坦な段丘地で、風蝕のおそれがある。

B 植生および利用状況

大部分耕地に利用され、菜豆、麦類、馬鈴薯、甜菜の他牧草、デントコーンが栽培されている。

C 地力保全上の問題点

季節風が強く風蝕に対し防風林の完備を要する。保肥力は大きい、苦土に乏しく塩基未飽和である。さらに加里も含み補給に留意を要する。さらに固定力強く磷の増施を必要とする。

D 分布 網走市駒場、鱒浦、藻琴

記載責任者 後藤計二 (北海道立中央農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

卵 原 内 統

(i) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20～30cm、腐植含量は19.1%、土性はSiCLである。色は10YR、彩度1、明度1である。礫なく、発達程度弱～中の細粒状構造が多いが、粒状構造を混ざる処もある。ち密度5～13。pH(H₂O)は5.2前後。下層との境界は稍明瞭である。

第2層は厚さ13～19cm、腐植含量は8.6%、土性はSiCLである。色は10YRで、彩度1～2、明度2である。礫なく、発達弱～中程度の細粒状構造の処が多いが、粒状構造(発達程度中～大)を混ざる処もある。細小孔を含む。ち密度は18～20。pH(H₂O)は5.6前後。下層との境界はおおむね漸変する。

第3層は厚さ8～22cm、腐植含量は1.0%、土性はCLである。色は10YRで、彩度3～6、明度4～7である。礫なく、連結状で、僅かに柱状構造の存在する処もある。細小孔を含む。酸化沈積物(斑点状、脈状)を含む。ち密度は20～24。pH(H₂O)は6.1前後。下層との境界は漸変する。

第4層はおおむね58cm以下で、腐植を欠き、土性はCLが主である。色は10YRで、彩度3～4、明度6である。礫なく、連結状で、柱状構造も見られる。細小孔あり。酸化沈積物(膜状、斑点状、脈状)を含む～富む。ち密度20～26。

代表的断面形態

(所在地) 網走市嘉多山 試坑No23

第1層	0～23cm	腐植に頗る富む、黒(10YR1/1)のSiCL、発達弱程度の細粒状構造、礫なく、ち密度5、pH(H ₂ O)5.2前後、調査時の湿り半乾、境界波状稍明瞭
第2層	23～36cm	腐植に富む、黒(10YR2/1)のSiCL、発達弱程度の細粒状構造、細小孔を含む、礫なく、ち密度20 pH(H ₂ O)5.6前後、調査時の湿り半乾、境界波状漸変
第3層	36～58cm	腐植を欠く、灰黄橙(10YR7/4)のCL、連結状、細小孔を含む、酸化沈積物(斑点状、脈状)を含む、ち密度21、pH(H ₂ O)6.1前後、調査時の湿り湿、境界波状漸変)
第4層	58～cm	腐植を欠く、灰黄褐(10YR6/4)のCL、連結状、細小孔あり、酸化沈

積物(膜状、斑点状、脈状)を含む、ち密度20、調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	深さ cm	水分 %	粒 径 組 成 %					現 地 容 積 重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土	土 性					
1	0~23	7.1	2.7	32.0	39.3	25.9	SiCL	60	2.6	11.08	0.79	14
2	23~36	5.6	4.5	33.8	46.1	17.4	SiCL	75	2.6	4.97	0.42	12
3	36~58	4.2	7.6	35.9	43.1	18.9	CL	89	2.7	0.60	0.10	6

層位	腐 植 %	pH		置換酸度 y ₁	置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g		石 灰 飽 和 度 %	磷酸吸収 係 数
		H ₂ O	KCl			CaO	MgO		
1	19.1	52	4.4	1.0	61.2	27.1	48	442	1.469
2	8.6	5.6	4.5	0.6	40.5	17.7	5.1	437	1.583
3	1.0	6.1	4.6	0.6	17.9	7.4	4.0	41.5	773

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として嘉多山統、丸万統などがある。嘉多山統は腐植含量多いが酸化沈積物が認められないこと、丸万統は腐植層が厚いこと、作土はカムイヌプリ岳火山灰5a層が堆積するため土性が粗いことによりそれぞれ区分される。

A-3 母 材 半固結火成岩(凝灰岩)

A-4 堆積様式 洪積世堆積

B 地 形

標高は30m内外で、略平坦な段丘を呈している。

C 気 候

オホーツク海の影響を受け、一般に冷涼である。農期間中の降雨量は少ない。年平均雨量は874mmで、年平均気温は5.9℃である。

D 植生及び利用状況

全域耕地として利用されていて、甜菜、馬鈴薯、菜豆、麦類、牧草、テントコーン等が栽培されている。

E 農業上の留意事項

地形、母材、堆積様式、気候状態等は嘉多山統と略同様であるが、土壌の上から見て嘉多山統より不利な点は、下層が密度で排水の悪い事である。従つて留意事項としては、嘉多山統の項に記載した他に、排水が必要である。

日 付 昭和 45 年 3 月 31 日

卯原内 - 卯原内 2

示性分級式 (畑)

土壌生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の礫含量	耕耘の難易	(表土の風乾土の硬さ)	(表土の粘着性)	土壌の乾性	地透水性	保水性	自然肥沃度	固肥力	土層の塩基状態	養分豊富	置換性	苦土	加里	有効態燐酸含量	(酸性)	障害性	物理的障害	化学的障害	傾斜	自然傾斜	人為傾斜	侵蝕	耐水蝕性	耐風蝕性				
	t	d	g	p			w			f		n					i				s			e							
III	I	I	I	I	1	2	III	2	2	3	I	1	2	1	II	1	1	2	2	2	I	1	1	I	1	-	-	I	1	1	2
簡略分級式					III w II n																										

A 土壤区の特徴

この土壤区は卯原内統に属する。本土壤区は腐植含量が卯原内 1 より多く、かつ 40~60cm と厚いため区分した。さらに能取岬で海砂が表面に混在している。表土は 40~60cm 厚く、有効土層は 1m 以上で深い。作土は中粒質、次いで細粒質であるが粘着性は弱く耕耘、砕土は容易である。透水性はやゝ大きい次層が腐植含量が多く保水性は大きい。またやゝ湿性を呈し過湿のおそれがある。保肥力大きく、固定力はやゝ強いが塩基は飽和され自然肥沃度は高い。作土は加里、燐酸がやゝ少なく酸性を呈する。物理的障害性はない。地形は平坦で侵蝕は認められない。

B 植生および利用状況

公共草地に利用され、最近造成されたところである。

C 地力保全上の問題点

潜在窒素は現在多いが、加里、燐酸が少ない。牧草は特に加里の収奪量が多く、加里の補給には特段の留意を要する。

D 分布 網走市能取岬

記載責任者 後藤計二 (北海道立中央農業試験場)

日 付 昭和 45 年 3 月 31 日

卯原内一卯原内3

示性分級式(畑)

土壤生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の礫含量	耕耘の難易	(表土の粘着性)	(表土の乾土の硬さ)	(表土の風乾土の硬さ)	(透水性)	(保水性)	(自然肥度)	(自然肥力)	(固定力)	(養分の塩基状態)	(置換性石灰含量)	(苦土)	(加里)	(有効態磷酸含量)	(酸度)	(物理的障害)	(化学的障害)	(自然傾斜)	(人為傾斜)	(人為傾斜)	(耐水蝕性)	(耐風蝕性)						
	t	d	g	p			w			f			n				i		s				e								
	III	I	I	I	I	2	2	III	2	1	3	I	2	1	1	II	2	3	2	2	2	I	1	1	I	1	--	I	1	1	2
	簡略分級式 IIIw II n																														

A 土壤区の特徴

この土壤区は卯原内統に属する。本土壤区は卯原内統中最も湿性著しく降雨に際して50～60cmに湧水を見る場合が多い。表土は25～30cmで厚く、有効土層は1m以上で深い。表土は細粒質であるが粘着性は弱く耕耘、碎土は容易である。透水性はやゝ小さく保水性は大きく湿性を呈し過湿のおそれが多い。作土の養肥分は塩基、磷酸共にやゝ少ない。物理的障害性はない。地形はほと平坦で侵蝕は認められない。

B 植生および利用状況

ほと全域耕地に利用され、馬鈴薯、甜菜、菜豆、麦類などが栽培されている。

C 地力保全上の問題点

全域暗渠を施行し、さらに高所よりの滲透水を防ぐための明渠を必要としよう。作土の養肥分が全般に乏しいが、炭カルによる酸性矯正、磷酸、苦土、加里の増施、さらに有機物の施用が必要である。

D 分布 網走市明治、駒場

記載責任者 後藤計二(北海道立中央農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

丸 万 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第一層は厚さ15～20cm、腐植含量10～15%、土性はSLが主である。色は10YRで彩度1～2、明度2～3、発達弱度の細塊状、細粒状構造、ち密度10～21で中。pH(H₂O)6.2前後。調査時の湿り乾。下層との境界判然。旭岳、雌阿寒岳火山灰層の混合する作土。

第2層は厚さ10～20cm、腐植含量10～16%、土性はLiCが主である。色は10YRで彩度1～2、明度1～3、発達中度の細塊状構造、ち密度20前後で中。pH(H₂O)5.9前後。下層との境界漸変。雌阿寒岳火山灰^b層。

第3層は厚さ15～20cm、腐植含量7～10%、土性はSiCLが主である。色は10YRで彩度1～2、明度2～3、発達弱度の細塊状構造、ち密度20前後で中。pH(H₂O)5.9前後。下層との境界判然。

第4層は厚さ20cm前後。腐植含量2%以下、土性はLが主である。色は10YRで彩度4～6、明度5～6。均質状あるいは発達弱度の細塊状構造、ち密度22前後で中。pH(H₂O)6.0前後。下層との境界漸変。

第5層は厚さ40cm以上、腐植含量1%以下、土性はS～SL(触感)である。色は2.5Yで彩度2～4、明度6～7。ち密度26で密。酸化沈積物を含む。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市丸万 試坑¹114 普通畑(えん麦)

第1層	0～20cm	腐植に類する富む黒(10YR2/1)のSL、発達弱度の細粒状、細塊状構造、ち密度21で中。粘着性弱。pH(H ₂ O)6.2。調査時の湿り乾。下層境界平坦明瞭。旭岳、雌阿寒岳、カムイヌプリ岳火山灰層の混合した作土。
第2層	20～35cm	腐植に類する富む黒(10YR1.7/1)のLiC、発達中度の細塊状構造で細孔含む。ち密度20で中。粘着性弱。pH(H ₂ O)5.9。調査時の湿り半乾。下層境界判然。雌阿寒岳火山灰 ^b 層。
第3層	35～55cm	腐植に富む黒褐(10YR2.5/2)のSiCL、発達弱度の細塊状構造で細孔に富む。ち密度20で中。粘着性弱。pH(H ₂ O)5.9。調査時の湿

		り半乾。下層境界渐变。
第4層	55~75cm	腐植を欠く灰黄褐(10YR5/5)のL、均質連結状で細孔を含む。ち密度22で中。粘着性中。酸化沈積物あり。pH(H ₂ O)6.0。
第5層	75cm~	腐植を欠く灰黄褐(2.5YR6/3)のSL(触感)。均質連結状で細孔あり。ち密度26で密。粘着性弱。酸化沈積物を含む。調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分%	粒径組成(%)				土性	現地容積重(g)	真比重	全炭素(%)	全窒素(%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~20	5.2	31.5	33.6	24.9	10.0	S L	6.95	2.4	8.23	0.61
2	20~35	9.5	10.5	24.0	39.9	25.6	LiC	6.20	2.4	8.83	0.85
3	35~55	10.2	6.6	24.1	51.2	18.1	SiCL	6.10	2.6	4.89	0.50
4	55~75	8.3	7.7	38.0	41.2	13.1	L	6.85	2.7	—	—

層位	炭素率	腐植(%)	pH		y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度(%)	燐酸吸収係数	有効態燐酸 mg/100g
			H ₂ O	Kcl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	14	14.16	6.2	5.2	0.5	41.38	21.77	1.36	0.11	53	940	1.43
2	10	15.20	5.9	4.7	1.3	75.61	10.55	0.34	0.11	14	1886	tr
3	10	8.42	5.9	4.7	1.0	45.29	4.76	0.34	0.11	11	1986	—
4	—	—	6.0	5.1	0.5	28.54	16.74	0.41	0.12	59	1740	—

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として嘉多山統、卯原統などがある。嘉多山統は酸化沈積物が認められないこと、卯原内統は下層も細粒質であることによりそれぞれ区分することができる。

A-3 母材 非固結火成岩(凝灰岩質)

A-4 堆積様式 風積(火山灰)/洪積世(火山灰)

B 地形 標高70mの平坦な段丘地

C 気候 年平均気温5.9℃、年降水量850mm、オホーツク海の気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過する。

D 植生および利用状況 往時はアカダモ、ヤチハンノキ、ヒラギシスゲ(ヤチボウズ)が自生していた。現在全域耕地で甜菜、馬鈴薯、麦類、牧草などが栽培されている。

E 農業上の留意事項

暗渠排水が施行されているが、心土は未飽和であり燐酸吸収係数が強い。有機物の施用、酸性矯正、土壌改良資材をとともう深耕が望ましい。

F 分布 北海道網走市丸万

調査ならびに記載責任者 後藤計二、上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

年 月 日 和年45年3月

① 土壤区一覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
丸 万 - 丸 万	Ⅲ w Ⅱ f

② 土壤区別説明

丸 万 - 丸 万

示 性 分 級 式(畑)

土 壤 生 産 力 可 能 性 等 級	表 効 土 層 の 厚 さ	表 土 層 の 深 さ	耕 起 の 容 易 性	(表 土 の 粘 着 性)	(表 土 の 乾 硬 性)	土 地 の 乾 湿 性	(透 水 性)	(保 水 性)	自 然 肥 沃 度	(固 定 力)	(土 層 の 塩 基 状 態)	養 分 の 豊 否	(置 換 性 石 灰 含 量)	(" 苦 土)	(" 加 里)	(有 効 燐 酸 含 量)	障 害 的 障 害 性	(物 理 的 障 害)	(傾 斜 傾 斜)	(傾 斜 傾 斜)	人 為 傾 斜	(侵 蝕 傾 斜)	(耐 水 性)	(耐 風 性)		
Ⅲ	t	d	g	p		w			f		n					i		s				e				
	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	
簡略分級式 Ⅲ w Ⅱ f																										

A 土壤区の特徴

この土壤区は丸万統に属する。表土は35~40cmで厚く、有効土層も1m以上で深い。表土は中粒質で粘着性弱く耕起、砕土は容易である。透水性はやや小さく、保水性は大きく湿性を呈し過湿のおそれが多い。保肥力は大きく固定力はやや大きい。塩基に未飽和で自然肥沃度は中位である。表土は加里に之しい外は他の養分は多い。物理的障害性は存在しない。地形は平坦で湿性を呈するため風侵のおそれはない。

B 植生および利用状況

全域耕地に利用され、菜豆、馬鈴薯、甜菜、デントコーン、牧草などが栽培されている。

C 地力保全上の問題点

全域暗渠排水が施行されているが腐植含量が多く保水性が大きいため土壤水分は依然多い。さらに心土破砕などにより透水性を増大させることが望ましい。漸次深耕して磷肥、石灰、苦土、加里の補給を図ることが必要である。

D 分布 網走市丸万

記述責任者 後藤 計二 (北海道立中央農業試験場)

日付

昭和45年3月31日

チブサ藻琴統

(1) 土壤統の概説

(A) 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15~20cmで腐植含量5~8%、土性はSLが主である。色は10YRで彩度2~3、明度4~5。発達弱度の細粒状構造。ち密度2.2で疎。pH(H₂O)6.0。下層との境界平坦明瞭。雌阿寒岳火山灰1a層。

第2層は厚さ4~5cmで腐植含量4~5%、土性はSLが主である。色は10YRで彩度1~2、明度7~8。発達弱度の細塊状構造。ち密度2.0で中。pH(H₂O)6.1前後。下層との境界平坦明瞭。雌阿寒岳火山灰2a層。本層は第1層と混合し作土となつている場合が多い。

第3層は厚さ10~20cmで腐植含量1%以下、土性はSである。色は10YRで彩度6~8、明度6~8。単粒状でち密度1.0~1.6で中。pH(H₂O)6.0~6.5。下層との境界明瞭。アトサヌプリ岳火山灰5A層で軽石砂である。

第4層は厚さ5~15cmで腐植含量4~7%。土性はL~SLである。色は10YRで彩度2~3、明度2~3。発達弱度の細塊状構造。ち密度1.3で中。酸化沈積物あり~含む。pH(H₂O)6.0前後。下層との境界明瞭。雌阿寒岳火山灰b層。なお本層を欠く場合がある。

第5層は厚さ40cm以上、腐植含量1%以下。土性はSである。色は2.5Yで彩度1~2、明度4~5。単粒状。ち密度1.0~2.0で中。酸化沈積物を含む。本層は水積(河成)である。

代表的断面形態

(所在地) 網走市清浦 試抗No.130 普通畑(えん麦)

第1層	0~20cm	腐植に富む黄褐灰(10YR5/2)のSL、発達弱度の細粒状構造。ち密度2で疎。粘着性弱。調査時の湿り乾。pH(H ₂ O)6.0。下層境界平坦明瞭。雌阿寒岳火山灰1a層で作土。
-----	--------	---

第2層	20~26cm	腐植を含む黄褐灰(10YR4/1)のSL、発達弱度の細塊状構造で細孔に富む。ち密度2.0で中。粘着性弱。pH(H ₂ O)6.1。下層境界明瞭。調査時の湿り乾。雌阿寒岳火山灰2a層。
第3層	26~40cm	2層に分化し、26~30cmは灰黄橙(10YR6/3)のSL(触感)、発達弱度の細塊状構造で細孔含む。ち密度2.0で中。粘着性弱。30~40cmは明黄褐(10YR6/8)のS、単粒状の軽石砂。ち密度1.4で中。下部に酸化沈積物富む。pH(H ₂ O)6.3。調査時の湿り半乾。下層境界平坦明瞭。アトサヌプリ岳火山灰5a層。
第4層	40~50cm	2層に分化し、40~47cmは腐植に富む黒褐(10YR2/2)のL、47~50cmは腐植を含む暗褐(10YR3/3)のL、両層とも発達弱度の細塊状構造で細孔に富む。ち密度1.3で中。粘着性中~弱。酸化沈積物を含む。pH(H ₂ O)6.0。調査時の湿り半乾。下層境界明瞭。雌阿寒岳火山灰b層。
第5層	50~57cm	2層に分化し、50~53cmは灰黒褐(2.5Y3/1)のCL、53~57cmは黄褐灰(2.5Y5/1)のCL、両層とも均質連結状で細孔に富む。小孔あり。ち密度1.6で中。粘着性中。酸化沈積物あり。グライ斑含む。pH(H ₂ O)6.0。調査時の湿り湿。下層境界明瞭。不明火山灰層でウドン粉状を呈す。なお本層は欠く場合が多い。
第6層	57cm~	腐植を欠く黄褐灰(2.5Y4/1)のS。単粒状で細孔に富む。小孔あり。ち密度2.0で中。粘着性なし。酸化沈積物あり。調査時の湿り湿。水積(河成)堆積。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位(cm)	水分(%)	粒径組成(%)				土性	現地容積重(g)	真比重	全炭素(%)	全窒素(%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~20	3.5	38.1	35.0	18.9	8.0	SL	7.90	2.4	3.52	0.43
2	20~30	3.0	24.6	40.9	29.9	4.6	SL	6.60	2.4	2.78	0.48
3	30~40	0.7	91.0	5.9	1.5	1.6	S	8.00	2.6	—	—
4	40~50	6.8	19.5	32.1	33.9	14.5	L	6.20	2.6	2.78	0.39
5	50~57	8.3	14.8	28.0	37.2	20.0	CL	8.00	2.2	2.94	0.25

層位	炭素率	腐植(%)	pH		Y ₁	塩基置換容 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度(%)	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
			H ₂ O	Kcl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	8	6.06	6.0	5.3	0.3	2.672	19.39	0.34	0.13	73	639	6.5
2	6	4.79	6.1	5.3	0.1	2.183	18.71	0.34	0.12	86	—	3.8
3	—	—	6.3	5.5	0.1	5.62	2.55	0.51	0.01	45	916	3.8
4	7	4.79	6.0	5.2	0.5	2.965	10.21	0.68	0.05	34	1480	2.6
5	12	5.05	6.0	4.9	0.8	3.177	9.18	1.02	0.02	29	1158	2.1

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として濤沸東統、北斗統、稻富西統などがある。濤沸東統、北斗統は下層が泥炭であること、稻富西統は作土が火山灰層でなく、堆積様式を異にすることによりそれぞれ区分される。

A-3 母材 非固結火成岩(火山灰、軽石砂、凝灰岩質)

A-4 堆積様式 風積(火山灰・軽石砂)ノ水積(河成)

B 地形 平坦な低地

C 気候 年平均気温 5.9℃、年降水量 850mm、オホーツクの気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過する。春先季節風が強いが低地にあるため影響はやや少ない。

D 植生および利用状況 耕地に利用され、馬鈴薯、甜菜、菜豆、デントコーン、牧草などが栽培されている。

E 農業上の留意事項 耕地の大部分は薄層の火山灰層の累積が耕耘により混合されているが、清浦では累積地が多い。深耕により混層し根圏域の拡大を図るべきである。この場合炭カル、熔磷の施用、堆肥の施用が必要である。また暗渠排水により水位の低下を図るべきで特に実豊、音根内では河川の改修も進めるべきである。

F 分布 北海道網走市清浦、実豊、音根内

調査および記載責任者 後藤計二、上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

年月日 昭和45年3月

(2) 土壌統の細分

(1) 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡 略 分 級 式
チブサ藻琴 - チブサ藻琴	wn ta

(2) 土壌区別説明

チブサ藻琴 - チブサ藻琴

示性分級式(畑)

土壌生産力可能性等数	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の礫含量	耕土の難易	(表土の粘着性)	(表土の風乾土の硬さ)	土の透水性	(保水)	(湿潤)	自然肥力	(固肥)	(土層の塩基状態)	養分塩基量	(置換性石灰含量)	(有効態燐酸含量)	(有効態加里)	障害的障害性	(物理的障害)	災害的障害性	(増冠水の危険度)	(地すべりの危険度)	傾斜の方向	(傾斜)	(人為的)	侵蝕性	(耐風蝕性)	
Ⅲ	t	d	g	p		w			f			n			i	a		s				e					
Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	—	—	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ
簡略分級式 Ⅲ w n Ⅱ t a																											

A 土壤区の特徴

この土壤区はチブサ藻琴統に属する。表土は20cm内外で中庸であるが有効土層は1m以上で深い。表土は中粒質で粘着性は弱く耕起、砕土は容易である。透水性は大きく、保水性はやや大きい湿性を呈し過湿のおそれが多い。保肥力は大きく、固定力は小さく塩基にも飽和され自然肥沃度は高い。作土の養分は苦土、加里に之しく燐酸も少ない。物理的障害性は存在しない。地形は平坦で侵蝕はないが氾濫のおそれが多い。

B 植生および利用状況

耕地に利用され、馬鈴薯、甜菜、菜豆、デントコーン、牧草などが栽培されている。

C 地力保全上の問題点

過湿地で暗渠、明渠など系統的な排水工事が必要であり、実豊、音根内では河川の改修を進めるべきである。上層は火山灰層が累積し下層は性状を異にする薄層の累積であり根の伸長を阻害している。深耕により混層し土層の均一化を図るべきである。この場合炭カル、燐の施用、有機物の施用が同時に進むことが肝要である。

D 分布 網走市清浦、実豊、音根内

記載責任者 後藤 計 二(北海道立中央農業試験場)

日付

昭和45年3月31日

浜小清水統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20cm内外で腐植含量5~7%、土性はSLが主である。色は7.5YRで彩度2、明度3~4。粒状構造で発達程度は中度である。ち密度1.0~1.5で疎、pH(H₂O)4.5~5.0、下層との境界は波状漸変である。

第2層は厚さ15~20cmで腐植含量2~3%、土性はSが主である。色は7.5YRで彩度6、明度5、単粒構造である。ち密度8~10で頗る疎、pH(H₂O)5.4前後。下層との境界は漸変する。

第3層は地表下30~40cm以下で腐植を欠き、土性はSが主である。色は7.5YRで彩度1、明度3の場合が多い。単粒構造、ち密度7~10で頗る疎、pH(H₂O)6.1前後。

代表的断面形態

所在地 常呂郡常呂町字岐阜 試坑No. 佐37

第1層	3~20cm	腐植に富む黒褐(7.5YR3/2)SL、発達中程度の粒状構造、ち密度1.2で疎、pH(H ₂ O)4.7、調査時の湿り半乾、境界漸変。
第2層	20~37cm	腐植を含む褐色(7.5YR5/6)のS、単粒構造、ち密度8で頗る疎、pH(H ₂ O)5.4、調査時の湿り半乾、境界漸変。
第3層	37~cm	腐植を欠く黒褐(7.5YR3/1)のS、単粒構造、ち密度7で頗る疎、pH(H ₂ O)6.1、調査時の湿り半乾。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成%				土性	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~20	8.6	63.8	15.6	15.2	5.4	SL	3.57	0.31	11	6.2
2	20~37	0.9	91.8	0.5	5.4	2.3	S	1.47	0.18	8	2.5
3	37~	1.6	97.8	1.3	0.9	0	S	—	—	—	—

層位	pH		置換性 度 γ_1	塩基置換 容量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽 和度%	磷酸吸 収係数	有効態磷酸 mg/100g
	H ₂ O	KcI			CaO	MgO	K ₂ O			
1	4.7	4.0	9.5	12.1	0.7	0.5	0.2	5.8	330	7.4
2	5.4	4.5	4.8	6.5	0.6	0.5	0.1	9.2	182	29.9
3	6.1	4.9	0.8	2.7	0.6	0.4	0.1	22.2	82	tr

A-2 他の土壌統の関係

本統に隣接または類似する統としては浜卯原内統、浜能取統などがある。浜卯原内統は表土の腐植含量が多いこと、浜能取統は過湿であることによりそれぞれ区分される。

A-3 母材 海砂

A-4 堆積様式 風積(海成)

B 地形

海岸線に分布する波状緩傾斜を有する砂丘。

C 気候

一般に冷涼で、オホーツク海の気圧配置により夏季低温に見まれ、しばしば冷害凶作を受ける。年平均気温 5.6℃、年降水量 800mm 前後。

D 植生及び利用状況

殆んど山林原野になっている。

E 農業上の留意事項

砂丘のため農耕地に利用される可能性は今後とも少く、防風林防霧林の設置場所および放牧地として利用されるのが得策であろう。

F 分布 常呂郡および網走市海岸沿いに分布

調査及び記載責任者 高尾欽弥・後藤計二・上坂晶司
(北海道立中央農業試験場)

日付 昭和43年3月31日

昭和45年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覽

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
浜小清水 - 浜小清水	fn t se

浜小清水 - 浜小清水

示性分級式(畑)

土壌生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の礫含量	耕起の難易	(表土の風乾土の粘性)	(表土の粘着性)	(表土の乾燥)	(透水性)	(保水性)	(湿度)	(自然潤度)	(保肥力)	(固定力)	(土層の塩基状態)	(養分塩基量)	(置換性石灰含量)	(苦土)	(加里)	(有効態)	(微量要素)	(酸害)	(有害物質の有害性)	(物理的障害)	(災害)	(増冠水の危険度)	(地すべりの危険度)	(傾斜)	(自然傾斜)	(人為傾斜)	(侵入)	(耐蝕性)	(耐風蝕性)			
	t	d	g	p			w				f			n						i		a											e		
Ⅳ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	
簡略分級式		Ⅳ(w)		Ⅲ		f		n		Ⅱ		t		s		e																			

A 土壌区の特徴

この土壌区は浜小情統に属する。表土の厚さは20cm内外で中庸、有効土層は1m以上で深い。表土の土性は砂質で粘着性弱く耕起、砕土は容易である。透水性大、保水性やや小であるが、過湿、過干のおそれは少ない。

保肥力中、磷酸固定力小、土層の塩基状態は不良である。表土、下層土とも塩基に欠乏し、磷酸が少い。地形は緩波状を呈し侵蝕のおそれがある。特殊の障害性は存在しない。

B 植生及び利用状況

大部分山林原野になつている。

C 地力保全上の問題点

農耕地に利用する場合は埴質土壌の客入、有機物の施用、塩基の投入が必要となるが、将来とも畑地利用され得る可能性は低く、むしろ防風防霧林の設置場所として利用する方がよい。

D 分布

常呂町および網走市の海岸沿いに分布する砂丘。

記載責任者 高尾欽弥・後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

日付 昭和43年3月31日

昭和45年3月31日

浜 卯 原 内 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20～30cm、腐植含量6～8%、土性はLS～Sである。色は10YRで彩度1～3、明度2～3、発達弱度の細粒状構造、ち密度8～14で疎～中。pH(H₂O)5.5前後。下層との境界判然あるいは明瞭。

第2層は厚さ20～60cm、腐植含量1%以下、土性はSである。色は10YRで彩度2～3、明度7～8。単粒状で細孔に富む。ち密度12前後で中。pH(H₂O)5.5前後。下層との境界明瞭。

第3層は厚さ6～15cm、腐植含量10～11%、土性はSLが主である。色は10YRで彩度1～2、明度1～3。発達弱度の細粒状構造で細孔含む。ち密度17前後で中。pH(H₂O)5.1前後。下層との境界漸変。本層を欠く場合がある。

第4層は厚さ40cm以上、腐植含量1%以下、土性はSである。色は10YRで彩度1～3、明度2～3、単粒状、ち密度16前後で中。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市卯原内、試坑№25 普通畑(デントコーン)

第1層	0～24cm	腐植に富む黒褐(10YR2/1.5)のLS、発達弱度の細粒状構造。ち密度8で疎。pH(H ₂ O)5.5。調査時の湿り半乾。下層との境界平坦明瞭。
第2層	24～42cm	腐植を欠く黄灰橙(10YR7/3)のS、単粒状、ち密度12で中。pH(H ₂ O)5.5。調査時の湿り半乾。下層境界明瞭。
第3層	42～54cm	腐植に頗る富む黒(10YR1.7/1)のSL、発達弱度の細粒状構造で細孔を含む。ち密度17で中。pH(H ₂ O)5.1。調査時の湿り半乾～湿。下層境界判然。
第4層	54～65cm	腐植を欠く黒褐(10YR3/2)のS、単粒状、ち密度16で中。調査時の湿り半乾。下層境界漸変。
第5層	65～cm	腐植を欠く黒(10YR2/1)のS、単粒状、ち密度16で中。調査時の湿り半乾。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (m)	水分 (%)	粒 径 組 成 (%)				土性	現地容積重(g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土					
1	0~2.4	1.6	75.4	10.0	7.0	7.6	LS	118.0	2.7	4.00	0.24
2	2.4~4.2	0.5	91.4	3.8	2.1	2.7	S	141.5	2.9	—	—
3	4.2~5.4	2.4	67.9	12.0	9.4	10.7	SL	95.5	2.7	6.10	1.25

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		Y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	燐酸吸収係数	有効態燐酸 mg/100g
			H ₂ O	Kcl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	1.6	7.0	5.5	4.0	0.5	14.32	6.46	0.27	0.35	4.5	370	16.1
2	—	0.9	5.5	4.8	1.5	2.72	0.44	0.22	0.06	1.6	157	7.8
3	1.3	10.5	5.1	4.5	7.3	18.25	2.97	0.22	0.10	1.6	556	3.8

A-2 他の土壌統との関係

本土壌統に隣接または類似する統として浜小清水統、浜能取統がある。浜小清水統は表土は腐植含量少なく、浜能取統は湿性を呈し酸化沈積物があり腐植含量少ないことにより夫々本統と区別される。

A-3 母 材 海砂

A-4 堆積様式 風積(海成)

B 地 形 緩波状を呈する低地

C 気 候 年平均気温 5.9℃、年降水量 850mm、オホーツクの気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過する。

D 植生および利用状況 大部分耕地に利用され、馬鈴薯、甜菜、菜豆、小豆、デントコーン、麦類などが栽培されている。

F 農業上の留意事項 砂丘地であり旱害のおそれ大きい。しかし腐植含量多く土層の分化も発達していることから風化も進み、保水力もややあつて普通の砂丘地ほど旱ばつをうけることはない。また堆肥の施用など有機物の富化につとめること、塩基の補給を要する。

F 分 布 北海道網走市卯原内、能取

調査および記載責任者 後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

年 月 日

昭和45年3月

(2) 土壌統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
浜卯原内一浜卯原内	Ⅲ(w)fⅡt n

② 土壤区別説明

浜卯原内一浜卯原内

示 性 分 級 式 (畑)

土壤生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の礫含量	耕起土の難易	(表土の粘着性)	(表土の風乾の硬さ)	(土層の乾燥性)	(透水性)	(保水性)	(自然潤肥力)	(固定力)	(土層の塩基状態)	(養分塩基量)	(置換性石灰量)	(苦土量)	(加里量)	(有効態燐含量)	(酸害度)	(物理的障害性)	(化学的障害性)	(傾斜的障害性)	(自然傾斜)	(人為的傾斜)	(侵入的傾斜)	(耐蝕性)	(耐風蝕性)	(耐水蝕性)					
Ⅲ	t	d	g	p		w				f		n						i		s												
	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	(2)	(Ⅲ)	Ⅰ	2	(2)	Ⅲ	2	1	3	Ⅱ	2	3	2	1	2	Ⅰ	1	1	Ⅰ	1	—	—	Ⅰ	1	1	1
簡略分級式		Ⅲ(w)fⅡt n																														

A 土壤区の特徴

この土壤区は浜卯原内統に属する。表土は20cm内外で有効土層は1m以上で深い。表土は粗粒質で粘着性はなく耕起碎土は容易である。透水性は大きく、保水性もやや小さく過干のおそれが多い。保肥力はやや小さく、固定力は小さく塩基は未飽和で自然肥沃度は低い。作土の養分は何れも乏しい。物理的障害性は存在しない。地形平坦で侵蝕は認められない。

B 植生および利用状況

大部分耕地に利用され、馬鈴薯、甜菜、菜豆、小豆、麦類などが栽培されている。

C 地力保全上の問題点

砂丘地で旱害のおそれが多い。しかし腐植含量多く土層は分化していることから風化も進み保水力もややあつて、普通の砂丘地ほど旱ばつをうけることはない。極力マルチの利用などにより蒸散量の軽減を要する。堆肥の施用など有機物の富化につとめること、塩基の補給を要する。

D 分布 網走市卯原内、能取

記載責任者 後藤 計 二 (北海道立中央農業試験場)

日 付 昭和45年3月31日

浜 能 取 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ5～10cm、腐植含量3～6%、土性はLiCである。色は10YRで彩度1、明度4～5、あるいはNで明度4～5。均質連結状あるいは一部細塊状構造。ち密度1.5～2.2で中。酸化沈積物に富む。pH(H₂O)5.8。下層との境界平坦明瞭。

第2層は厚さ20～70cm、腐植含量1%以下、土性はLS～Sである。色は5Y～7.5Yで彩度1～2、明度6～7。単粒状。ち密度1.8～2.5で中。酸化沈積物を含む。pH(H₂O)6.5～6.6。下層との境界明瞭。

第3層は厚さ30cm以上、腐植含量1%以下、土性はSである。色は7.5GYで彩度1、明度5。単粒状。グライ層。湧水面30～70cm。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市卯原内 試坑No.29 放牧地

第1層	0～7cm	腐植に富む灰(N-4.5)のLiC、均質連結状。ち密度1.8で中。粘着性强。酸化沈積物に富む。pH(H ₂ O)5.8。調査時の湿り半乾。境界平坦明瞭。
第2層	7～9cm	腐植を欠く淡黄灰(5Y7/2)のS。単粒状。ち密度1.9で中。酸化沈積物に富む。調査時の湿り半乾。境界明瞭。
第3層	9～15cm	腐植を欠く黄灰(7.5Y6/1)のLS。単粒状および発達弱度の板状構造。ち密度2.4で中。酸化沈積物を含む。調査時の湿り半乾。境界明瞭。
第4層	15～67cm	腐植を欠く淡黄灰(7.5Y7/1)のS。単粒状。ち密度2.0で中。酸化沈積物を含む。調査時の湿り湿。境界明瞭。
第5層	67～cm	腐植を欠く緑灰(7.5GY5/1)のS。未風化小半角礫(軽石)あり。単粒状。調査時の湿り潤。グライ層。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 (%)	粒径組成 (%)				土性	現地容積重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~7	6.4	10.0	23.8	34.8	31.4	LiC	73.5	2.6	31.5	0.37
2	9~15	1.1	55.2	31.6	7.5	5.7	LS	121.5	2.7	—	—
3	15~67	1.0	74.5	18.4	4.4	2.7	S	125.5	2.8	—	—

層位	炭素率 炭素率	腐植 (%)	pH		γ ₁	塩基置換容 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	燐酸吸収係数	有効態燐酸 mg/100g
			H ₂ O	Kcl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	9	5.41	5.8	4.8	0.3	32.47	14.33	13.66	1.71	4.4	79.2	7.3
2	—	—	6.5	5.5	0	6.42	2.80	1.20	0.43	4.4	7.7	11.8
3	—	—	6.6	6.2	0.3	5.18	1.60	2.20	0.49	3.1	7.7	12.0

A-2 他の土壌統との関係

本土壌統に隣接あるいは類似する統として浜小清水統、浜卯原内統がある。浜小清水統、浜卯原内統ともに酸化沈積物がないことにより本統と区別される。

A-3 母材 非固結水成岩(海砂)

A-4 堆積様式 風積(海成)

B 地形 平坦な低湿地

C 気候 年平均気温は 5.9℃、年降水量 850mm。オホーツクの気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過する。

D 植生および利用状況

能取湖の湖口がしばしばとざされるため湿性を呈し、現在サング草の自生する原野で放牧地に利用されている。

E 農業上の留意事項

湖口の閉塞に対しその防除工事の施行の計画がある。通年閉塞がなければ水位は低下し本統もさらに有効な利用が可能である。海水の侵入があるためナトリウムが多いのが特徴であり、工事完了後は除塩対策が必要であろう。

F 分布 北海道網走市能取湖畔

調査および記載責任者 後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

年月日 昭和45年3月

(2) 土壤統の細分

(1) 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
浜能取 - 浜能取	IV w III t i II f a

(2) 土壤区別説明

浜能取 - 浜能取

示性分級式(畑)

土壤生産力可能性等級	表効土の厚さ	有効土の層の深さ	表土の礫含	耕起の難易	(表土の粘着性)	(表土の乾硬さ)	土地の乾燥性	(透水)	(保水)	自然肥沃度	(固定力)	(土層の塩基状態)	(養分)	(置換性)	(苦土)	(加里)	(有効態燐酸含量)	(酸化)	(化学的障害)	(物理的障害)	(災害)	(増冠水の危険度)	(地すべりの危険度)	(傾斜)	(自然傾斜)	(人為傾斜)	(侵入)	(耐風)	(耐水)	(耐蝕)	
IV	t	d	g	p		w		f		n								III	3	1	II	2	1	I	1	—	—	I	1	1	1
簡略分級式		IV w III t i II f a																													

A 土壤区の特徴

この土壤区は浜能取統に属する。表土は5~10cmで薄い。有効土層は1m以上で深い。表土は微粒質で、粘着性は強いがその層厚は薄いこと、下部は砂であり耕起、砕土は容易と考えられる。透水性は大きく保水性も小さいが地下水位高く過湿である。保肥力はやや小さく、固定力は小さく塩基はやや未飽和で自然肥沃度は中位である。作土の養分は多い。塩害の障害性が大きい。平坦で侵蝕はない。

B 植生および利用状況

能取湖の湖口が冬期とざされるため湿性を呈し、現在サング草の自生する原野で放牧地に利用されているに過ぎない。

C 地力保全上の問題点

湖口の閉塞防止工事を要する。そうすれば水位は低下し利用が可能である。なお塩害が予想されるので除塩対策が利用に先立つて考慮しなければならない。

D 分布 網走市能取、卯原内

記載責任者 後藤 計二(北海道立中央農業試験場)
日付 昭和45年3月31日

浜能取東統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ25～30cmで腐植含量8～11%、土性は半風化小円礫(1～5cmの三紀層の泥岩層で、SLの風化土壤僅かに混入。pH(H₂O)6.5。下層との境界判然。

第2層は厚さ70cm以上で腐植含量1%以下、土性は半風化小円礫(1～5cmまれに10cm大も混在)層。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市二見ヶ岡 試坑№47 普通畑(菜豆)

第1層	0～26cm	腐植に富む黒(10YR1.5/1)の半風化小円礫層。SLの風化土壤僅かに混入。pH(H ₂ O)6.5。調査時の湿り半乾。境界判然。
第2層	26cm～	腐植を欠く灰黄褐(10YR5/4)の半風化小円礫層。調査時の湿り半乾。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 (%)	粒 径 組 成 (%)				土性	現地容積重(g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土					
1	0～26	4.4	54.9	18.5	15.6	11.0	SL	8.25	2.4	5.50	0.48

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		Y ₁	塩基置換容 量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽和度(%)	磷酸吸収係数	有効遊離酸 mg/100g
			H ₂ O	Kcl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	1.2	9.46	6.5	5.3	0.3	32.36	18.95	2.47	1.52	59	1.47	2.13

A-2 他の土壤統との関係

本土壌統に隣接または類似する統としては浜小清水統、浜卯原内統がある。浜小清水統、浜卯原内統は土性がSであることにより区別される。

A-3 母 材 半固結水成岩(泥岩)

A-4 堆積様式 風積(海成)

B 地 形 平坦な低地

C 気候 年平均気温 5.9℃、年降水量 850mm。オホーツクの気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過する。

D 植生および利用状況 耕地に利用され、菜豆、麦類、馬鈴薯、などが栽培されている。

E 農業上の留意事項 上、下層共にやや軟弱な三紀層の泥岩円礫層で、透水性は過良で旱害のおそれが多い。マルチなどにより燕散量の軽減を図る必要がある。また有機物の富化、緩効性肥料の利用なども保肥力の小さいことから検討すべきであろう。また粘土客土の効果は期待される。

F 分布 北海道網走市二見ヶ岡

調査および記載責任者 後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

年月日 昭和45年3月

(3) 壤統の細分

① 土壤区一覽

土壤区名	簡略分級式
浜能取東一浜能取東	IV d III g(w) i II f

② 土壤区別説明

浜能取東統一浜能取東区

示性分級式(畑)

土壤生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の礫の量	耕転の難易	(表土の粘性)	(表土の乾硬性)	(表土の風乾性)	土地の湿度	(透水)	(保水)	(自然)	(固定)	(土層の塩基)	養分	(置換性)	(苦土)	(加里)	(微量)	(酸)	障害	(有害物質)	(物理的)	(災害)	(増冠水の危険度)	(地すべりの危険度)	傾斜	(自然)	(傾斜)	(人為)	侵蝕	(耐風)	(耐水)	(耐蝕)			
IV	t	d	g	p		w				f			n						i		a		s													
	I	IV	III	I	1	1	(2)	(III)	1	3	(2)	II	2	1	2	I	1	1	1	1	1	1	III	1	3	I	1	1	I	1	—	—	I	1	1	1
簡略分級式		IV d III g(w) i II f																																		

A 土壤区の特徴

この土壤区は浜能取東統に属する。表土の厚さは20~30cmで深層の有効土層は30cmで甚だ浅い。表土は礫質で耕起、砕土は容易である。透水性は大きく、保水性は小さく過干のおそれが多い。保肥力はやや小さく固定力は小さく塩基にやや未飽和で自然肥沃度は中位である。作土の養分は多い。地形は平坦で侵蝕はない。災害性もない。

B 植生および利用状況

耕地に利用され菜豆、小豆、麦類、馬鈴薯などが主に栽培されている。

C 地力保全上の問題点

上、下層共にやや軟弱な三紀層泥岩の小円礫層で透水性は過大で旱害のおそれは大きい。マルチなどにより蒸散量を軽減し、有機物の富化を図りさらに粘土客土により保水力、保肥力を高める必要がある。

D 分布 網走市二見ヶ岡

記載責任者 後藤 計二(北海道立中央農業試験場)

日付 昭和45年3月31日

呼人北統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ20~30cmで腐植含量4~6%、土性はSL~Lである。色は10YRで彩度2~3明度2~3。発達弱度の細粒状構造。ち密度10~12で中。未風化小、中円礫(軽石、安山岩)に富みpH(H₂O)5.7前後。下層との境界明瞭~判然。

第2層は厚さ50cm以上で腐植含量1%以下。未風化小、中円礫層。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市呼人 試坑No.89 普通畑(デントコーン)

第1層	0~22cm	腐植を含む黒褐(10YR3/2)のL、発達弱~中度の細粒状構造。ち密度10~12で中。粘着性弱。未風化小、中円礫(安山岩、軽石)に富む。調査時の湿り乾。境界平坦明瞭。
第2層	22cm~	未風化小、中円礫(安山岩、軽石)の砂礫層。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒径組成(%)				土性	現地容積重(ρ)	真比重	全炭素(%)	全窒素(%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~22	3.8	28.5	29.3	28.1	14.1	L	82.0	2.6	2.75	0.31

層位	炭素率	腐植(%)	pH		y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度(%)	磷吸収係数	有効態磷 mg/100g
			H ₂ O	Kc l			CaO	MgO	K ₂ O			
1	9	4.73	5.7	4.9	0.3	28.49	16.25	0.37	0.72	57	7.09	13.6

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として浜能取東統がある。浜能取東統は泥岩の円礫層で能取湖周辺に分布し、母材、表面からの礫層であることにより本統と区分される。

A-3 母材 相固結火成岩(凝灰岩質)

A-4 堆積様式 水積(河成堆積)

B 地形 微波状を呈する低地。

C 気候 年平均気温 5.9℃、年降水量 850mm、オホーツクの気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過する。

D 植生および利用状況 耕地に利用され、牧草、デントコーン、麦類、菜豆が栽培されている。

E 農上の留意事項 微波状を呈し凸地は砂礫層が浅く、凹地は砂土が下層にあつて砂礫層はやや深い。透水性は過良で保水性弱く過旱のおそれが多い。堆肥など有機物の施用につとめることが必要である。

F 分布 北海道網走市呼人

調査および記載責任者 後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

年月日

昭和45年3月

(2) 土壌統の細分

(1) 土壌区一覧

土壌区名	簡略分級式
呼人北-呼人北	d(w) i t g f

(2) 土壌区別説明

呼人北統 - 呼人北区

示 性 分 級 式 (畑)

土壌生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の含難量	耕起の容易性	(表土の粘性)	(表土の乾土の便さ)	土壌の乾湿性	(保水性)	(湿度)	自然肥沃度	(保肥力)	(固定力)	(土層の塩基状態)	養分の豊富さ	(置換石灰含量)	(苦土)	(加里)	(微燐)	(有效燐素)	(障害の有無)	(物理的障害性)	災害性	(増冠水の危険度)	(地すべりの危険度)	傾斜	(自然傾斜)	(人為傾斜)	侵入	(耐蝕性)	(耐風蝕性)	
t	d	g	p							f				n					i		a				s						
Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	(2)	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	—	—	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ
簡略分級式 Ⅲ d(w) i Ⅱ t g f																															

A 土壌区の特徴

この土壌区は呼人北統に属する。表土は 20~30cm で厚いが有効土層は 25~30cm で薄い。表土は中粒質で粘着性が弱く耕起、碎土は容易である。透水性は大きく保水性はやや小さく過干のおそれがある。保肥力はやや小さく固定力は小さく塩基はやや未飽和で自然肥沃度は中位である。作土の養分は苦土が少ない。物理的障害性があるが災害性はない。地形平坦で侵蝕はない。

B 植生および利用状況

耕地に利用され、牧草、デントコーン、麦類、菜豆などが栽培されている。

C 地力保全上の問題点

微波状を呈し、凸地は砂礫層が浅く、凹地は砂土が下層にあつて砂礫層が深い。透水性は大きく過干のおそれが多い。堆肥など有機物の施用につとめること、さらには粘土客土の効果が大きい。また苦土、加里などの塩基の補給をゆるがせにできない。

D 分布 網走市呼人

記載責任者 後藤計二(北海道立中央農業試験場)

日 付 昭和45年3月31日

卯原内北

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は20～30cmで腐植含量2～5%、土性はCLが主である。色は10YRで彩度2～3、明度4。発達弱度の粒状構造で細孔を含む。ち密度5～10で疎。pH(H₂O)6.6前後。下層との境界判然～明瞭。

第2層は40～50cmで腐植含量1%以下、土性はLiC～CLである。色は10YRで彩度3～4、明度5～6。発達中度の細塊状構造で細孔含む～あり。ち密度20～24で中。酸化沈積物あり。pH(H₂O)6.0～6.3。下層との境界明瞭。

第3層は40cm以上で腐植含量2%以下、土性はLiCが主である。色はN～2.5GYで彩度1、明度5～6。均質連結状あるいは柱状構造。ち密度20～22で中。酸化沈積物あり。グライ層。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市卯原内 試坑No.28 普通畑(菜豆)

第1層	0～24cm	腐植を含む灰黄褐(10YR4/3)のCL、発達弱度の細粒状構造。ち密度5で疎。pH(H ₂ O)6.6。調査時の湿り半乾。境界明瞭。
第2層	24～49cm	腐植を欠く灰黄褐(10YR5/4)のLiC。発達中度の細塊状構造。細孔を含む。割目やや鮮明、ち密度23で中。粘着性中。pH(H ₂ O)6.1。酸化沈積物あり、グライ斑あり。調査時の湿り湿。境界平坦明瞭。
第3層	49～66cm	腐植を欠く灰黄橙(10YR6/3)のLiC。発達中度の柱状構造で細塊状構造に一部割れる。細孔を含む。小孔あり、割れ目やや鮮明。ち密度22で中。粘着性強。pH(H ₂ O)6.3。酸化沈積物を含む。調査時の湿り湿。境界平坦明瞭。
第4層	66～74cm	腐植に富む灰黒(N-3.5)のLiC(触感)。発達弱度の細塊状構造。細孔、小孔あり。ち密度20で中。粘着性極強。酸化沈積物含む。グライ層。調査時の湿り湿。境界判然。
第5層	74cm～	腐植を欠く灰(N-4.5)のLiC(触感)。均質連結状で細孔あり。粘着性強。グライ層。調査時の湿り潤。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分%	粒径組成 (%)				土性	現地容積重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~24	4.6	7.3	39.5	28.8	2.44	CL	81.5	2.7	20.8	0.25
2	24~49	5.1	8.7	33.5	29.7	2.81	LiC	95.5	2.8	—	—
3	49~66	5.2	8.1	38.7	26.7	2.65	LiC	96.0	2.8	—	—

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		γ ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	8	3.6	6.6	6.1	0.1	31.06	28.20	2.21	0.87	9.1	8.45	28.5
2	—	—	6.1	5.6	0.1	29.45	22.53	4.58	0.42	7.7	8.45	7.8
3	—	—	6.3	4.9	0.4	28.80	22.34	3.85	0.23	7.8	8.45	4.6

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として稻富西統、能取西統、嘉多山東統などがある。稻富西統は土層中火山灰層を夾在しかつ下層が中粒質であること、能取西統はグライ層が70cm以下であり、湿性の程度は少ないこと、嘉多山東統は下層が砂質(砂丘)であることによりそれぞれ区分される。

A-3 母材 非固結火成岩(凝灰岩質)

A-4 堆積様式 水積(河成)

B 地形 平坦低地

C 気候 年平均気温 5.9℃、年降水量 850mm、オホーツクの気圧配置により夏季しばしば冷涼に経過する。

D 植生および利用状況 耕地によく利用され、菜豆、馬鈴薯、油菜、ハツカノ他、デントコーン牧草などが栽培されている。

E 農業上の留意事項 過湿となつているところが多い。現在暗渠はかなり施行されているが、いまだ未施行のところもあり、排水することが必要である。

F 分布 北海道網走市卯原内

調査および記載責任者 後藤計二、上坂昌司(北海道立中央農業試験場)

年月日

昭和45年3月

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覽

土壤区名	簡略分級式
卯原内北-卯原内北	III w II p

② 土壤区別説明

卯原内北統 - 卯原内北区

示性分級式(畑)

土壌生産力可能性等級	表土の有効土層の厚さ	表土の転層の含深さ	耕起の難易	表土の風乾の粘性	表土の粘着性	土壌の乾燥性	透水性	保水性	自然潤肥度	自保肥力	固定塩基状態	養分塩基状態	置換性	苦土量	加酸量	微酸量	物理的障害の有無	災害の危険性	増冠水の危険度	傾斜の傾方	自然の傾斜	人為的傾斜	侵蝕	耐蝕性	耐風蝕性		
III	I	I	I	II	2	2	2	2	III	3	2	3	I	1	2	1	I	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
簡略分級式 III w II P																											

A 土壤区の特徴

この土壤区は卯原内北統に属する。表土は20~30cmで一般に厚く有効土層も1m以上で深い。表土は細粒質で粘着性中庸であるが、耕起、砕土はやや困難である。透水性は小さく、保水性は中庸、水位が高く過湿のおそれが多い。作土の養分分は多い。物理的障害性はなく、災害性もない。地形平坦で侵蝕もない。

B 植生および利用状況

耕地によく利用され、菜豆、馬鈴薯、甜菜、ハツカ、デントコーン、牧草など各種作物が栽培されている。

C 地力保全上の問題点

過湿となつているところが多い。現在暗渠はかなり施行されているが未施行地もあり、排水を完備することが必要である。

D 分布 網走市

記載責任者 後藤 計二(北海道立中央農業試験場)

日付

昭和45年3月31日

稲 富 西 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15～30cmで腐植含量4～6%、土性はL～CLである。色は10YRで彩度2～3、明度2～3。発達弱度の粒状および細塊状構造。ち密度1.5～2.2で中。pH(H₂O)5.5～6.1。下層との境界平坦明瞭。

第2層は厚さ10cm前後で、3～6cmは色が10YRで彩度3～4、明度7～8で土性はSL～L。雌阿寒岳火山灰a層。7～12cmは色は10YRで彩度1～3、明度6～8で土性はS(軽石)、カムイヌプリ5a層。下層との境界明瞭。なお本層を欠く場合もある。

第3層は厚さ10～30cmで腐植含量1%以下。土性はL～CLである。色は10YRで彩度1～2、明度5～6。均質連結状あるいは発達弱度の細塊状構造。ち密度2.0～2.6で中～密。酸化沈積物を含む。pH(H₂O)5.0～5.5。下層との境界明瞭あるいは判然。

第4層は厚さ40cm以上で腐植含量1%以下。土性はL～CLである。色は2.5Yあるいは2.5GYで彩度1～4、明度6～7。均質連結状でち密度2.7～2.8で密。酸化沈積物あり。グライ層。pH(H₂O)5.5～6.0。湧水するところ多い。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市稲富 試坑No.103 普通畑:牧草

第1層	0～24cm	腐植に富む黒褐(10YR2/2.5)のCL、発達弱度の細粒状構造で細孔を含む。ち密度1.8で中。粘着性弱。pH(H ₂ O)6.0。調査時の湿り半乾。境界明瞭。水積(河成)
第2層	24～34cm	24～27cmは腐植を欠く灰黄橙(10YR7/3)のSL(触感)。均質連結状あるいは板状構造。雌阿寒岳火山灰a層。27～30cmは黒褐(10YR3/1)の腐植に富むS(触感)。単粒状。30～34cmは腐植を欠く灰黄橙(10YR6/3)のS(触感)。単粒状。27～34cmはカムイヌプリ5a層。調査時の湿り半乾。境界明瞭。
第3層	34～50cm	腐植を欠く黄褐灰(10YR5/1)のSiL、均質連結状で細孔、小孔を含む。ち密度2.6で密。粘着性中～弱。酸化沈積物を含む。pH(H ₂ O)5.3。調査時の湿り半乾。境界判然。
第4層	50cm～	腐植を欠く灰黄褐(2.5Y6.5/4)のCL、均質連結状で細孔あり。ち密

度 2.7 で密。粘着性弱。酸化沈積物を含む。pH (H₂O) 5.8。
調査時の湿り湿。尚 70 cm 以下黄灰 (2.5 G Y 6 / 1) を呈す。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	粒 径 組 成 (%)				土性	現地容 積重(g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土					
1	0~24	4.5	42.4	20.2	21.7	15.7	CL	71.5	2.5	3.45	0.42
2	34~50	6.2	2.7	14.0	54.1	29.2	SiL	41.0	2.3	—	—
3	50~	4.6	10.6	40.9	31.3	17.2	CL	67.5	2.6	—	—

層位	炭素率	腐植 (%)	P H		γ ₁	塩基要換 容 量 me/100g	置換性塩基me/100g			石灰飽 和度(%)	磷酸吸 収係数	有効態磷 酸 mg/100g
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	8	5.94	6.0	5.1	0.8	25.42	10.46	0.25	0.56	41	9.62	9.8
2	—	—	5.3	4.2	3.8	25.41	6.80	2.04	0.13	26	3.15	3.6
3	—	—	5.8	4.2	1.4	21.50	10.28	0.68	0.07	48	3.78	3.3

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として卯原内北統、能取西統、嘉多山東統などがある。能取西統、卯原内西統は下層も細粒質、微粒質であることにより、嘉多山東統は下層が砂層であることによりそれぞれ区分される。

A-3 母 材 非固結火成岩(凝灰岩・軽石)

A-4 堆積様式 水積(河成)

B 地 形 平坦低地

C 気 候 年平均気候 5.9℃、年降水量 850mm、オホーツクの気圧配置によりしばしば夏期冷涼に経過する。

D 植生および利用状況 耕地に利用され菜豆、馬鈴薯、甜菜、ハツカ、飼料作物などが栽培されている。

E 農業上の留意事項

狭少な低地に分布し、周辺に泥炭が存在し地下水位が高い。下層は粗粒質で透水性は大きいところであり、先づ河川改修を実施し、次いで暗渠を施行することが効果は大きい。

F 分 布 北海道網走市稲富、鱒浦

調査及び記載責任者 後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

能 取 西 統

(1) 土壤の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15~25cmで腐植含量2~3%、一部5%前後のところあり。土性はLiCが主である。色は10YRで彩度3~4、明度4~6。発達弱度の粒状構造でち密度10~15で疎。pH(H₂O)5.0~5.5。粘着性は強。下層との境界平坦明瞭。

第2層は厚さ40~60cmで腐植含量2%以下、土性はLiCが主である。色は5Y~7.5Yで彩度1~2、明度6。発達弱度の細塊状構造。ち密度12~17で疎~中。pH(H₂O)4.9~5.2。粘着性は強。酸化沈積物に富む。下層との境界判然~平坦明瞭。

第3層は厚さ30cm以上。腐植含量1%以下。土性はLiCが主である。色は2.5GY~7.5GYで彩度1、明度3~6。発達弱度の塊状構造。ち密度12~17で疎~中。酸化沈積物が皮膜状にあり。グライ層。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市能取 試坑No.20 普通畑:牧草

第1層	0~19cm	腐植を含む灰黄褐(10YR5/3.5)のLiC、発達弱度の細粒状構造、ち密度13で疎。粘着性強。pH(H ₂ O)5.0。調査時の湿り半乾。下層境界平坦明瞭。
第2層	19~32cm	腐植を欠く黄灰(5Y6/1)のLiC、発達弱度の細塊状構造で細孔を含む。ち密度は16で疎。粘着性強。pH(H ₂ O)5.2。糸根状の酸化沈積物に富む。pH(H ₂ O)5.2。調査時の湿り半乾。下層境界漸変。
第3層	32~41cm	腐植を欠く黄灰(5Y6/1)のLiC、発達弱度の細塊状構造で細孔、小孔あり。ち密度17で疎。粘着性中。pH(H ₂ O)4.9。糸根状の酸化沈積物を含む。pH(H ₂ O)4.9。調査時の湿り湿。下層境界漸変。
第4層	41~76cm	腐植を欠く黄灰(5Y6/1)のLiC、発達弱度の細塊状構造で細孔あり。ち密度12で疎。粘着性強。pH(H ₂ O)5.1。糸根状の酸化沈積物を含む。pH(H ₂ O)5.1。調査時の湿り湿。下層境界明瞭。
第5層	76cm~	腐植を欠く暗緑灰(7.5GY3.5/1)のLiC(触感)、発達弱度の塊状構造で細孔あり。ち密度12で疎。粘着性強。皮膜状の酸化沈積物あり。調査時の湿り湿。グライ層。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 (%)	粒 径 組 成 (%)				土性	現地容積重(%)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土					
1	0~19	4.5	3.2	30.9	32.6	33.3	LiC	94.0	2.7	1.48	0.23
2	19~32	4.8	2.7	28.3	37.4	31.6	LiC	91.0	2.8	—	—
3	32~41	4.3	7.8	34.7	30.0	27.5	LiC	94.5	2.8	—	—
4	41~76	4.6	7.2	26.2	37.2	29.4	LiC	89.0	2.7	—	—

層位	炭素率	腐植 (%)	pH			塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷吸収係数	有効態燐酸 mg/100g
			H ₂ O	Kcl	γ ₁		CaO	MgO	K ₂ O			
1	6	2.55	5.0	4.5	12.0	24.59	12.82	2.93	0.37	52	528	63
2	—	—	5.2	3.8	13.3	25.56	11.90	3.11	0.22	47	680	52
3	—	—	4.9	3.8	13.3	21.80	12.89	2.38	0.18	59	651	3.8
4	—	—	5.1	3.8	10.8	22.65	11.35	2.56	0.18	50	592	2.6

A-2 他の土壌統との関係

本土壤に類似する統として稻富西統、卯原内北統がある。稻富西統は細粒質で火山灰層を夾在していること、卯原内北統は水位が高くグライ層が40~50cmに位置していることによりそれぞれ区分される。

A-3 母 材 非固結水成岩、非固結火成岩(砂岩・凝灰岩)

A-4 堆積様式 水積(河成)

B 地 形 平坦低地

C 気 候 年平均気温 5.9℃、年降水量 850mm。オホーツクの気圧配置によりしばしば夏期冷涼に経過する。

D 植生および利用状況 畑に利用され、菜豆、馬鈴薯、甜菜、飼料作物が栽培されている。

E 農業上の留意事項

狭長な沖積低地にあるため一般に地下水位高く湿性を呈するところが多い。一部暗渠の施行地もあるが、全面的な施行が必要である。酸性矯正を要す。

F 分 布 北海道網走市能取

調査及び記載責任者 後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

年 月 日

昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覽

土壤区名	簡略分級式
能取西一能取西-2	ll p w f

(2) 土壤区別説明

能取西統一能取西-2区

示性分級式(畑)

土壤	表土	有効土	表土	耕土	(表土)	(表土)	(表土)	(土)	(透)	(保)	(自)	(養)	(置)	(有)	(微)	(障)	(災)	(増)	(地)	(傾)	(自)	(傾)	(人)	(侵)	(耐)	(耐)	
生産力	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
可能性	厚	深	含	難	性	性	硬	性	性	度	力	力	状	豊	含	電	素	度	性	無	性	性	性	性	性	性	
等級	t	d	g	p			w			f		n				a	a			s				e			
	ll																										
	[[[ll	3	2	2	ll	1	2	2	ll	1	1	2	l	1	1	1	1	2	[1	1	[1	1
簡略分級式	ll p w f																										

A 土壤区の特徴

この土壤区は能取西統に属する。表土は30cm内外で深くかつ腐植に富み能取西1より腐植含量多く区分すべきであるが面積狭少なため区として区分した。有効土層は1m以上で深い。表土は細粒質～微粒質で粘着性は中庸で耕起碎土はやや困難である。透水性はやや大きく、保水性は中庸で湿潤度も中位でグライ層なく過湿のおそれは少ない。保肥力は大きく、固定力は小さく塩基もやや飽和され自然肥沃度は中位である。作土の養肥分も多い。障害性、災害性はない。地形は平坦で侵蝕はない。

B 植生および利用状況

全域耕地に利用され、菜豆、馬鈴薯、牧草、甜菜、デントコーンが主に栽培されている。

C 地力保全上の問題点

堆肥の施用につとめ、地力の維持増進を図るべきである。

D 分布 網走市能取

記載責任者 後藤 計 二(北海道立中央農業試験場)

日 付 昭和45年3月31日

嘉多山東統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15～20cmで腐植含量10～15%、土性はL～SLである。色は10YR～Nで彩度1、明度1～2。発達弱度の細粒状構造。ち密度15～18で疎。pH(H₂O)5.0～5.8。下層との境界判然。

第2層は厚さ10～20cmで腐植含量20～30%、土性はL～CLで泥炭を含む。色はNで明度1～3、発達弱度の細粒状構造。ち密度15～19で疎。pH(H₂O)5.0～5.7。下層との境界判然。黒泥層の場合が多い。

第3層は厚さ5～30cmで腐植含量2%以下、土性はS(触感)で未風化小円礫(軽石、泥岩など)に富む。色は10YRで彩度2～3、明度5～6。単粒状。ち密度14で疎。下層との境界判然。

第4層は厚さ50cm以上で腐植含量1%以下、土性はS(触感)で未風化小円礫(軽石、泥岩など)に富む。色は2.5Yで彩度1～2、明度6～7。単粒状。酸化沈積物(不詳明)あり。湧水1m。グライ層。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市嘉多山 試坑No.38 普通畑:トウモロコシ

第1層	0～15cm	腐植に頗る富む黒(N-1.5/)のL、発達弱度の細粒状構造。ち密度18で疎。粘着性弱。pH(H ₂ O)5.8。調査時の湿り半乾。境界判然。
第2層	15～32cm	黒(N-1.5/)の黒泥層。発達弱度の細粒状構造。細孔に富む。ち密度19で中。粘着性弱。pH(H ₂ O)5.6。調査時の湿り湿。境界判然。
第3層	32～55cm	腐植を欠く灰黄褐(10YR5/3)のS(触感)、未風化小円礫(軽石、泥岩)に富む。単粒状。ち密度14で疎。調査時の湿り半乾。境界漸変。
第4層	55～95cm	腐植を欠く淡黄灰(2.5Y7/2)のS(触感)、未風化小円礫(軽石、泥岩)に富む。単粒状。調査時の湿り湿。境界判然。
第5層	95cm～	腐植を欠く淡黄灰(2.5Y7/2)のS(触感)、未風化小円礫(軽石、泥岩)に富む。単粒状。酸化沈積物が僅かにあり。調査時の湿り潤。湧水1m。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 (%)	粒径組成 (%)				土性	現地容積重(ρ)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~15	5.6	38.6	25.5	24.0	11.9	L	72.5	2.4	7.37	0.57
2	15~32	9.3	19.4	24.8	35.9	19.9	CL	50.5	2.2	13.00	0.84

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		γ ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
			H ₂ O	Kcl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	13	12.68	5.8	5.0	0.3	44.32	24.54	1.83	0.28	55	916	11.2
2	15	22.38	5.6	4.9	0.5	83.48	30.77	5.86	0.11	37	2255	5.2

A-2 他の土壌統との関係

本土壌と類似する統としては浜能取統、浜能取西統、卯原内西統、二見ヶ岡統などがある。浜能取統は腐植が少ないこと、浜能取西統、卯原内西統、二見ヶ岡統は下層が泥炭で砂質が出現しないことによりそれぞれ区分される。

A-3 母材 非固結火成岩、非固結水成岩(凝灰岩・砂岩)

A-4 堆積様式 水積(河成)

B 地形 平坦低地

C 気候 年平均気温 5.9℃、年降水量 850mm、オホーツクの気圧配置によりしばしば夏期冷涼に経過する。

D 植生および利用状況 耕地は菜豆、馬鈴薯、飼料作物などが栽培されている。未耕地はヤナギ、ヨシが自生している。

E 農業上の留意事項 網走湖畔にあつて湖の水面の低下がなければ水位の低下は困難である。

F 分布 北海道網走市嘉多山

調査及び記載責任者 後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

年月日

昭和45年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土壌区名	簡略分級式
嘉多山東-嘉多山東	III w II f n

② 土壌区別説明

嘉多山東統 - 嘉多山東区

示性分級式(畑)

土壌生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の層の含	耕土のの難	(表土の粘着性)	(表土の風乾の硬さ)	(土の透水性)	(水の潤性)	(自然肥力)	(自保肥力)	(固定力)	(養分塩基状態)	(置換性)	(苦土里酸)	(微効量要)	(障害)	(物理的障害)	(災害性)	(地冠すべりの危険度)	(傾斜)	(自傾)	(人為的)	(侵蝕)	(耐蝕性)
t	d	g	p		w				f		n					i	a	s				e		
Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ
簡略分級式 Ⅱ w Ⅱ f n																								

A 土壤区の特徴

この土壤区は嘉多山東統に属する。表土の厚さは30cm内外で深く有効土層も1m以上で深い。表土は中粒質で粘着性弱く、耕起、碎土は容易である。透水性は大きく保水性も中庸であるが湿潤であり過湿のおそれが多い。保肥力は大きく固定力中で塩基やや未飽和で自然肥沃度は中位である。作土は加里が乏しく酸性を呈す。障害性、災害性はない。地形平坦で侵蝕はない。

B 植生および利用状況

耕地は菜豆、馬鈴薯その他牧草、デントコーンなどが栽培されている。未墾地はヤナギ、ヨシが自生している。

C 地力保全上の問題点

網走湖畔にあつて湖の水面低下がなければ水位の低下は困難である。腐植の含量多く軽しようであるので粘土客土は効果が期待できる。

D 分布 網走市嘉多山

記載責任者 後藤 計 二(北海道立中央農業試験場)

日 付

昭和45年3月31日

浜能取西統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15~20cmで腐植含量20~30%、土性はLiCが主である。泥炭の分解した黒泥層で僅かに沖積土、火山灰が混合する。色は10YRで彩度1~2、明度1~2。発達弱度の粒状構造。ち密度1.2~1.4で疎。pH(H₂O)4.9前後。下層との境界平坦明瞭。

第2層は厚さ5~9cmで、2~3cmは泥炭に富むSL(触感)である。色は2.5Yで彩度2~4、明度6~7。発達弱度の細塊状あるいは板状構造。酸化沈積物あり。3~5cmは黒泥層あるいは泥炭に富むLiC(触感)。色は7.5YRで彩度1~2、明度1~2。本層は第1層に耕耘により混合し欠く場合がある。下層との境界明瞭。

第3層は厚さ20~40cmでヨシからなる低位泥炭。色は7.5YR~10YRで彩度2~3、明度2~3。分解不良。pH(H₂O)4.0前後。下層との境界明瞭。

第4層は厚さ50cmで腐植含量1%以下、土性はSである。色は10~7.5YRで彩度1~2、明度2~3。単粒状でち密度1.6~1.8で疎。酸化沈積物あり。湧水すること多い。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市能取 試坑No.27 普通畑: 燕麦

第1層	0~18cm	黒褐(10YR2/2)の黒泥層。発達弱度の細粒状構造で細孔に富む。ち密度1.5で疎。粘着性弱。pH(H ₂ O)4.9。調査時の湿り乾。境界平坦明瞭。
第2層	18~21cm	泥炭に富む淡黄灰(2.5Y7/2)のSL(触感)。発達弱度の細塊状構造。ち密度1.5で疎。粘着性弱。調査時の湿り乾。酸化沈積物不鮮明ながらあり。境界平坦明瞭。雌阿寒岳1a層。
第3層	21~25cm	泥炭に富む黒(7.5YR2/1)のLiC(触感)。発達弱度の細塊状構造。調査時の湿り半乾。境界明瞭。
第4層	25~45cm	黒褐(7.5YR2.5/3)のヨシ。分解不良。ち密度9で頗る疎。pH(H ₂ O)4.0。調査時の湿り潤。境界平坦明瞭。
第5層	45~53cm	腐植に頗る富む黒(10YR1.5/1)のS。単粒状。ち密度1.6で疎。pH(H ₂ O)4.4。調査時の湿り潤。境界明瞭。
第6層	53cm~	腐植を欠く黒褐(7.5YR2/2)のS。単粒状。ち密度1.8で疎。酸化沈

積物不鮮明ながらあり。調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分	粒 径 組 成 (%)				土性	現地容積重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土					
1	0~25	6.5	14.2	27.7	32.0	26.1	LiC	48.5	2.1	15.52	0.93
2	25~45	13.2	1.3	24.2	44.4	30.1	LiC	30.0	1.5	—	—
3	45~53	10.3	27.8	13.3	31.8	27.1	LiC	46.0	2.0	—	—

層位	炭素率	腐 植 (%)	pH		γ^1	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	燐酸吸収係数	有効態燐酸 me/100g
			H ₂ O	Kcl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	1.7	2.669	4.9	4.1	7.5	47.60	9.23	0.44	0.42	1.9	3.15	13.0
2	—	—	4.0	3.0	5.3	119.41	13.19	0.55	0.22	1.1	2.30	4.6
3	—	—	4.4	3.6	21.0	90.77	13.19	1.92	0.07	1.5	8.98	3.8

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として北斗統、卯原内中央統、梅浦東統、二見ヶ岡統などがある。何れも下層泥炭であることによりそれぞれ区分される。

A-3 母 材 黒泥/非固結火成岩/ヨシ/非固結水成岩

A-4 堆積様式 集積/風積(火山性)/集積/風積(非火山性)

B 地 形 平坦な低地

C 気 候

オホーツクの気圧配置によりしばしば夏則冷涼に経過することが多い。また春先は季節風が強い。年平均気温 5.9℃、降水量は 965mm で少ない。

D 植生および利用状況 耕地は牧草が多く、その他燕麦、デントコーン、菜豆、馬鈴薯が栽培されている。またヨシ、ハンノキの未墾地も多い。

E 農業上の留意事項 全域明渠、暗渠の排水完備が必要である。また作土は軽鬆であり粘土客土が望ましい。酸性が強く酸性矯正を要す。

F 分 布 北海道網走市能取

調査及び記載責任者 後藤計二・上坂昌司(北海道立中央農業試験場)

年 月 日

昭和45年3月31日

(2) 土壌統の細分

(1) 土壌区一覽

土 壌 区 名	簡 略 分 級 式
浜能取西一浜能取西	Ⅲ w f n Ⅱ t

(2) 土壌区別説明

浜能取西統一浜能取西区

示 性 分 級 式(畑)

土 壤 生 産 力 可 能 性 等 級	表 土 層 厚 さ	有 効 土 層 深 さ	耕 土 の 容 易 性	耕 土 の 粘 着 性	(表土の風乾土の硬さ)	(表土の風乾土の硬さ)	土 地 の 乾 湿 性	(透水性)	(保水性)	自 然 肥 沃 度	(保肥力)	(固 定 力)	(土 層 の 塩 基 状 態)	養 分 の 含 量	(置換性石灰含量)	(苦土)	(加里)	(有効養分)	微 酸 性	障 害 性	有 害 物 質 の 有 無	災 害 的 障 害 の 危 険 度	増 冠 水 の 危 険 度	傾 斜 の 危 険 度	自 然 傾 斜	傾 斜 方 向	侵 蝕 性	耐 風 蝕 性	
Ⅲ	t	d	g	p			w			f			n						i	a	s				e				
Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	3	2	1	Ⅲ	2	1	3	Ⅲ	1	1	3	Ⅲ	1	3	2	1	1	3	Ⅰ	1	1	Ⅰ	1	1	2
簡略分級式		Ⅲ w f n Ⅱ t																											

A 土壌区の特徴

この土壌区は浜能取西統に属する。表土の厚さは20cm内外で中庸、有効土層は1m以上で深い。表土は黒泥層で汎蓋土の混入が多く、粘着性は中で耕起、砕土は容易である。透水性は中庸、保水力は大きいが地下水位が高く過湿のおそれが多く一部は甚だしい。保肥力は大きく、固定力は小さいが塩基は未飽和で自然肥沃度は低い。作土は苦土、加里が少なく酸性を呈する。障害性、災害性はない。地形は平坦で侵蝕はない。

B 植生および利用状況

耕地は主として牧草が多く、その他燕麦、デントコーン、大豆、馬鈴薯が栽培されている。未墾地も多く、ヨシ、ハンノキが自生している。

C 地力保全上の問題点

個々に暗渠が実施されているが、全域系統的に明渠、暗渠の排水工事を完備することが必要である。また粘土客土、酸性矯正を要す。

D 分布 網走市能取

記載責任者 後藤 計 二(北海道立中央農業試験場)

日 付 昭和45年3月31日

北 斗 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ13～20cmで腐植含量は38%前後の黒泥層。色は10YR～7.5YRで彩度1～2、明度1～2である。発達弱度の細粒状、細塊状構造。ち密度1.4前後で疎。pH(H₂O)3.7～4.5。下層との境界平坦明瞭。火山灰、沖積土を僅かに混合。

第2層は厚さ10cm前後で腐植含量は42%内外の黒泥層。又はヨシからなる泥炭層の場合もある。色は10YRで彩度1～2、明度1～2。ち密度1.0前後で疎。pH(H₂O)4.0前後。下層との境界平坦明瞭。

第3層は厚さ5～10cmで腐植を欠き土性はSである。色は10YRで彩度1～2、明度6～8。単粒状で泥炭あり、ち密度9～10で頗る疎。pH(H₂O)4.6前後。下層との境界明瞭。カムイヌプリ5a層。

第4層は厚さ80cm以上、ヨシからなる低位泥炭。色は10YR～7.5YRで彩度1～4、明度2～3。ち密度7～8で頗る疎。pH(H₂O)3.9～4.5。分解は不良のものが多い。

代表的断面形態

(所在地) 斜里郡小清水町北斗 試坑No.Lp

第1層	0～13cm	黒色(7.5YR2/1)の黒泥層。発達弱度の細塊状構造。ち密度1.4で疎。pH(H ₂ O)3.7。調査時の湿り半乾。境界平坦明瞭。下層に薄層の火山灰(雌阿寒火山灰1a層)が存在。
第2層	13～23cm	黒色(7.5YR2/1)の黒泥層。ち密度1.0で疎。PH(H ₂ O)4.0。調査時の湿り湿。境界平坦明瞭。
第3層	23～33cm	腐植を欠くにぶい黄橙色(10YR7/2)のS。単粒状。ち密度9で頗る疎。pH(H ₂ O)4.6。調査時の湿り湿。境界明瞭。
第4層	33～83cm	33～53cmは黒色(10YR2/1)、53～83cmは黒色(7.5YR2/1)でそれぞれヨシの低位泥炭。分解不良。ち密度7で頗る疎。調査時の湿り潤。境界明瞭。
第5層	83cm～	暗褐色(7.5YR3/4)のヨシからなる低位泥炭。分解不良。ち密度7で頗る疎。調査時の湿り潤。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分	粒径組成 (%)				土性	現地容積重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~13	9.5	11.7	27.9	27.7	32.7	LiC	106.8	2.0	21.92	0.17
2	13~23	11.1	—	—	—	—	黒泥	98.8	1.9	24.36	1.97
3	23~33	0.7	59.1	23.3	17.4	0.2	SL	93.8	2.5	—	—
4	33~53	14.4	—	—	—	—	泥炭	92.8	1.9	32.42	2.15
5	53~83	15.6	—	—	—	—	泥炭	86.8	1.6	45.87	2.67

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
			H ₂ O	LCL			CaO	MgO	K ₂ O			
1	—	37.8	3.7	3.6	19.0	70.9	4.7	0.6	0.4	7	335	0.4
2	12	42.0	4.0	3.7	22.3	63.1	1.7	0.6	0.2	3	1116	0.2
3	—	—	4.6	4.3	3.8	4.5	0.2	0.2	0	44	140	4.2
4	15	55.9	3.9	3.8	22.5	79.6	2.2	0.7	0	3	915	0.1
5	17	79.1	4.1	3.9	7.8	81.1	5.1	0.7	0.1	6	1400	0

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として浜能取西統、卯原内中央統、二見ヶ岡統などがある。浜能取統は下層に砂層が出現することにより、卯原内中央統は表面に沖積土が堆積しており、瀧沸東統は土層中に火山軽石砂を夾在することにより、二見ヶ岡統は表面より泥炭の堆積することによりそれぞれ区分される。

A-3 母材 ヨシ

A-4 堆積様式 集積(低位泥炭)

B 地形 平坦な低地

C 気候

オホーツクの気圧配置によりしばしば夏期冷涼に経過することが多い。また春先は季節風が強い。年平均気温 5.9℃、降水量は 965mm で少ない。

D 植生および利用状況 殆んどが地下水位の高い低湿地で未利用となつている。一部耕地に利用され、主として牧草、デントコーンが栽培されており、土地改良が進んでいない。

E 農業上の留意事項 先づ河川改修、明渠、暗渠など系統的な排水改良が必要である。次いで客土および酸性矯正が進められなければならない。

F 分布 北海道網走市浦士別、オンネナイ、丸万、藻琴、呼人

昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
北斗 - 北斗	Ⅲ w f n Ⅱ t a

② 土壤区別説明

北斗統 - 北斗区

示性分級式(畑)

土壤生産力可能性等級	表土の厚さ	有効土層の深さ	表土の含水量	耕土の難易	(表土の粘性)	(表土の風乾土の硬さ)	土の乾燥性	(透水性)	(保水性)	(自然肥度)	(自保肥力)	(固肥力)	(土層の塩基状態)	(養分含量)	(置換性)	(苦土)	(加里)	(有効態)	(微酸)	(障害)	(物理的障害)	(災害)	(増冠水の危険度)	(地すりの危険度)	(傾斜)	(自然傾斜)	(人為傾斜)	(侵入)	(耐蝕性)	(耐風蝕性)	
t	d	g	p			w		f			n								i		a		s							e	
Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	(2)	Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	—	—	Ⅰ	Ⅰ	Ⅱ
簡略分級式		Ⅲ w f n		Ⅱ t a																											

A 土壤区の特徴

この土壤区は北斗統に属する。表土の厚さは15~20cmで中庸、有効土層は1m以上で深い。火山灰、氾濫土の混入する黒泥層で火山砂を介し泥炭層へ移行する。保水性は大きく、透水性は中庸、過湿のおそれが甚しい。自然肥沃度、養分共に少ない。強酸性を呈する。地形は平坦で増冠水をこらむる危険性が大きい。

B 植生および利用状況

大部分は未墾地でヨシ、ハンノキの自生する原野でヤチ坊主が生成されている。耕地やや水位の低いところを利用しており、主に牧草、デントコーンが栽培されている。

C 地力保全上の問題点

先づ河川改修、明渠、暗渠の系統的な排水工事を必要とする。また極力客土が望ましく、草地の場合は酸性改良、磷酸資材の投入により造成は可能である。草地の維持あるいは耕地に利用する場合は極力客土を実施することが必要である。

D 分布 網走市浦士別、オンネナイ、丸万、藻琴、稲里、呼入

記載責任者 後藤計二(北海道立中央農業試験場)
日付 付 昭和45年3月31日

卯原内中央統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ10～20cmで腐植含量6～15%、土性はLiCが主である。色は10YR～2.5Yで彩度1～2、明度2～3。発達弱度の細粒状、細塊状構造。ち密度は10～18で疎。粘着性中～弱。酸化沈積物を含む場合が多い。pH(H₂O)5.0～6.0、下層との境界平坦明瞭。雌阿寒岳火山灰1a、2a層カムイヌプリ5a層を混合する。また下層の泥炭を混入する場合も多い。

第2層は厚さ25～40cmでヨシからなる低位泥炭。色は10YR～7.5YRで彩度2～4、明度2～3。分解不良。ち密度7～12で頗る疎～疎。pH(H₂O)4.0～5.5。汎濫土(LiC触感)の混入が一般に多い。下層との境界明瞭～判然。

第3層は厚さ50cm以上でヨシの低位泥炭。色は10YR～7.5YRで彩度3～4、明度4～6。分解甚だ不良。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市卯原内 試坑№30 牧草畑

第1層	0～15cm	腐植に富む灰黒(2.5Y3/1)のLiC。発達弱度の細粒状構造。ち密度18で疎～中。粘着性弱。不鮮明な酸化沈積物あり、pH(H ₂ O)5.9。調査時の湿り半乾。雌阿寒岳火山灰1a、2a層を混合。下層との境界明瞭。
第2層	15～25cm	15～18cmは腐植に頗る富む黒(10YR1.7/1)のLiC(触感)。発達弱度の板状構造。酸化沈積物あり。泥炭あり。調査時の湿り半乾。 18～21cmは黄褐灰(10YR4/1)のS(触感)。単粒状。酸化沈積物を含む。調査時の湿り半乾。カムイヌプリ5a層。21～25cmは腐植に頗る富む黒(10YR1/1)のLiC。発達弱度の板状構造。調査時の湿り半乾。3層の混合したpH(H ₂ O)5.4。
第3層	25～46cm	暗褐(7.5YR3/4)のヨシからなる低位泥炭。分解不良。ち密度12で疎。粘土を含む。pH(H ₂ O)4.1。調査時の湿り潤。境界明瞭。
第4層	46～63cm	黒褐(10YR2/2)のヨシからなる低位泥炭。分解不良。ち密度9で頗る疎。粘土に富む。調査時の湿り潤。境界明瞭。
第5層	63cm～	灰黄褐(10YR4/3)のヨシからなる低位泥炭。分解甚だ不良。ち密

度 9 で頗る疎。調査時の湿り潤。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分	粒 径 組 成 (%)				土性	現地容積重(g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土					
1	0~15	5.9	4.5	11.4	44.9	39.2	LiC	72.0	2.6	4.09	0.42
2	15~25	5.3	23.3	17.8	26.4	32.5	LiC	59.5	2.4	4.85	0.47
3	25~46	11.8	0.2	16.3	24.2	59.5	ヨシ (HC)	46.5	1.9	39.68	1.25

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		y ₁	塩基置換容 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	10	7.03	5.9	4.9	3.1	41.99	20.33	10.99	0.40	48	104.6	11.5
2	10	8.35	5.4	4.4	0.3	40.76	10.26	9.89	0.13	25	190.9	7.8
3	21	68.25	4.1	3.6	19.4	75.24	14.29	8.14	0.20	19	62.2	3.1

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として浜能取西統、北斗統、濤沸東統、二見ヶ岡統などがある。浜能取西統は下層が砂質であり、北斗統は土層中に火山軽石砂が夾在することにより、濤沸東統は表土が黒泥層で次いで泥炭が堆積しており、二見ヶ岡統は表面より泥炭層となつてゐるためそれだけ区分される。

A-3 母 材 非固結火成岩 (凝灰岩・軽石) / ヨシ

A-4 堆積様式 水積 (河成堆積) / 集積 (低位泥炭)

B 地 形 平坦な低地

C 気 候

オホーツクの気圧配置によりしばしば夏期冷涼に経過することが多い。また春先は季節風が強い。年平均気温 5.9℃、降水量は 965mm で少ない。

D 植生および利用状況 原野として残されているところが多い。ヨシ、スゲが自生し、ハンノキの群落も多い。またヤチ坊主が生成されている。耕地は牧草、デントコーン、菜豆、ばれいしよなどが栽培されている。

E 農業上の留意事項

本地域は原始河川のままであり、河川の改修、明渠、暗渠の系統的な排水工事が必要である。さらに酸性矯正を要する。

F 分 布 北海道網走市卯原内

調査及び記載責任者 後藤計二・上坂晶司 (北海道立中央農業試験場)

呼 人 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15～20cmで腐植含量9～12%、土性はSL～Lである。色は10YRで彩度1～3、明度1～3。発達弱度の細粒状構造。ち密度20～26で中～密。pH(H₂O)5.5～6.2。下層との境界は明瞭～判然。

第2層は厚さ10～15cmで腐植含量4%前後、土性はLが主である。色は10YRで彩度2～3、明度2～6。発達中度の細塊状構造で細孔あり～含む。0.5～0.8cmの小円礫(安山岩)あり～含む。ち密度20～24で中。pH(H₂O)6.1前後。下層との境界漸変。

第3層は厚さ20～30cm、腐植含量1～2%、土性はSL～Lである。色は10YRで彩度2～3。明度5～6。発達弱度の細塊状構造。0.5～1.0cmの小円礫(安山岩)あり～含む。ち密度20～24で中。pH(H₂O)6.3前後。下層との境界漸変。

第4層は厚さ50cm以上、腐植含量1%以下、土性はSL～Lが主である。色は10YRで彩度6、明度5～7。発達弱度の細塊状あるいは均質連結状。ち密度20～26で中～密。pH(H₂O)6.4前後。尚土層中に稀に5～10cm大の未風化小～中円礫(安山岩)あり。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市呼人 試坑№87 普通畑 果樹(リンゴ)

第1層	0～16cm	腐植に頗る富む黒褐(10YR 3/1)のL。発達弱度の細粒状構造。ち密度26で密。粘着性弱。pH(H ₂ O)6.1。調査時の湿り半乾。境界判然。
第2層	16～32cm	腐植を含む黄褐灰(10YR 4/2)のL。発達中度の細塊状構造で細孔あり。割れ目不鮮明。未風化小円礫(安山岩)あり。ち密度24で中。粘着性弱。pH(H ₂ O)6.1。調査時の湿り乾。境界漸変。
第3層	32～50cm	腐植を欠く灰黄褐(10YR 5/3)のL。発達弱度の細塊状構造で細孔にとむ。割れ目やや鮮明。未風化小円礫(安山岩)あり。ち密度23で中。粘着性中。pH(H ₂ O)6.3。調査時の湿り乾。境界漸変。
第4層	50～68cm	腐植を欠く明黄褐(10YR 7/6)のL。発達弱度の細塊状構造で細孔にとむ。割れ目やや鮮明。ち密度23で中。粘着性中。pH(H ₂ O)6.4。調査時の湿り半乾。境界漸変。

第5層	68cm～	腐植を欠く黄褐(10YR5.5/6)のSL。均質連結状で細孔あり。ち密度20で中。調査時の湿り半乾。
-----	-------	--

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分 (%)	粒 径 組 成 (%)				土性	現地容積重(%)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土					
1	0～16	4.3	27.0	29.3	29.0	14.7	L	74.0	2.4	6.08	0.57
2	16～32	3.9	26.2	32.2	28.1	13.5	L	85.5	2.6	2.50	0.23
3	32～50	3.6	32.6	29.0	28.8	9.6	L	89.0	2.7	—	—
4	50～68	3.7	28.9	33.5	29.2	8.4	L	89.5	2.7	—	—

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	11	10.46	6.1	5.1	0.5	35.82	22.28	2.29	0.13	62	792	9.0
2	11	4.30	6.1	5.1	0.3	23.57	12.75	0.75	0.25	54	923	2.6
3	—	—	6.3	5.0	0.3	16.84	8.50	0.25	0.37	50	737	7.8
4	—	—	6.4	5.1	0.3	16.06	8.00	0.25	0.39	50	650	2.6

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として美岬統がある。美岬統は腐植含量多くかつ厚いことにより区分される。

A-3 母 材 非固結火成岩(凝灰岩、安山岩)

A-4 堆積様式 崩積

B 地 形 傾斜4～8°の傾斜地

C 気 候

オホーツクの気圧配置によりしばしば夏期冷涼に経過することが多い。また春先は季節風が強い。年平均気温5.9℃、降水量は965mmで少ない。

D 植生および利用状況 急傾斜地を除き大部分が耕地に利用されている。主として界樹園(リンゴ)が栽培され、他に燕麦、甜菜、菜豆、麦類が栽培されている。

E 農業上の留意事項 果樹園は草生栽培で侵蝕のおそれはないが、透水性は中～小で流去水が多く耕地は侵蝕に留意を要する。心土破碎、心土耕により下層土の膨軟化、透水性の増大を図る必要がある。

F 分 布 北海道網走市呼入

調査及び記載責任者 後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

年 月 日

昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覽

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
呼 人-呼 人	ll t p f n s e

(2) 土壤區別説明

呼 人 統 - 呼 人 区

示 性 分 級 式 (畑)

土 壤 生 産 力 の 可 能 性 等 級	表 土 層 の 厚 さ	有 効 土 層 の 深 さ	表 土 の 粘 着 性	耕 起 の 難 易	(表 土 の 粘 着 性)	(表 土 の 乾 硬 性)	(表 土 の 乾 硬 性)	土 地 の 乾 湿 性	(透 水 性)	(保 水 性)	自 然 肥 沃 度	(固 定 力)	(固 定 力)	(土 質 の 塩 基 状 態)	養 分 の 豊 否	(置 換 性)	(苦 土)	(加 里)	(有 効 燐 酸 量)	(微 酸 性)	障 害 性	(有 害 物 質 の 有 無)	(災 害 的 障 害)	(地 冠 水 の 危 険 性)	(傾 斜 の 危 険 性)	(自 然 傾 斜)	(人 為 傾 斜)	(侵 蝕 性)	(耐 風 蝕 性)							
ll	t	d	g	p		w		f					n							i		a		s			e									
ll	ll	ll	ll	ll	1	2	2	1	2	2	1	ll	1	2	1	ll	1	1	3	2	1	1	ll	1	1	ll	1	1	ll	2	w	-	ll	2	2	1
簡略分級式		ll t p f n s e																																		

A 土壤区の特徴

この土壤区は呼人統に属する。表土は20cm内外で中庸、有効土層は1m以上で深い。表土は中粒質で粘着性はやや強く耕起、碎土はやや困難である。透水性はやや小さく、保水性中庸で過干、過湿のおそれは少ない。保肥力は大きく固定力は中、塩基はやや飽和されており自然肥沃度は中位である。作土は加里、燐酸は少ない。障害性、災害性はない。5°前後の傾斜地で浸蝕が認められる。

B 植生および利用状況

急傾斜地を除き大部分が耕地に利用されている。主として果樹園(リンゴ)で、他に麦類、菜豆、甜菜などが栽培されている。

C 地力保全上の問題点

透水性は中程度で傾斜地であるため表面の流去水が多く浸蝕に留意を要する。2層以下やや堅密であり、心土破碎、心土耕により下層の膨軟化を図る必要がある。果樹の更新に際しては植穴を掘り石灰、苦土の改良資材を施用することが必要である。

D 分布 網走市呼人

記載責任者 後 藤 計 二(北海道立中央農業試験場)

日 付

昭和45年3月31日

美 岬 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は15～25cmで腐植含量15～18%、土性はLiCが主である。色は10YRで彩度1、明度1～2。発達弱度の細粒状構造。ち密度10～15で疎。pH(H₂O)6.0～6.2。下層との境界判然。

第2層は厚さ10～25cmで腐植含量10～15%、土性はLiCが主である。色は10YRで彩度1、明度1～2。発達弱～中度の細塊状構造。ち密度20～24で中。pH(H₂O)6.2前後。下層との境界明瞭～判然。

第3層は厚さ50cm以上、腐植含量1%以下、土性はCLが主である。色は5Yで彩度1、明度5～7。半風化小角礫(三紀層砂岩、泥岩)を含む。均質連結状あるいは柱状構造で酸化沈積を含む～あり。pH(H₂O)6.4前後。

代表的断面形態

(所在地) 北海道網走市美岬 試坑No.53 普通畑:小豆

第1層	0～23cm	腐植に頗る富む黒(10YR 1.7/1)のLiC、発達弱度の細粒状構造ち密度12で疎。粘着性弱。pH(H ₂ O)6.0。調査時の湿り半乾。境界判然。
第2層	23～36cm	腐植に頗る富む黒(10YR 1.7/1)のLiC、発達弱度～中度の細塊状構造で細孔あり。割れ目やや鮮明、ち密度20で中。粘着性中。pH(H ₂ O)6.2。調査時の湿り湿。境界明瞭。
第3層	36～48cm	腐植に頗る富む黒(10YR 2/1)のHC、発達弱度の柱状構造で細孔あり、割れ目やや鮮明、ち密度21で中。粘着性強。不鮮明な酸化沈積物あり、pH(H ₂ O)6.2。調査時の湿り湿。境界明瞭。
第4層	48cm～	腐植を欠く黄褐灰(5Y 6/1)のCL、均質連結状で細孔あり。ち密度24で中。酸化沈積物を含み、割れ目に粘土被膜あり。pH(H ₂ O)6.4。調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分	粒径組成 (%)				土性	現地容積重 (g)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗砂	細砂	シルト	粘土					
1	0~23	6.8	9.5	27.0	35.0	28.5	LiC	69.5	2.3	10.04	0.84
2	23~36	7.6	9.5	29.4	31.0	30.1	LiC	66.5	2.3	8.57	0.80
3	36~48	7.6	4.3	17.0	32.6	46.1	HC	92.0	2.6	—	—
4	48~	6.0	15.1	24.6	39.6	20.7	CL	98.5	2.8	—	—

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効態燐酸 mg/100g
			H ₂ O	KCl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	12	17.27	6.0	5.3	0.4	60.44	40.66	8.11	0.91	67	1,115	9.0
2	11	14.74	6.2	5.4	0.3	48.36	33.66	3.33	0.65	70	562	7.3
3	—	—	6.2	5.4	0.3	44.82	31.25	4.25	0.50	70	1,139	3.8
4	—	—	6.4	5.2	0.3	34.54	21.11	3.33	0.31	61	998	tr

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として呼人統、明治統などがある。呼人統は腐植層が薄いことにより、明治統は堆積様式を異にしかつ腐植含量も少ないことによりそれぞれ区分される。

A-3 母材 非固結火成岩、水成岩（凝灰岩、砂岩、泥岩）

A-4 堆積様式 2~3°の緩傾斜地

B 地形 崩積

C 気候

オホーツクの気圧配置によりしばしば夏期冷涼に経過することが多い。また春先は季節風が強い。年平均気温 5.9℃、降水量は 965mm で少ない。

D 植生および利用状況 大部分が耕地に利用され、菜豆、小豆、麦類、馬鈴薯、甜菜が栽培されている。未墾地は海岸保安林でシコロ、ヤナギ、ハンノキ等が自生し、下草はササが多い。

E 礫上の留意事項 緩傾斜地のため高所よりの滲透水が多く局部的には湿性の強いところがある。暗渠により滲透水の排除を要する。現在周辺が保安林であり、微気象が良く小豆が栽培されているが、保安林の維持に万全が望ましい。

F 分布 北海道網走市美岬、明治

調査及び記載責任者 後藤計二、上坂晶司（北海道立中央農業試験場）

年月日

昭和45年3月31日

濤 沸 東 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ10～15cmで、氾濫土、雌阿寒岳火山灰1a、2a層の混合する黒泥層。色は7.5 YR～10 YRで彩度1、明度1～3。発達弱度の板状、細粒状構造。ち密度10～20で疎～中。pH(H₂O) 5.0～5.5。下層との境界平坦明瞭。

第2層は厚さ20～25cmで泥炭土。色は7.5 YRで彩度1～2、明度2～3。分解はやや良好～不良。ち密度10～15で疎。pH(H₂O) 4.5～5.0。下層との境界平坦明瞭。

第3層は厚さ5～8cm、腐植含量1%以下、土性はSである。色は10 YRで彩度4～6、明度4～6。単粒状構造。ち密度10～15で疎。酸化沈積を含む場合が多い。下層との境界明瞭。カムイヌプリ火山灰5a層。下層との境界明瞭。

第4層は厚さ50cm以上、ヨシを主材とする低位泥炭で、分解は不良である。色は10 YR～2.5 Yで彩度1～2、明度1～3。氾濫土が混入する。ち密度3～8で頗る疎。湧水することが多く地下水位40～100cm。

代表的断面形態

(所在地) 北海道斜里郡小清水町浜小清水 試坑No. L p-1

第1層	0～11cm	黒褐(7.5 YR 3/1)の黒泥層。雌阿寒岳火山灰1a、2a層(SL)を混合。発達弱度の細粒状構造。ち密度10で疎。pH(H ₂ O) 5.1。調査時の湿り潤。境界平坦明瞭。
第2層	11～19cm	黒褐(7.5 YR 2/2)の泥炭土。ヨシを主材とし分解やや良。ち密度15で疎。pH(H ₂ O) 4.6。調査時の湿り潤。境界平坦明瞭。
第3層	19～34cm	黒褐(7.5 YR 3/3)の泥炭土。ヨシを主材とし分解不良。ち密度10で疎。調査時の湿り潤。境界明瞭。
第4層	34～42cm	腐植を欠くオリーブ褐(10 YR 4/6)のS。単粒状。ち密度13で、疎。調査時の湿り潤。境界明瞭。カムイヌプリ火山灰5a層。
第5層	42cm～	黒褐(10 Y. R 3/2)の泥炭土。ヨシを主材とし分解不良。ち密度8で疎。調査時の湿り潤。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 (cm)	水分	粒 径 組 成 (%)				土性	現地容積重(%)	真比重	全炭素 (%)	全窒素 (%)
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土					
1	0~11	4.4	26.6	36.1	23.6	13.7	L	47.5	2.3	44.89	1.91
2	11~19	15.3	12.3	15.9	24.0	47.8	HC	33.5	2.0	19.90	1.30

層位	炭素率	腐植 (%)	pH		y ₁	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g			石灰飽和度 (%)	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
			H ₂ O	Kcl			CaO	MgO	K ₂ O			
1	24	77.4	5.1	4.1	4.0	38.4	7.5	0.4	0.2	2.0	8.07	0.9
2	15	34.4	4.6	3.7	4.3	38.3	14.1	4.7	0.1	1.6	10.20	0.9

A-2 他の土壌統との関係

本土壌に類似する統として北斗統、卯原内中央統、二見ヶ岡統などがある。北斗統は黒泥層が厚く沖積土、火山灰の混入が多いことにより、卯原内中央統は表土が沖積土であることにより、二見ヶ岡統は表面から泥炭であることによりそれ区分される。

A-3 母 材 非固結火成岩・黒泥/ヨシ

A-4 堆積様式 集積・風積(火山性)/集積(低位泥炭)

B 地 形 平坦な低地

C 気 候

オホーツクの気圧配置によりしばしば夏期冷涼に経過することが多い。また春先は季節風が強い。年平均気温 5.9℃、降水量は 965mm で少ない。

D 植生および利用状況 大部分が原野でヨシ、ビロードスゲおよびハンノキが自生する。一部耕地が見られるが牧草地となっており、原野は放牧にも利用されている。

E 農業上の留意事項 河川改修、明渠、暗渠など排水工事の完備を要する。酸性が強く炭カルにより矯正を要する。さらに客土も効果が大きい。

F 分 布 北海道網走市浦士別、オンネナイ、丸万、藻琴、稲富

調査及び記載責任者 後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

昭和45年3月31日

二見ヶ岡統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ16～22cm、腐植含量は20.2～25.4%、土性はSL～CLである。色は2.5Y～10Yで、彩度0～1、明度1～3である。礫は殆んどないが、本層は泥炭に火山灰、氾濫土を混じり、泥炭の分解が進んで生成した層と考えられる。

発達弱程度の細粒状構造の処が多いが、これに粒状構造を混じた処もある。ち密度5～16、pH(H₂O)は5.6前後。下層との境界はおおむね漸変する。

第2層は厚さ17～54cm、腐植含量は31.0～81.2%、ヨシを構成植物とし、これに火山灰を混じた泥炭である。

色は2.5Y～5Yで、彩度0～1、明度1～2である。礫なく、ち密度7～16。pH(H₂O)は4.1～4.7。下層との境界は稍明瞭である。

第3層はおおむね65cm以下で、沖積層土壤になつている処と、泥炭から成る処がある。沖積層土壤は腐植を欠き、土性はSが主である。色は2.5Y～10Yで、彩度1～2、明度5～6である。礫なく、単位状で、ち密度10～18。酸化沈積物(脈状)を含み一部存在する。

大部分は泥炭で、ヨシを主構成植物とし、これにハンノキを混じた低位泥炭である。

代表的断面形態

(所在地) 網走市二見ヶ岡 試坑4610

第1層	0～19cm	腐植土、暗黄灰(10Y3/1)のSC、発達弱程度の細粒状構造、礫なく、ち密度7、pH(H ₂ O)5.6前後、調査時の湿めり半乾、境界不規則漸変。泥炭にとむ。
第2層	19～65cm	泥炭、黒(5Y1/1)、ヨシを構成植物とし、若干の火山灰を混じている。ち密度13、pH(H ₂ O)4.7前後、調査時の湿めり多湿、境界波状稍明瞭
第3層	65cm～	沖積土は腐植を欠き、黄灰(10Y6/1)で、土性はSで、単粒状、酸化沈積物(脈状)を含む、ち密度11、調査時の湿めり多湿、泥炭は黒褐(2.5Y3/4)で、ヨシを主構成植物とし、これにハンノキを混ざる、調査時の湿めり多湿、湧水50cm

代表的断面の分析成績

層位	深 さ cm	水分	粒 径 組 成 (%)				土性	現 地 容 積 重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %
			粗 砂	細 砂	シルト	粘 土					
1	0~19	5.5	13.3	47.5	0.8	38.4	SC	50	2.3	11.73	0.80
2	19~65	5.4	—	—	—	—	—	18	1.8	—	—
3	65cm~	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

層位	炭素率	腐 植 %	pH		置換酸度 Y ₁	置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g		石 炭 飽和度 %	磷酸吸 収係数
			H ₂ O	Kcl			CaO	MgO		
1	15	20.2	5.6	5.0	0.7	41.5	21.8	1.6	52.6	1.321
2	—	—	4.7	4.0	5.0	41.2	9.2	2.3	22.3	1.697
3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

A-2 他の土壌との関係

本土壌に類似する統として北斗統、卯原内中央統、瀧沸東統などがある。北斗統、卯原内中央統は表層は河成堆積物の混入が多いかあるいは堆積物であり、瀧沸東統は表面が黒泥層からなることにより区別される。

A-3 母 材 ヨシ

A-4 堆積様式 集積（低位泥炭）。

B 地 形

標高は5m内外で、平地である。

C 気 候

オホーツク海の影響を受け、一般に冷涼である。農期間中の降雨量は少ない。年平均雨量は874mmで、年平均気温は5.9℃である。（網走測候所）

D 植生及び利用状況

可成り耕地として利用されているが、排水の極めて不良なりヤウシ湖附近は附帯地（森林）になっている。

E 農業上の留意事項

本流はヨシを構成植物とする泥炭で、排水が悪く、下層の構成植物の分解は進んでいない。表土には火山灰を混じ、可成り分解が進み、生産力の上昇している処も見られる。従つて本統においては、一般の泥炭の改良法に準じ、排水、客土、堆肥施用、施肥の合理化により生産力の上昇を図る事が大切である。

F 分布 北海道網走市

調査及び記載責任者 野村 琥・後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

日付 昭和37年3月31日

日付 昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

(1)

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式
二見ヶ岡-二見ヶ岡	Ⅲ w n i Ⅱ t f

(2) 土壤区説明

二見ヶ岡統一二見ヶ岡区

示 性 分 級 式

土 壤 生 産 力 可 能 性 等 級	表 土 層 厚 さ	有 効 土 層 深 さ	表 土 層 含 量	耕 転 土 層 粘 着 性	(表 土 風 乾 土 硬 さ)	(表 土 風 乾 土 硬 さ)	(透 透 水 性)	(保 水 性)	(湿 潤 度)	自 然 肥 沃 力	(保 固 定 力)	(土 層 塩 基 状 態)	養 分 分 析 量	(置 換 性 石 灰 含 量)	(" " 苦 土)	(" " 加 里)	(有 効 態 磷 酸 度)	障 害 性	(化 学 的 障 害 性)	(物 理 的 障 害 性)	傾 斜 傾 斜	(自 然 傾 斜)	(人 為 傾 斜)	(侵 蝕 度)	(耐 蝕 性)	(耐 風 蝕 性)			
Ⅲ	t	d	g	p		w				f		n					i			s									
	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	2	1	1	Ⅲ	1	2	(2)	Ⅱ	1	2	1	Ⅲ	1	1	3	1	1	Ⅲ	1	3	Ⅱ	1	3	Ⅱ	
簡略分級式		Ⅲ w n i Ⅱ t f																											

A 土壤区の特徴

この土壤区は二見ヶ岡統に属する。表土の厚さは19cm内外。有効土層は1m以上。表土は礫なく、火山灰を混入し、泥炭の分解が進んで腐植土を呈する。

第2層はヨシを構成植物とする低位泥炭であるが、第3層(65cm以下)は沖積層土壤になつているところもある。下層の排水は悪い。保肥力大、固定力小、酸性は弱い。作土の石灰、苦土、磷酸等は稍多いが、加里に欠乏している。

特殊の障害性としては、下層が泥炭で、排水が不良な点にあるが、排水、客土、堆肥施用、酸性矯正等の土壤改良によつて生産力は向上すると考えられる。

B 植生及び利用状況

殆んど耕地として利用され、馬鈴薯、燕麦、豆類を作付している。収量は一般に低い。

C 地力保全上の問題点

本土壤区は65cm内外迄低位泥炭から成り、排水は不良で、生産力は高いとは考えられないので、排水、客土、腐熟堆厩肥の施用、施肥の合理化により、地力の保全、増強を図る事が大切である。

D 分布

北海道網走市二見ヶ岡

記載責任者 野村 琥・後藤計二・上坂晶司(北海道立中央農業試験場)

日 付 昭和37年3月31日

日 付 昭和45年3月31日

3. 保全対策地区の区分および説明

1) 保全対策区の説明

土壌断面の性状、土壌改良対策などを考慮のうえ、次の7保全対策区を設定した。

保全対策地区番号	保全対策地区名	該当土壌区名	面積 (ha)	主な特徴	重要な保全対策
1	越歳保全対策区	越歳、能取1、能取2、八坂1、八坂2、明治卯原内南、能取中央、大成、能取北、卯原内西岐阜、呼人	4,773	①土性が細粒質で粘着性がやや強く、一般に作土層が薄い。 ②下層が甚だ堅密である ③降雨に際し一時的に過湿となり乾燥時には過干になり易い。 ④下層が塩基に乏しく未飽和である。	①心土破碎、心土耕を要する ②深耕を要する。深耕に際しては酸性矯正、燐による燐酸と苦土の補給を図る。 ③草地には加里の施用もゆるがせにできない。 ④堆肥、緑肥など有機物の多施 ⑤侵蝕防止
2	萱野保全対策区	明生、浦士別東、稲富北、萱野1、萱野2、嘉多山1、嘉多山2、嘉多山3	4,821	①土壌が軽しように風蝕が発生する。 ②嘉多山を除き腐植含量が少ない ③下層の塩基は未飽和で特に苦土、加里、燐酸が少ない。	①防風林の設置 ②有機物の多施用 ③深耕によつて燐酸の多施用、塩基の補給を図る。
3	卯原内保全対策区	卯原内1、卯原内2、卯原内3、丸万 美岬	358	①下層に炭化沈積物が存在し時期的に過湿である。 ②腐植含量が多く保水性が強いため一層湿性を呈する。 ③燐酸吸収係数が大きく燐酸が少ない。また塩基特に苦土加里の少ないところが多い。	①全域暗渠の施行を要する。 ②保水性を弱めるため心土破碎により下層を膨軟化し排水と同時に団粒化を図る。 ③燐酸の多施用、苦土、加里の増施 ④有機物の施用

4	浜卯原内	浜小清水、浜卯原内、浜能取東、呼人北	73	①土性が粗く過干になりやすい。 ②保肥力が小さい。	①マルチ或は粘土客土を要する。 ②有機物の多施用
5	稲富西	チブサ藻琴、卯原内北、稲富西能取西1、能取西2	560	①狭少な低地で河川蛇行し地下水位が高い ②腐植含量少ない	①全面暗渠排水を施行しさらに一部河川改修を要する。 ②有機物の多施用により地力維持を図る。
6	浜能取	浜能取嘉多山東	5	①地下水位が高い ②浜能取は塩害をうける	①能取湖の湖口閉塞防止を要する。能取湖、網走湖の水位低下を要する。 ②嘉多山東は粘土客土が望ましい。
7	二見ヶ丘	浜能取、北斗卯原内中央、礪沸東、二見ヶ丘	600	①河川が蛇行し地下水位が高い。 ②下層は塩基未飽和である。	①系統的に河川改修、明渠、暗渠を要する。 ②酸性矯正、燐燐による燐酸、苦土および加里の多施用 ③粘土客土

2) 保全対策地区説明

<越歳保全対策地区>

(1) 分布

郡市町村名	畑面積(ha)	備考(該当土壌区名)
網走市	4,773	越歳、能取1、能取2、八坂1、八坂2、明治、卯原内南、能取中央大成、能取北、卯原内西、岐阜、呼人

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

土性が細粒質で粘着性がやや強く土壌は固結しやすく、かつ下層は堅密な堆積で作土層は薄い。従つて降雨時は過湿となり、乾燥時には過干となり易い。下層が塩基に未飽和で酸性を呈する。根圏域がせまくかつ傾斜地である。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地、対象面積	実施方法	対策資材および機械器具の種類、型式、数量
1.心土破碎 心土耕、深耕	全区 4,773	大型機械	深耕に際しては炭カル400～600kg、熔燐100kg
2.侵蝕防止	全区 4,773	等高線栽培 緑作帯	
3.有機物	全区 4,773	堆肥舎、尿溜	稗物残渣利用の場合は春鋤込の場合窒素2割内外増施

<萱野保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積(ha)	備考(該当土壌区名)
網走市	4,821	明生、浦士別東、稲富北、萱野1、萱野2、嘉多山1、嘉多山2、嘉多山3

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

土壌は火山灰で軽しよなため風蝕の被害が大きい。嘉多山を除き腐植含量が少ない。下層の塩基は未飽和で苦土、加里が少なく、また燐酸も少ない。保肥力が小さい。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地、対象面積	実施方法	対策資材および機械器具の種類、型式、数量
防風林	全区 4,821	—	—
深耕	全区 4,821	大型機械	深耕に際して炭カル100～300kg、熔燐200kg、加里増施
有機物	全区 4,821	堆肥舎、尿溜	稗物残渣利用の場合春鋤込の際には窒素2～3割増施

<卯原内保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積ha	備考(該当土壌区名)
網走市	358	卯原内1、卯原内2、卯原3、丸万、美岬

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

腐植含量が多くかつ厚い土壌で、地表より50～60cm以下堅密となり湿性を呈する。生産性は高いが降雨の多い年は湿性が強く冷害の被害の大きいところである。土壌は固定力が強く燐酸が少ないこと、また塩基特に苦土、加里の少ないところが多い。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地、対象面積	実施方法	対策資材および機械器具の種類、型式、数量
暗 渠	全 区 358	大 型 機 械	トレンチャー
心土破碎	全 区 358	大 型 機 械	心土破碎機
有 機 物	358	堆肥舎、尿溜	稗物残渣利用の場合春鋤込みでは窒素2～3割増す。燐澆多施用、苦土、加里の補給。

<浜卯原内保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積(ha)	備 考((該 当 土 壤 区 名)
網 走 市	73	浜小清水、浜卯原内、浜能取東、呼入北

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

土性が粗く透水性が大きく保水性が小さいため旱害をうける。また土壌の保肥力は小さい。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地、対象面積	実施方法	対策資材および機械器具の種類、型式、数量
旱害防止	全 区 73	マルチ、粘土客土	粘土客土の場合極力多い程良い。尚山土の場合炭カル、燐澆の施用はゆるがせにできない。
有 機 物	全 区 73		完熟したものを利用

<稲富西保全対策地区>

(1) 分布状況

郡市町村名	畑面積(ha)	備 考((該 当 土 壤 区 名)
網 走 市	560	チブサ藻琴、卯原内北、稲富西、能取西1、能取西2

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

狭少な河川低地で、河川は蛇行し地下水位は高い。腐植含量は能取西2を除いて少なく、卯原内北、稲富西、能取西は粘質で土壌は固結しやすい。養肥分は多く生産性は高いが降雨の多い年は冷害の被害大きい。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地、対象面積	実施方法	対策資材および機械器具の種類、型式、数量
排 水	全 区 560ha	河川改修、一部築堤、明渠、暗渠	
有 機 物	全 区 560		稗物残渣利用の際春先鋤込みでは窒素2～3割増施

<浜能取保全対策地区>

(1) 分布状況

郡 市 町 村 名	畑 面 積 (ha)	備 考 (該 当 土 壤 名)
網 走 市	5	浜能取、嘉多山東

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

能取湖、網走湖に面して分布し、湖水面の上下によつて地下水水位が上下し、一般に土地の地下水水位が高く過湿である。浜能取は塩害をうける。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地、対象面積	実施方法	対策資材および機械器具の種類、型式、数量
排 水	全 区 5	湖水面の水位低下、湖口閉塞防止工事の施行	
客 土	全 区 5	粘土客土	客土に際し炭カル、熔燐の改良資材施用

<二見ヶ岡保全対策地区>

(1) 分布状況

郡 市 町 村 名	畑 面 積 (ha)	備 考 (該 当 土 壤 区 名)
網 走 市	600	浜能取、北斗、卯原内中央、瀧沸東、二見ヶ岡

(2) 保全対策地区の特徴と問題点

河川の下流域にあつて地下水水位が著るしく高いところが多く、一部では滞水し利用されていないところが多い。土壌は黒泥、泥炭であるが氾濫土の混入が多いこと、火山灰が薄層であるが堆積し天然客土となり改良によつては耕地化しやすい特徴を持っている。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地、対象面積	実施方法	対策資材および機械器具の種類、型式、数量
排 水	全 区 600ha	河川改修、築堤 明渠、暗渠	
酸性改良 燐酸資材施用	全 区 600ha		炭カル400~1,000kg、熔燐250kg
粘 土 客 土	全 区 600ha		客土に際し適正炭カル、熔燐の改良資材施用